
声に出来ない“アイシテル”

みやこ 京一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

声に出来ない“アイシテル”

【Nコード】

N2271Q

【作者名】

みやこ 京一

【あらすじ】

喉から血が出るほど叫んでも、私の『愛してる』はあなたの耳には届かない。＊病気が原因で声を失った少女 チ力。

『愛してる』なんて言葉、信じるものか。どうせみんな俺の前からいなくなるんだ。＊両親の死により、自分に向けられる言葉に不快感を抱く晃。

そんな2人が出逢い、やがて惹かれあう。

『どんなに金があってもいくら家が広くても、チカがいないと俺は幸せになれないよ』*チカが障害者であっても愛し続けると晃は誓う。しかし、取り巻くさまざまな環境が二人の想いを邪魔する…。

小さな恋物語を　どうか見守ってあげてください。

(1) 言葉なんか… (前書き)

過去に某携帯小説サイトに掲載していた作品の改訂版となります。

（１）言葉なんか…

「かつたりいなあ」

家庭の事情で伯父夫婦に引き取られた俺、桜井さくらい 晃あきら。

高３の９月という半端な時期に転校して２日目の放課後、教室を出るなり口を付いたのは、このセリフだ。

親がいない俺はこれまで祖母と暮らしていた。

その祖母が先日亡くなって色々な事に無気力になり、高校も中退するつもりだった。

ところが、引き取ってくれた伯父さんが、『人生経験として、高校はきちんと３年間通いなさい』と言ってきたため、中退の話はなくなってしまった。

今すぐ何かしたいことがあるわけでもないのに、言われたとおり

——だいぶ渋々といった感じだったが——高校は通う事に。

いくつものホテルを経営していてそこそこ金のある伯父夫婦は、家から少し遠いがカリキュラムや設備が整っている私立の高校を進めた。

だが、朝起きる事が苦手な俺としては少しでも長く寝ていられるようにと、一番近くの学校を選んだのだ。

そして、通いやすい距離にあるこの公立高校に転入。

転校初日に小山という気の合う友達もできたし、通学に便利だし。しかも、先生は口うるさくなくて自由な校風。

本当なら学校生活を満喫できるはずなのだが、とにかくかつた
くてしかたがない。

それというのも、俺の姿を見てひそひそと何か言っている女子達
の存在が、とてつもなくうるさくてたまらなかった。

いや、声のボリュームは囁くほどののだが、気になるのはその内
容。

気になるというか、気に入らない。

耳に入ってくるのは、

『かつこいい』

『素敵』

『彼氏にしたい』

『こつち向いて』

という、こつちからすれば下らなすぎる囁きの数々。

——こんな俺のどこがいいんだ？

苦いため息をついた。

外見のせいで面倒に巻き込まれているためか、俺はいまいち自分
のことが好きになれないでいる。

父親の長身が遺伝した事と、子供の頃から体を動かすのが大好き

だったことが幸いしてか、バランスよく成長した。

顔はまあ、悪くないほうだろう。子供の頃から、モデル事務所とか芸能事務所からスカウトの声がかかっていたくらいだし。興味がないので、その話はすべて断っていたが。

中学に入った頃から、俺の外見でしか“俺”を判断しない女が頻繁に群がってきて、それが鬱陶しく感じた。

俺の顔にしか興味が無いくせに、『あなたの事が、心の底から好きなの』なんて言われても、誰が信じるものか。

『あなたが一番大切よ』

『愛してる』

『ずっとそばにいるから』

そんな言葉、上辺だけだ。

どうせ、いつかは俺の前からいなくなるに決まってる。

俺の両親みたいに。

小学6年生だった5年前。ちょうど今と同じ季節。
俺を残して自殺してしまった父親と母親。

その日の朝までは、これまでと何一つ変わらなかった。

学校生活をなにかと気にかけてくれていた父親。

笑顔で送り出してくれた母親。

それが。

学校から帰ってくると、何もかもが一変していた……。

いつものように玄関を開けると、仕事に行っているはずの父親の靴が玄関にある。

忘れ物でも取りに来たのかと思って、大して気にも留めず家に上がった。

「ただいま」

声をかけても返事がない。

「お母さん？」

専業主婦の母親は、俺が帰ってくる時間にはいつもリビングにいるはず。

それなのに、この日はリビングどころか、キッチンにも洗面所にもいない。

玄関の戸に鍵はかかっていたから外出したのかとも思ったけれど、あの母親がメモを残さず出かけるはずはない。

とにかく、家の中の様子がおかしかった。

異常なほど静まりかえった家。

父親の靴があるのに、人の気配がしないのは何故か。
母親はどこにいるのか。

「どうしたんだろう？」

変に思いながらも、荷物を置くために自分に部屋に向かった。

両親の寝室の前を通ると、違和感が。

「あれ？」

几帳面な両親は扉を開けたままにはしない。なのに、寝室のドアが細く開いている。

「ドアノブの調子が悪いのかな？」

閉めようと手を伸ばした時、ベッドに横たわる誰かの姿が目に入った。

具合の悪い父親が寝ているのだろうか？

それにしても様子がおかしい。どうして、朝着て出たスーツのままなのだろうか。

そして、父親の隣にもう1人寝ている。

服装で、父親の横にいるのが誰だか分かった。その人も、俺が学校に行く時に見送ってくれたままの服装だったから。

——何でお母さんまで寝てるの！？

なんだかものすごく嫌な予感がするが、思い切って室内に入った。

「ねえ」

2人に向かって声をかけるけれど、反応はない。

一歩、また一歩とベッドに歩み寄る。

「お父さん。お母さ……」

ベッドの脇まで来た時、俺は言葉を飲み込んだ。

そこにいたのは、首にロープが食い込んで顔が紫に変色した母親。胸に包丁が突き立てられ、青白い顔をした父親。

そして枕元には

『晃、ごめんな』

『許してね』

父親、母親それぞれの字で書かれた短いメッセージ。

——— どういう事……！？

子供の俺に理解できる範疇を大きくはみ出した目前の光景に、俺は気を失い、その場に倒れこんだ。

ふと気がついた時には、両親の葬儀が終わっていた。

どうして2人が命を絶たなければならなかったのか？

親戚は誰一人として、両親の死の理由を教えてくれなかった。
まだ子供の俺には受け止められないほど、衝撃的な理由なのだろうか。

初めのうちはしつこく聞いて回っていたけれど、結局分からずじまい。

もしかしたら、誰も真相を知らないのかも知れない。

それに、理由が分かったところで両親が生き返るわけではないのだ。

ほどなく、俺は両親の死の真相を突き止める事を諦めた。

『晃は俺の宝物だ。何があっても、守ってやるからな』

『晃に彼女が出来るまで、いつも一緒よ』

飽きもせず、毎日繰り返されていた両親の言葉。

あの日が来るまでは、本気で両親の言葉を信じていたのだ。

それなのに、何も告げず、俺を残して彼等は突然死んでしまった。
彼等は自らの言葉を自分から裏切った。

自分にとって絶対の存在だった両親を納得の行かない形で失った俺は、この先、一体何を信じて生きていけばいいのだろう。

俺は近くに住んでいる母方の祖母の家に引き取られた。
そこなら、今通っている学校を変えなくても済むから。

両親の葬儀から二週間ほど経った日から、俺は親の事を一切口に
しなくなった。

滅多な事では笑わなくなった。

自分に向けられる言葉を信用する事もやめた……。

(1) 言葉なんか… (後書き)

言葉はなくとも想いは伝わるのか。そんな切なさが表現できたらいいなあ、と思っています。

でも、ハッピーエンドはお約束します。

(2) 物言わぬ少女

放課後の廊下は帰宅する生徒や、部活に向かう生徒で溢れている。俺が廊下を数歩進んだだけで、そこかしこから女子の囁きが始まった。

「はぁ……」

まわりつく視線と囁きに再びため息が出る。

「どうした？辛気臭い顔しちゃって」

背後から声をかけてきたのは、この学校での友人第一号、小山だった。

「相変わらず雑音だらけだなあと思って」

一応は周囲に気を遣って、小山にしか聞こえないように小さく言う。

「ひどいなあ。“カッコいい”って言われたら、たいていの男は大喜びするのに」

優しいと評判のこいつは、俺が冷たい言葉を口にするたびに女子の味方をする。

だが、歩いているだけでジロジロ見られるのは結構苦痛なのだ。

「興味本位で言われ続ける俺の身になってみる。ただの迷惑だ」

「ははっ。桜井って、ほんとにひどい奴。……いけね、課題のノート忘れたっ」

小山はバタバタと教室へ逆戻り。

「ったく。いちいちうるさいんだよなあ、あいつは」

そんな小山の背中を見送り余所見をしていたら、廊下の角から出

てきた人に気がつかなかった。

ドン、と体がぶつかった鈍い音。

そのすぐ後に俺のバッグがドサリと落ちる。

「いつてえ」

前を見ると、俺の胸ほどにしか身長がない小柄な少女がいた。

大きな瞳を目いっぱい開いて、驚いた表情でこちらを見ている。

——これって、余所見してた俺が悪いよなあ。

「ごめん。ケガはない？」

女子に無愛想な俺でも、自分が悪い時には謝るくらいはする。

声をかけると少女は無言で首を横に振り、そして俺のバッグを拾ってホコリを掃い始めた。

校庭に面しているこの廊下は、風が少し吹き込んだだけでうつすらとホコリが溜まる。

先程落とした俺の黒いスポーツバッグには、所々についた白い汚れが目立っていた。

少女は小さな手で一生懸命掃い続ける。

丁寧にはたいて、すっかり綺麗になったカバンを差し出してきた

——やはり無言で。

「ありがとう」

俺が受け取っても、ただうなずくだけ。

——怒ってんのか？確かに前を見ていなかった俺が悪いんだけど。

ずっと無言の少女の態度に、俺の不機嫌さがぶり返す。

——でも、謝ったじゃねえか。お礼も言ったしよ。

さっきの雑音の事もあり、ついイライラとした強い口調で少女に言う。

「あんた、何で全然しゃべんないの？黙っていられると、すっげえ気分悪いんだけど」

その言葉を聞いた少女は目を見開き、次の瞬間、泣きそうな顔になった。

——やべっ。さすがに今のはきつい言い方だよな。

言い過ぎたかと反省するも、一度発した言葉は戻る事はない。

内心ヒヤリとしたが、少女は泣き出すこともなく、頭をペコリと下げて足早に立ち去っていった。

「……何なんだよ、あいつ」

ボソリと呟いたのを、教室まで忘れ物を取りに行って帰ってきたばかりの小山に聞かれる。

「あいつって？」

俺は既に15メートルほど先の少女の背中を指差した。

「ああ、チカちゃんか」

小山が親しげに名前を口にする。

「チカちゃん？」

「そ、1年の大野　チカちゃん。俺のイトコなんだ。まあ、転入2日目の桜井は知らないか。サラサラのショートカットに、ぱっちり瞳。色が白くてちっちゃくて、かわいいよな。けっこう人気があ

るんだぜ」

やけに嬉しそうに話す小山。きつと、あの少女とは仲がいいのだろう。

「ふうん」

興味のない俺はいい加減な相槌を打った。

そんな俺を気にすることもなく、話を続ける。

「性格も素直で、すっごくいい子だよ。でも……」
今まで明るかった小山の声が、急に暗くなった。

「チカちゃん、声が出せないんだ」

「え!？」

驚いて隣りの小山をまじまじと見る。

小山は『あんまり人に言うことじゃないんだけど』と前置きしてから、小さい声で話し始めた。

「12歳までは話せていたんだ。でも、検査で声帯に異常が見つかってね。命に関わる事だから、手術して声帯を取り除いたんだよ。だからそれ以来、話すことはできない」

まるで自分のことのように、つらそうな表情をしている小山。

俺は愕然とした。

『黙っていられると、すっげえ気分悪いけど』

病気で声を失った少女に向かって、何てひどいセリフだろう。とたんに申し訳ない気持ちで胸がいつぱいになる。

小山以上に、自分の顔がっらそうになっているのが分かった。

「声が出ない以外は何の問題もないからね。だから養護学校じゃなくって、こうやって普通の高校に通ってる」

小山がふと話を止めて、俺を覗き込む。

「どうした？そんな暗い顔して」

今はもうとつくに姿がないのに、彼女が歩いていった方向をじつと見つめて呟いた。

「俺、あの子にひどい事言っただけ……」

去っていった背中が、見た目以上に小さく見えたのは気のせいだろうか？

彼女はあの後、泣いたのだろうか？

もし、泣いていたとしたら。

俺の言葉のせいで泣いていたら……。

そう考えるだけで、胸が更に締め付けられて苦しくなる。

「さっきの女子たちにも雑音とか迷惑とか言ってたじゃないか。それだってひどい事だぞ」

苦笑しながら、それでもたしなめるように小山が言う。

「違う。……それとは違うんだ」

俺は力なく首を振った。

「言ってはいけないことを言っただけ、傷つけた」

俺のあのセリフはものすごく攻撃的だった。事情を知らなかったからと言って、許されるものじゃない。

この時の俺はすごく動揺していて、いつもふてくされるか、だるそうな俺しか見ていない小山は少し驚いていた。

—— 謝らなきゃ、謝らなきゃ。

どうしてそんなに必死に思ったのかは分からない。

ただ、今にも泣き出してしまうかのような、あの悲しい顔が忘れられないのだ。

俺は小山の腕をグツと掴む。

「いてっ。痛いつて、桜井。どうしたんだよ、急に？」

「謝らないといけないんだ！あの子が行きそうな所に心当たりはないか？」

俺の勢いに飲まれて、目を白黒させている小山。

何回かまばたきをした後、教えてくれた。

「向かった先はたぶん図書室だよ。図書委員だっただけから、放課後はだいたい図書室にいるはずだけど」

「図書室だな？サンキュッ」

俺はカバンを肩に担いで、廊下を走り出した。

幸い、先生がいない。俺は全速力で図書室を目指す。

相変わらず女子たちは囁いていたけれど、そんな事も気にならないほど急いでいた。

(3) 心の傷

休むことなく駆け通して図書室へ。

息を落ち着かせて、扉に手をかけた。

木製の古い引き戸がガラガラと音を立てる。

その音に気がついて振り返ったのは、さっきの少女。他には誰もいない。

俺はまっすぐにその少女に向かって歩いた。

彼女は突然現れた俺に驚いて固まっていたが、顔を見るなり申し訳ないといった表情でぺこぺこ頭を下げ始めた。

「文句を言いに来た訳じゃないから」

彼女の肩にそっと手を置いて、お辞儀を止めさせる。

「俺の方が悪いことしたし。だから、もう頭を下げないで」

彼女は俺の言っていることがいまいちよく分からないらしく、大きな瞳できょとんと見上げてきた。

そんな彼女に対して、俺は精一杯真剣な顔になる。

「あの……、さっきはひどい事を言つてごめん」

一歩離れて、頭を下げる。

「転校してきたばかりで、君の事ぜんぜん知らなくて……。いや、事情を知らなくても、あんな言い方はひどすぎたよな。本当にごめん。」

改めて深く頭を下げた。

どれだけ謝れば、この子に償えるだろう。

一瞬とはいえ、ものすごく傷ついた顔をさせてしまった事が本当に申し訳なくって。

俺は何度も頭を下げ、ひたすら謝った。

しばらく経って、彼女が俺の右肩をポンポンと軽く叩いた。顔を上げると、静かな笑みを浮かべてゆっくりと首を横に振っている。

その瞳は確かに微笑んでいるのに、ほんの少しだけ寂しそうだった。

彼女はスカートのポケットからメモ帳とペンを取り出し、サラサラと何かを書いて、そのメモを俺に見せた。

素直な性格が表れている綺麗な文字を、俺は読み上げる。

「事情を知らない人にあんな風に言われるのはよくあることです。だから、気にしないでください」

読み終えて彼女を見ると、大きく頷いている。

そして再びペンを走らせ、メモを差し出してきた。

“平気です、慣れてますから”

そこにあつたのは短い一文。

だが、ものすごく胸を締め付ける言葉だった。

俺はそんな言葉を書く彼女に、やるせなさを強く感じる。

「そんなはずないだろっ!!」

ガシツと彼女の肩をつかんだ。

「平気だなんて……。慣れるだなんて……。そんなはずない!」

感情のままに声を荒立てる。

「何度言われたって傷付くに決まってる!心の痛みに慣れなんて、ありえない!」

心の傷は消える事はない。

後から後から重なって、どんどん深くなっていく。

どんなに時間が経っても、完全に癒えることはない。

5年経った今でも、親によって傷つけられた俺の心の傷はふさがっていない。

「君は平気なふりをしているだけだ。慣れるなんて、そんなのあるはずないっ!」

静かな図書室に俺の声が響いた。

ふと我に返ると、目の前の彼女は呆氣に取られてポカンと口を開けている。

「あつ、ごめん」

俺は慌てて彼女から手を放した。

「謝りに来たのに、怒鳴ったりして悪かった……」

——何やってんだ、俺。

あまりの失態に自分が情けなくなり、シユンと俯いて肩を落とす。すると彼女がプツと吹き出し、笑い出した。

もちろん声は出ていないけれど、彼女の素直な表情を見ると、笑い声が聞えてくるようだ。

——なんで、笑われてんの？

今度は俺が呆氣に取られた。

笑い続けた彼女が、ようやく落ち着いてメモに書き込んでゆく。

“不機嫌だったり、申し訳なさそうな顔したり。大きな声を出したと思ったら、落ち込んだりして、忙しい人だなあって思ったんです。気を悪くしたなら謝ります。ごめんなさい”

俺が読み終えると同時に、頭を下げる彼女。

「あ、いや……。気なんて、全然悪くしてないから」

そう言っと、彼女は胸に手を当ててホッと息を吐く。

その仕草に、俺もホツとする。

「俺もさ、言葉で傷つけられたり裏切られたりした事があるから、そのつらさは分かるんだ。だから、ついムキになって……。驚かせて悪かったよ」

バツが悪い俺は頭をかいた。

クスツと笑った彼女は首を横に振る。

今度は悲しそうな瞳ではなく、穏やかな笑顔だった。

「それと、このバッグのホコリ払ってくれてありがとう。すっかり綺麗になったよ」

俺はバッグを持ち上げて彼女に見せた。

彼女は少しはにかんだ笑顔と共に、メモを差し出す。

“私は「ごめんなさい」言えないから、態度で示すしかないんです。でも、分かりづらいですよね”

「いや。俺が冷静だったら、きっと気付いてた」

そう言うのと、俺を見る彼女の瞳が柔らかく細められる。

彼女がわずかに首を傾けると、サラサラの髪がなめらかな頬の上で少し揺れた。

「じゃ、そろそろ行くから。作業の邪魔してごめんな、大野 チカちゃん」

なぜか、彼女の名前がスルリと零れた。

ビクツとした彼女が、大急ぎでメモを書いて俺に見せる。

“どうして私の名前を知っているんですか？”

「ああ、さっき友達が言ってた。可愛くって有名なんだってね」

すると真っ白な頬を桃みたいにピンクに染めて、また何やら書いている。

“私は可愛くなんかありません。子供っぽいだけです。それに、有名なのは桜井先輩です”

見せられたメモにはそう書いてあった。

「どうして俺の名前知ってんの？」

クスクス笑いながら、彼女はペンを走らせる。

“すごくかつこいい先輩が転校してきたって、友達が大騒ぎしてます。それで、名前を知りました”

——やれやれ。同学年だけじゃなくて、1年でも騒がれてんのか。

普通なら喜ぶところだろうが、俺としては気が重いだけしかない。

彼女はまだ何か書いている。

「なにになに？」「私、顔がいい人は苦手なんです。なんだか高飛車な感じがして」。……え！？」

——俺って、この子にそんな風に思われてたのか！

確かに、あの廊下での態度は冷たく偉そうで、初めて会った彼女

にそう見られても仕方ない。

気が重くなつた事に加えて、なんだか分からないけど、ものすごくショックだ。

しょんぼりと目を伏せる俺に、彼女は次のページに書いていたメモを差し出してきた。

—— もっとショックなことが書いてあつたらどうしよう。

ドキドキしながら、文字を目で追う。

ところが、そこに書かれていたのはちっともショックな事ではなくて。

“でも、桜井先輩はそんなことないんですね。表情がコロコロ変わって、子供みたいなのところもありますし。それに、心の傷を心配してくれる優しい人です”

—— よかった。

そつと安堵のため息を漏らす。

彼女に嫌われていなかった事が嬉しかった。

「俺は高飛車なんかじゃないよ」

苦笑いしながらそう言うと、すかさず差し出されるメモ。

“顔がいい事是否定しないんですね”

下から俺の顔をチロリと見上げてくる。

「あつ、そのつ」

彼女の鋭い突っ込みに、言葉が出ない。

あたふたしていると、ペロツと舌を出す彼女。

“意地悪なこと書いて、ごめんなさい”

そして、少し間を空けた下のほうに

“先輩は本当にかっこいいです”
と書いてあった。

「え？」

びつくりしてメモから顔を上げると、彼女の頬が苺のように真っ赤に染まっていた。

顔の事を人に言われるのは嫌いだった。

だけど、彼女にかっこいいと言われた事がなんだか嬉しくて。

これまでにない感情に、どうしていいか分からない。

「う……、えと……、あ、ありがとう」

結果、間抜けな返事しかできない俺。

彼女はそんな俺にちょこんと頭を下げると、隣りの司書室へと入っていった。

（１）伯母さん

学校を出て、俺は途中にある本屋でしばらく立ち読みし、そこで今日発売の漫画を買ってから帰宅した。

俺を引き取ってくれた伯父夫婦は日本はもちろん、海外にも事業展開しているホテルのオーナーで、自宅もホテルのように大きい。

子供のいない伯父夫婦は俺のことを自分の子供のように可愛がってくれていて、小さい頃からよく面倒を見てもらっていた。過去に何度も家に遊びに来ていたはずなのに、いざそこで生活するとなると、その迫力に圧倒される。

広い庭には警備のためにドーベルマンを３頭、シェパードを２頭飼っていた。

子供の頃から見慣れているとはいえ、帰宅するたびに犬達に一斉に囲まれると少し怖い。

だけど、俺がここで暮らす事を彼らは認めたのか、絶対に噛み付いてきたりはしなかった。

それどころか、遊んで欲しそうに俺の周りをぐるぐる回る。

「今日は遅いから、また今度な」

学校ではけして見せない微笑みを浮かべながら、１匹ずつ頭をなでてやった。

動物は好きだ——俺を裏切らないから。

余計な言葉も話さないし、外見で人を判断したりしないから。

「ただいま」

大きな扉を開けて入ると、廊下の奥から伯母さんが出てきた。

「お帰りなさい。今日は遅かったのね」

ややふつくらとした体型ではあるが、動きはきびきびとしている。伯父さんと一緒にホテルの経営に携わっているためか、はきはきとした口調。

でも、優しい声。

「本屋に寄っていたから。連絡すればよかった？」

「ううん。このくらいの時間に帰宅なんて、よくあるわよね。私が世話を焼きすぎるだけ。晃君はもう高3なのにね、ふふっ」

47歳の伯母さんが肩をすくめる仕草は意外と合っている。

生まれた時からの俺を知っている伯母さんはもともと俺を甘やかしてくれていたけれど、一緒に暮らすようになってからは、ますます甘くなつたような気がする。

伯父さんが『私と晃のどっちが大事なんだ？』と、苦笑混じりに言っていたほどだ。

伯母さんの事は嫌いじゃない。むしろ、好きな部類に入る。

でも、また俺の前から消えてしまったら？

両親の様に突然いなくなってしまうたら……？

そんなことを考えるだけでゾツとする。

きつと、今度こそ立ち直れないだろう。

だから俺は申し訳ないと思いつつも、心の中で一線を引いていた。
これ以上、親しくならないように。

大切な人を失う苦しみは、もう二度と味わいたくないから。

伯父さんも伯母さんも、こんな俺に気がついているだろうけれど、
あえて何も言ってこなかった。

「もうすぐ順二さんが帰ってくるから、そうしたらみんなで夕飯に
しましょうね」

靴からスリッパに履き替えている時、伯母さんが言った。

仕事で全国を飛びまわっている伯父さんは、月の三分の一は支社
への出張。

出張がない時は本社で仕事をしているが、会議が長引いたり、接

待とかで、たいていは10時を過ぎてから帰ってくる。

「伯父さんが7時前に帰ってくるなんて珍しいね」

「ほら。あの人、今週はまだ一度も晃君とゆっくり話してないでしょ。『そろそろ顔を合わせないと、忘れられるー』って言ってたわ。急ぎじゃない仕事は明日に回したみたい」

手を口に当てて、クスクスと伯母さんが笑う。

「ははっ。なんか伯父さんのほうが俺より子供だ」

どんな表情で伯母さんに電話してきたのか簡単に想像出来て、俺は思わず声を出して笑ってしまった。

「……ねえ、晃君。今日、学校で何かあった？」

ふいに伯母さんが尋ねてきた。

「どうして？」

俺は首を傾げる。

「なんかね。いつもと違って、顔つきが楽しそうで穏やかだから。いい事でもあったのかなと思って」

「え？」

——顔つき？自分ではいつもと変わらないつもりでいたけど。

伯母さんはいっこりと笑う。

「晃君はモテるからねえ。彼女が出来たって所かしら」
なにやら激しく誤解しているらしい。

——そんなに俺の表情は違ってるのか？

少しだけ、一日を振り返る。

——何かあったか？

いつも通り、女子達の雑音がうるさかった。
それから……。

—— あっ、小山のイトコに会ったな。これまでにないタイプの女子だったわけ。

出来事といえば、そのぐらいか。

「別に、大した事はなかったよ。もちろん、彼女が出来たわけでもないし」

自分の表情が変わるほどの出来事に心当たりのない俺がそう答えると、伯母さんはわずかに目を見張る。

「……そう。変なこと訊いちゃってごめんなさい。食事の前に着替えてきたら？」

「分かった」

俺は床に置いていたバッグと本を持って、2階奥の自分の部屋に向かう。

その背中を、伯母さんは嬉しそうに見ていた。

(2) 伯父さん

着替えが済んだところで、ドアのすぐ横に据え付けられた内線が鳴る。

この家はあまりに大きすぎて部屋まで呼びにくるのが面倒らしく、各部屋に一台ずつ内線電話が設置されていた。

連絡の内容は伯父さんが帰ってきたとのこと。

俺は電気を消して、部屋を出た。

ダイニングに入ると、スーツの上着を脱いでネクタイを緩めた伯父さんがもう座っていた。

「順二伯父さん、おかえりなさい」

あいさつして、俺は自分の席に座る。

4人がけテーブルの伯父さんの向かい側だ。

ちなみにこのテーブルは伯父さん、伯母さん、俺が食事するためのもの。

来客用のダイニングには40人がゆうに座れる巨大な長テーブルがある。各支社の幹部を集めたパーティで使われるんだとか。

一般庶民出身の俺としては、度肝を抜かれる事がこの家にはたくさんあるのだ。

「元気にしてるか？」

人懐っこい笑顔の伯父さん。

今年で50歳になったとは思えないほど若々しくて、弟の父さんのほうがいつも年上に見えていたっけ。

「うん。元気だけど」

いつものように答えたただけなのに、伯父さんはじっと俺の顔を見ている。

「どうかした？」

「ん、いや。別に」

口元を緩めて、静かに笑っている。

そつえば、さっきの伯母さんもこんな顔をしていた。

—— 2人とも、何を誤解しているんだろう。

彼らの意味不明な様子に、そつと首を捻った。

「学校はどうだ？」

ニコニコと俺に話向ける伯父さん。

「まだ2日目だから、よく分からないよ」

「お前の事だから、クラス中の女の子の視線を集めているんだろ？」

ニヤリと楽しそうに伯父さんが笑う。

「どうだかねえ」

ハア、とため息をつく俺。

クラスどころか、学年関係なく盛り上がっているらしい、とは言えなかった。口にしただけで、精神的にぐったりするから。

俺は静かな学校生活を送りたいのに……。

「桜井家の男は、みんな美形だからなあ」

伯父さんが言ったところで、鍋を持った伯母さんがキッチンから出てくる。

「そうやって、自分もかつこいいんだって事が言いたいんでしょ？」
苦笑しながら、テーブルの中央に鍋を置いた。

「話は後にして、食事にしましょ」

伯母さんが鍋のフタをあけると、温かな湯気が立ち上り、クリームシチューのいい匂いがした。

食事をしながら前に座る伯父さんをそつと見る。

長男の雄一伯父さんよりも、父さんに似ている。歳が近いせいだろうか。

顔立ちはもちろん、声や仕草なんかも似ているから、つい、父さんの面影を求めてしまう。

この人は伯父さんだと分かっているのに、ほんの一瞬、父さんに見えてくる。

伯母さん同様に俺のことを可愛がってくれていて、『将来養子として、この家の籍に入ってもらいたい』と、言われた事があった。祖母の家で暮らしていた3年前、そんな話を何度もされた。

その時の俺は、自分に向けられる言葉を信用する事ができなくて、父さんによく似ている伯父さんからのその言葉が、余計につらくて。

どう答えたらいいかわからず、返事が出来なかった。

だけど、一緒に暮らすようになって、俺が戸惑うほど優しくしてくれている。

あの時に比べれば、言葉に対する不信感も薄れてはいた。『養子になってもいいかもしれない』と、思えるまでに。

でも、まだだ。

全面的に信用するには、俺の心の傷は深すぎた。

食事を終えて、伯母さんがコーヒーを入れてくれる。

まだ熱いコーヒーにゆっくりと口をつけた時、伯母さんが突然立ち上がりキッチンへと駆けていった。

「九州のお友達から届いたのよ。みんなで食べましょうね」
戻ってきた手には、ガラスの器に盛られた桃と苺。

目の前に置かれた果物を見て、どうしてだか、今日知り合ったばかりの小山のイトコだという少女の顔が浮かんだ。

頬を桃のように淡いピンク色へと染めて、小さくはにかみ。
照れすぎると熟した苺のように赤くなった、あの少女のことだ。

——なんで、思い出したんだ？

コーヒーカップを持ったまま、果物をじっと見つめてしまう。

「どうしたんだ、晃」

「もしかして、嫌いだった？」

固まっている俺に、伯父さんと伯母さんが不思議そうに尋ねてきた。

「……え？あ、その、嫌いじゃないけど。もうお腹いっぱいだからガタガタと音を立てて、イスから立ち上がる。」

「俺、部屋に戻るよ。ごちそうさまっ」

2人とは顔を合わせないようにして、テーブルを離れた。

そんな俺を見た伯父さんと伯母さんが、視線を合わせて楽しそうに微笑んでいた。

(3) 俺

階段を駆け上り、廊下を走って部屋に戻る。

少し乱暴気味にドアを閉めると、絨毯の上にゴロリと転がった。

何となく心の奥が動揺しているが、そのうち消えるだろうか。

心臓がドキドキしているのは、走ったから？

それとも……？

「それとも」ってなんだよっ？！」

俺らしくない思考に、動揺は増すばかり。

「そ、そうだ。漫画でも読んで、気分転換しよう」

動揺をなかった事にして、ガバツと立ち上がる。

急いで机の上に置いたカバンから、今日買った本を取り出した。

ベッドの上に腹這いになって、しばらく読みふける。

静かな部屋にはページをめくる音だけ。

その手がふいに止まった。

「あの子、真面目そうだからこんな漫画は読まないのかもなあ」

さっきもそうだったけれど、妙にあの子の顔がちらつく。

「いつも、文学全集とか読んでそうだ」

一字、一字、丁寧に目で追う姿が想像付く。

「で、その本は百科事典並みに大きくて重いから、棚に戻すのにフラフラしちゃって」

小さくて華奢なあの子は、そんなイメージ。

「しかも、戻しきる前に腕がしびれてさ。結局しまえなくって、床に落としたりするんだろぅなぁ」

実際にありえそうな状況に、プツと吹き出す。

微笑ましい光景に自然と笑みが漏れた。

「……って、何であの子のこと、考えてんだよ？」
自分が身内以外の女性の事を思い浮かべるなんて、この5年間一度もなかったのに。

——そりゃ、ひどい事言っただけで傷つけたりしたから、印象には残っているけど。それにしたって、あの子を思い浮かべて笑うって何事だ?!

自分の中の変化に、俺は戸惑いを隠せなかった。

(1) 体育祭3週間前

この学校は9月に体育祭がある。今年は25日の月曜日だ。

3週間後に体育祭を控えて、俺は心なしかワクワクしていた。転校してきてから初めての学校行事だし、体を動かすのは割りと好きだから。

でも、少しだけ気がかりな事があった。

小山の話によると、すでに全校の女子生徒のほとんどが俺の存在を気にかけているらしい。

そんな状況の中、体育祭で目立つ事をしたら……。

ますます雑音が増えるだろう。

俺としては全然嬉しくない。

卒業までの半年。平穩に過ごすためには、好きなように振舞う事もできないのだろうか。

女子というのは本当に面倒な存在だ。

自分の席で頬杖をついてぼんやりしていると、担任が入ってくる。「今日のLHRは各自、参加する競技を決めてくれ。はい、男女分かれて」

担任の指示で男子が窓側、女子が廊下側に集まった。

「桜井、何に出る？」

「お前、足が速そうだからリレーに出ろよ」

「3年のクラス対抗は運動会の締めだからな。盛り上がるぜ？」

「相変わらず女子とは距離を置いて接しているが、男子とはすっかり打ち解けた。」

「まだ数日しか経っていないのに、まるで4月から一緒にいるかのように仲がいい。」

「リレーか……」

「俺はポツリと呟く。」

「足には自信があるが、目立ちたくない。」

「出場種目リストを見て、その中から無難な競技を選んだ。」

「俺、綱引きでいいよ」

「団体種目だったら、そんなに目立たないだろう。」

「桜井は綱引き？ん、分かった」

「級長の滝沢がエントリー表に名前を記入する。」

「本競技はそれでいいから、リレーの補欠をやってくれないか？」

「え？」

「俺の顔が渋る。」

「補欠と言ったって名前だけだ。リレーの本メンバーは、このクラスの体力自慢の奴等だからな。体調崩しての不参加はまずありえないから、安心しろ」

「見せてもらったエントリー表にはサッカー部やバスケットなどのエースの名前が並んでいて、全員、
“風邪なんか引いたことないぜ！”
といった感じのメンバーだ。」

「まあ、そういうことならいいよ」

「OK。じゃ、次。障害物競走に出たい奴は？」

進行のうまい滝沢のおかげで、参加種目は次々に決まっていく。

担任が男女それぞれのエントリー表を受け取り、簡単な連絡事項を伝えてLHRは終わった。

部活に入っていない俺は帰り支度を始める。

「小山、帰ろうぜ」

水泳部だった小山はすでに引退しているから、この時期は俺と同じく帰宅部。

俺が声をかけたところに、

「おい、小山。大野さんがお前に用事だって」

ドアのところにいる男子が大声で呼びかけてきた。

—— “大野” って、昨日の子だよな？

何気なく目を向けると、ドアの手前で少し恥ずかしそうに立っているあの少女がいた。

「あれ？チカちゃん、どうしたの？」

小山が駆け寄って声をかけた。

俺の時と同様に、彼女は筆談で小山と何やら話している。

ただ昨日と違ったのは、彼女がずっとにこやかな笑顔を浮かべていたこと。

困った顔や泣きそうな顔は一切見せない。

当然と言えばそうなのだが、その事が何故か心に引っかかり、仲良く楽しげな2人から目が離せない俺。

視線の先の彼女は下を向いてペンを走らせるたびに、ツヤツヤの黒髪がサラリと揺れていた。

この学校の女子は全員と言っていいほど、茶色にカラーリングをしている。なので、彼女のような黒髪はかえって目立つのだ。

だからだろうか。俺が彼女から目が放せないのは……。

2人の会話が終ったのにも気付かず、俺はずっと彼女を見ていた。すると視線を感じたのか、彼女がこちらに顔を向ける。あっと思った時には、俺とバッチリ目が合ってしまった。

——今から見ていなかったふりをするのも変だしなあ。

俺は、目を逸らすタイミングを逃してしまっ。

彼女も逸らすことなく、俺を見ている。どうして自分が見られているのか分らないという、不思議そうな顔で。

どれだけの間、視線を合わせていたのだろう。時間にすればほんの2、3秒だとは思っけれど、すごく長く感じた。

まばたきをした彼女が俺に向かって小さく頭を下げた。俺も応えるように軽く下げる。

顔を上げた彼女は小山に向き直り、にこやかな笑顔で手を振って

出ていった。

—— 小山にはあんなに親しげなのに、俺には他人行儀だ。

彼女と小山は親戚であり、彼女と俺はほとんど面識がない。
だから、大野さんのあの態度は当たり前のことなのに。

なんだか体の芯の奥の奥に隙間風が吹き込んだように、物寂しい感じがした。

(2) 体育祭10日前

学校内のムードが何となく落ち着かない。

特に女子。

この学校の体育祭は1学年8クラスを2クラスずつの4つに分けて戦う。

1・2組は赤。

3・4組は白。

5・6組は青。

7・8組は黄。

と、分団カラーが決まっている。

1組の俺は赤だ。

そして、はちまきは各自で用意するのだが。

「桜井君」

昼飯を食べ終え、友達としゃべっていると後ろから声をかけられた。

振り返ると同じクラスの女子だった。

確か“今井”と言っただろうか。女子バスケ部のキャプテンとか聞いたような気がするが、自分の記憶に自信はない。

オマケに、かろつじて名字は記憶にあったが、下の名前は全く知らない。

いや、聞かされたけれど覚えてないのが正直なところだ。

女子は鬱陶しい存在としか認識してないため、進んで覚えようとは思わない。

だからクラスメイトだというのに、顔と名字がかるうじて一致する程度の認識しか持ち合わせていなかった。

「なに？」

だいぶ不機嫌に返事をした。

楽しくしゃべっていた所に割り込んでくるといった、デリカシーのないところが女子の嫌いなところだ。

そんな俺の様子に一瞬怯んだが、

「あ、あの……。桜井君のはちまき、私が用意してもいいかな？」
顔を赤らめながら、恥ずかしそうに今井さんが申し出る。

——ふう、またか。

俺は心の中でため息。

体育祭を間近に控え、俺にはちまきを用意するという女子が後を絶たない。

小山いわく、それは『俺へのアプローチ』らしい。

これがここ最近、女子達が落ち着かない理由。

事あるごとに声をかけられ、いちいち呼び止められる。クラスメイト以外の女子からもだ。

俺からすると、迷惑以外の何物でもない。

「俺の分はもう用意してあるから」

素っ気なく告げて、話は済んだとばかりに切り上げようとするど、

「えと、じゃあ。私のはちまきと交換してくれる？」

更に顔を赤くして今井さんが言った。

——なんでわざわざ交換しなくちゃならないんだ？

好きな人のはちまきを締めて頑張りたい、という乙女心は俺には理解不能だ。

はちまきとか関係なく、自分なりに頑張ればいい。

みんながいる前で冷たく言い返すのも気が引けるが、ヘタなことを言ってつけあがられてもイヤだから。

「そういう申し出は全部断わってる」

感情もなく言った。

すると今井さんはキュッと眉を寄せて、

「そっか。話の途中に邪魔してごめんね」

早口に言って、彼女は教室を出ていった。

「相変わらず、桜井のモテっぷりはすげえな」

近くに立っていた滝沢が感心している。

「嬉しくないんだけど？」

嫌そうに言う俺。

「そんなセリフ、一度言ってみたいよな」

「モテる男はつらいねえ」

周りの友達が口々に言ってくる。

そして、

「やっぱりかっこいいね。はちまき、交換してくれないかな？」
と、コソコソと話している。

——またか……。

俺は周りには分からないよう密かにムツとしたのに、どうやらあの子は気が付いたらしく、友達の袖口を引っ張って“早く行こう”と急かす。

それでもその友達はどうも動こうとしないで、じっと俺を見つめている。

俺はその視線から逃げるように、その場を後にした。

教室へと戻りながら、心の中で呟く。

——あの子に『かっこいい』って言われてもイライラしなかったのになあ。

何でだろうと首を傾げていると、午後の授業開始10分前の予鈴が鳴った。

(3) 体育祭3日前

土曜日。

午前中を使って体育祭の準備に当たった。

先生達は放送席のテントを張ったり、校庭に引くラインの確認をしている。

あれこれ進められる様子を見ると、いよいよって感じだ。

生徒達は分団ごとに集まって、応援合戦の練習。

俺達は体育館で、他の分団はグラウンドに集合している。

女子達はそれぞれ自分で作った応援用のポンポンを持っていて、かけ声に合わせて赤いポンポンが揺れる様子は結構圧巻だ。

当日の流れの説明を一通り受け、何回か通して練習をする。

その後、各分団長は打ち合わせのため呼び出され、他の生徒達は解散となった。

体育館の出入り口はそんなに広くないため、一度に出ることは出来ない。

なので、少し離れたところで人込みが空くのを待っている。

あんなに人がたくさんいる所にいたら、雑音が倍増するからだ。

「高校最後の体育祭になるんだなあ」

横に立つ小山がしみじみ言う。

「だったらリレーにエントリーすればよかったんじゃないの？いい思い出になっただろうよ」

「……足は速くないんだ」

こんな話をしているうちに、出入り口の混雑が落ち着いた。列の最後尾に着くと、先の方で見覚えのある黒髪の子が人の波に埋もれているのが目に入る。

—— ホント、ちっちゃいなあ。大丈夫か？

そう思っただけだと、前を歩くあの子がふいに振り向いた。小山がそれに気付き、手を振る。

あの子は人の流れから外れて、俺達が追いつくのを待っていた。合流すると、隣りには昨日見た友達はいなくて彼女1人。

考えてみると、俺がその場にいる必要はなかったのだが、小山もその子も、俺がここにいる事に何の不満もないようなので、暇つぶしもかねて彼らの話を聞いている。

「チカちゃん、今日は1人？友達は？」

小山が尋ねると、彼女は手を口に当てて、コホンコホンと咳き込むマネをした。

「あ、風邪で欠席か。一昨日から急に寒くなったもんね」

さすが、小さい頃から仲のいいイトコ同士だ。わずかな仕草で通じている。

—— そんなことより……。

俺が向けている視線の先に小山も気がついた。

「あのさ、チカちゃん。それ、ずいぶん大きくない？」

他の女子のポンポンは自分の顔と同じくらいなのに、彼女が手にしているのはみんなよりも3倍は大きい。

ニコツと笑った彼女は、持っていたメモにサラサラと書き付ける。

“私は声を出して応援できないから。その代わりに、この大きなポンポンで応援するの。目立つでしょ”

そうして、またニコツと笑う。

——この子はどうして、こんなに強いんだろう。

人とは異なる自分に卑屈にならず、こんなにも前向きでいられるなんて。

——俺とは違う……。

スツと目をそらすと、俺の視界の端に白いものが映った。
彼女が差し出したメモだった。

“桜井先輩が図書室で言ってた友達って、圭ちゃんのことだったんですね”

「……圭ちゃんて、誰？」

俺が言つと、隣の小山がわざとらしくガクツとこけた。

「俺だよ、俺。圭一だから、圭ちゃんて呼ばれてんだよ」

「あ、なるほど」

「なんだよ、桜井。俺の名前を覚えていないなんて、ひどい奴だ……」

クスン、と泣き崩れる振りをする。

俺と同じ位背のでかい男がそんな仕草をしたって、可愛いどころか気持ち悪いだけだ。

「そうじゃないって。いつも“小山”って呼んでるから、とっさに下の名前が出てこなかったただけだ。覚えてないわけじゃない」

「本当か？」

ジロリと小山が俺を見る。

「本当だ。嘘じゃない」

「本当に、本当か？」

「しつこいな。本当だって」

散々繰り返した小山はようやく納得したらしい。

「よし、分かった。信じてやるから、俺にジュースをおこれ」

「やだね」

俺はすかさず奴の額にチョップをお見舞いする。

「何でたかだか名前の事で、ジュースをおこらなきゃならないんだよ」

「冗談だったのに……」

クリティカルヒットしたチョップに、小山は少し涙目だ。

そんな俺達の様子を楽しそうに見ていた彼女が、メモを差し出す。それを小山が受け取って読み上げた。

「仲がいいんですね。桜井先輩、これからも圭ちゃんをお願いします”。……って、チカちゃん違うから！俺が桜井の面倒を見てやっているんだからね！！」

メモを握り締め、なぜか必死で弁明する小山に、彼女は“冗談だよ”って書いたメモを見せる。

図書室の時もそうだったけど、この子はなかなか茶目っ気があるみたいだ。

二人のやり取りを見て、知らず知らずのうちに俺の口元が小さな笑みを浮かべていた。

俺たち3人は体育館傍の階段までやってきた。

1年は1階、3年は3階に教室がある。

「じゃあね、チカちゃん」

小山が手を振る。それに応えて、彼女が手を振り返した。

俺はこの前と同じように軽く頭を下げようとした時、彼女と目が合う。

大野さんはほんの少し迷った様子を見せた後、小さく手を振ってくれた。はにかんだ笑顔と共に。

この前はただの先輩と後輩だったが、今日は顔見知りとしてあいさつしてくれたのだ。

俺の心がなんとも言えない温かいものに包まれていった。

(4) 体育祭当日

とうとう本番の日がやってきた。

朝から雲1つない快晴。爽やかな風が吹いて、体育祭にはぴったりの天気だ。

俺がエントリーした種目は綱引きだけだから、そんなに目立たない。

それに、教科書を広げて座っている授業よりも、体を動かせるほうが楽しい。

今日一日はいい気分で過ごせそうだ。

……が、油断はできない。

席は一応クラスごとにまとまっているけれど、競技が始まってしまえば応援に紛れてクラスも学年も入り混じる事になるだろう。

そうになると、女子が周りにやってきそうだ。

体育祭という非日常的な雰囲気で、女子達のテンションはかなり上がっている。

そんな奴等に囲まれてみる。

たちまち俺の精神的疲労はマックスになること確実だ。

なので、俺は周囲をクラスの男子でがっちり固めた席にいた。

呼ばれても聞こえない振りを貫き、参加した綱引きも地味にこなし。

残すプログラムは3年のクラス対抗リレーのみ。

今のところ、友人達のありがたい防護壁のおかげで問題なく競技

を見学している。

俺は不機嫌にもならず、リレーの開始を待っていた。

競技中に消えてしまった白線を直しているので、始まるまでにはもう少しかかりそうだ。

のんびりその様子を見ていたら、1人の教師が集まった選手達の所に駆け寄り、何かを話しかけた。

少しざわついているのが遠目にも分かる。

「何かあったのかな？」

隣に座る小山が心配そうに見ている。

そこへ、

「桜井 晃はいるかつ！」

担任が走ってきた。

「ここです」

俺は右手を上げた。

担任は乱れた息を整える間もなく

「この後のリレーに出ろ！」

と告げた。

「はぁ？」

いきなりそんなこと言われても、訳が分からない。

リレーのメンバーはついさっき、全員揃ってスタート地点に向かったではないか。

すると担任は困った顔で言う。

「アンカーの長瀬の母親が、今しがた交通事故に遭って病院に運ばれたんだ。長瀬は帰らせたから、代わりに桜井が走れ」

——マジかよ……。

ケガをした長瀬の親には悪いけど、こっそりため息をついた。

「いや、でも……」

なかなか立ち上がろうとしない俺の腕を、担任がグッと掴む。

「時間がない。行くぞ！」

「え！？あつ……！」

その場から強引に連れ出される。

とたんに周りの女子達が騒ぎ出した。

「桜井君、走るの！？」

「うそお。デジカメ持ってくればよかったあ」

「先輩、頑張つてー」

耳が痛くなるほどの甲高い声を背中に受けて、俺は担任に引きずられていった。

——好きで走るんじゃない。頑張るもんか。

腹の中でブチブチと文句を言いながら、渡されたアンカー用のたすきをかける。

——ちくしょう。あと少しで目立たないまま1日が終わるところだったのに。

応援席ではしゃいでいる女子の集団を睨みつける。

——絶対、絶対、本気なんか出さないからなっ！！

そして、リレーはスタートした。

このリレーの着順によって優勝が大きく左右される。

ちなみに俺達赤分団は現在3位。1着でゴールをすれば逆転優勝できるのだ。

が、今の俺にはそんなつもりは微塵もない。

手を抜いているのがバレないようにして、ビリでゴールするつもりだ。優勝なんか知るかつ！

それに、同じ赤分団の3-2のアンカーが1位になればいいのだ。何も俺が頑張る必要はない。

そうこうしているうちに、第3走者がやってくる。

「やれやれ……」

俺はかったるそうに（実際、かなりかったるいのだが）レーンに出た。

3-1は今のところやや遅れて6位。この段階で6位なら、クラスのみんなも諦めているだろう。

わざと遅く走っても、俺の良心は痛まない。

「桜井、頼むっ！」

ギリギリで順位を1つ上げた増田が、倒れながら俺にバトンを渡す。

この時点でのトップとの差は約10メートル。

アンカーは200メートルのグラウンドを1周する事になっていて、俺の足なら逆転するのも可能だろう。

でも、目立ちたくない俺はそこそこのスピードでゴールを目指し

た。

その時、俺の視界にひととき大きなポンポンの揺れる様子が目に飛び込んできた。

彼女は小さな体を全部使って、一生懸命に応援している。

もちろん声は聞こえないけど、口の形で“桜井先輩、頑張れ！”と言っているのが分かった。

その瞬間、俺の意識から余計な考えが消える。

かったるいとか。

目立ちたくないとか。

そういった事がすべて吹っ飛んだ。

先頭走者との差は更に開いていて、今では15メートルも離されていた。

「くそっ」

俺は一言吐き捨てて、一気にスピードを上げる。

自分でもどうしてこんな事をしているのか、全く分からなかった。

ただ、必死で俺のことを応援してくれているあの子に、いい加減な自分の姿を見せたくない。

そう思った。

トップを走る背中を睨みつけ、無我夢中で走る。

ワアツツと大きな歓声が上がった時には2位になっていて、その差は5メートルにまで縮まっていた。

だが、相手もアンカーだけあって、なかなか追いつけない。

残る距離は100メートルを切った。

——このまま終るのかっ!?

諦めかけた俺は、ゴールに集まったクラスメートの中に彼女の姿を見つけた。

小山の横で誰よりも大きなポンポンを振って、俺を呼んでいる。

“桜井先輩、桜井先輩!”

声のない声援が俺の心に大きく響いた。

——しっかりしろ。まだ、頑張れる!

歯を食いしばって懸命に足を動かす。

あと3メートル。

あと1メートル。

あと少し……。

並んだっ！！

更に歓声が上がる。

はるか後方にいた俺がすぐ横にいた事に驚いた7組の田中。その一瞬の隙に俺は前へ出た。

「キャー、桜井君！」

悲鳴のような歓声が校庭を覆う。

その大音響にも耳を貸さず、ひたすらゴールを目指す。

田中もすぐに気を取り直し、俺に並んできた。

お互い一步も引かない。

ゴール手前10メートルで、俺達は壮絶なデットヒートを繰り広げる。

——— こんちくしょう！

最後の力を振りしぼって、ほぼ同時に俺達はゴールテープになだれ込んだ。

——— どっちが勝った！？

地面の上で大の字になり、ゼイゼイとあえぐ。

そこに結果を知らせるアナウンス。

「ただいま行われたリレーの結果をお伝えます。1位は……、3年1組！」

「やったあっー！」

俺を取り囲むみんなが、これまでにない歓声を上げる。

仰向けになったままその様子を見てみると、小山に腕を引っ張られた。

「立てるか？」

「ああ。なんとか」

こんなに必死に走ったのなんて久しぶりだ。情けない事にヒザが震えてる。

支えられて立ち上がると、クラスも学年も入り混じったみんなから拍手が送られる。

たくさんの人の中、俺は無意識にあの子の姿を探した。

1年生の彼女は3年と2年の波から外れたところに友達と立っていて、熱心に拍手をしている。

—— そんなに叩いたら、手の平がかゆくなるのになあ。

嬉しそうな彼女の顔に、俺も嬉しくなる。

クスツと笑みが漏れた。

(1) ファンクラブ発足

10月になった。

高3のこの時期といえば、目前に迫った大学受験のことで誰もが頭が痛い。

それだけでも気が滅入るのに、女子達は相変わらず俺のことを見て囁いていた。

いや、相変わらずではなく、確実に何倍も増幅している。体育祭で目立ったのがまずかったようだ。

——なんで、あんなことしたんだよ……。

改めて考えてみても、あの時の自分の行動が理解できない。とはいえ、もう後の祭りだ。

雑音を耳にしながら過ごす学校生活は、鬱陶しくてたまらなかった。

だから口数だって減るし、表情だってしかめっ面になるというのに。

女子達からすると、それが『クールでミステリアスで、かっこいい』んだとよ。

ホント、女の思考回路ってわかんねえ。

更に頭が痛い事に、俺のファンクラブまで出来たらしい。

同じクラスの松本エリカっていう女が会長。

コイツは高校生のクセにばっちり化粧をして、明るい茶色の髪はクルンクルンに巻いている。

俺だったら身支度に時間をかける分、ゆっくり寝ていたほうがよっぽどいい。

それに学校に来るのに、どうしてそんなにメイクに力を入れるのだろうか。いくら自由な校風とはいえ、これはやりすぎだ。

上辺だけいくら綺麗に着飾ったところで、中身が伴っていないければ無意味どころか逆効果。

その松本が

「桜井君のファンクラブを作ったんだけど」

と、嬉しそうに知らせに来た。

俺からすればどうでもいい事だし、勝手にすればという感じ。

「ご自由にどうぞ」

と、素っ気無く答えておいた。

——芸能人でもない俺のファンクラブって、どんな活動するんだよ？受験生がそんな事にかまけていいのかよ？

ホント、女って生き物はくだらない。

それから俺にあれこれ質問してきたり、写真を撮らせて欲しいとか言ってきたりしているが、睨みつけて黙らせる。

ファンクラブの存在を一応は認めたが、協力してやるつもりはさらさらなかった。

自分のファンクラブではあるが興味はない。
どんな活動をしているのかまったく知らない。

聞いたところによると、松本とその取り巻きの女子達は、抜け駆けして俺に近付こうとしている女子達の行動をチェックしているようだ。

おかげで俺に告白しようとする女子達にやたらと呼び出されることがなくなったので、その事に関してはファンクラブが出来て良かった。

……と思ったのは初めのうちだけで。

簡単に俺に近付けなくなった女子達は、やたらに視線を送ってくるようになった。

囁かれる雑音もやっかいだが、まわり付く視線もやっかいだ。

特に外で体育の時は。

「あゝあ」

サッカーの試合の最中だというのに、俺は緊張感もなく大あくび。

「なんだよ、桜井。もっと気合い入れろよ」

小山がふてくされた顔をしている。

「1点差で負けてんだぞ、うちのクラス」

そういう小山はサッカーコートを走り回っている。

「こんなにジロジロ見られてたら、やる気なくすぜ?」

「贅沢な事言ってるなあ。普通は女子に注目されると張り切るんだぞ」

「悪かったな、普通じゃなくて」

ため息混じりに呟く。

校庭脇でバレーボールをしている女子達はもちろん、奥のテニスコートにいる1年の女子、そして授業が行われている教室からも視線を感じる。

鬱陶しいったらありやしない。

「あゝ、かつたりい」

もう一つ大きなあくびをして周りを見回すと、テニスコートでチヨコチヨコ動いているあの子が目に入った。

小柄だからか、思っていたよりもすばしっこい。

他の女子よりも背の低いあの子が走り回る様子は、まるでリスやハムスターのようで微笑ましかった。

思わず口元が緩む。

「何、見てんだよ」

小山が俺と同じ方向に顔を向ける。

「ああ、チ力ちゃんか。……お前、何でチ力ちゃん見て笑ったんだ？」

「え？俺、笑ってたか？」

自分ではそんなつもりがなかったので、言われて驚いた。

「ニコニコって感じじゃなかったけどな。なんていうか、目が優しいっていうか」

「あー。あの子、小さくてクルクル動きまわっているだろ？なんか小動物みたいで可愛いなあって」

俺のセリフを聞いて、今度は小山が驚く。

「桜井が女子のことを可愛いって言うの、初めて聞いた……」
目を大きく開いて、口はだらしなく半開きになっている。

「そんなに驚く事か？」

まるで幽霊でも見ているかのような表情で、まじまじと俺に視線を向ける小山にあきれた。

「そりゃ驚くよ。女子に対しては“うるさい”とか“邪魔だ”しか言わねえお前だからさ」

「大した意味はないさ。動物みたいってだけで、褒めたつもりはないし」

「それでもさっきの“可愛い”ってのは、嫌味じゃないだろ？」

「んー、どうだろ。あんまり考えずに言ったことだし、気にすんなよ」

こんな話をしているうちに試合は終了。

俺達は先生のところ集合し、それぞれ教室へと向かった。

(2) 手紙

ある朝。

登校すると、俺の靴箱の前から数人の女子が急いで立ち去るのを見た。

あれはたしか、ファンクラブの女子だ。しかも松本にべったりくっついて、少々やつかしいなタイプ。

松本はファンクラブの会長ということで、自分よりも俺に近付く女子を許さないという。

でも松本と仲良くしておけば、抜け駆けしない限り邪魔をされることはない。

だから少しでも俺に近付こうと、いつでも彼女のご機嫌を伺っているような連中。

そいつらが手に何かを持って走り去る。白いような、薄いピンクのような、薄くて四角いもの。

「なんだ？」

気にはなったが、まあ、大したことではないだろう。

俺はその事を放っておいた。

この出来事がなんだったのか。翌日の放課後、滝沢から聞かされ

る。

「桜井。最近、靴箱にラブレターが入ってないだろ？」

突然そんな事を言われて、少し驚いた。

たしかに10月に入ったくらいから、毎日のように靴箱に入っていた手紙やプレゼントが一切ない。

「どうして滝沢が知ってるんだ？」

すると、彼はこめかみを指でかきながら、ポツリポツリと話し出した。

「昨日、渡り廊下を通った時、あんまり穏やかじゃない声が聞こえたんだよ」

滝沢の話はこうだった。

校庭に面している一階の渡り廊下の反対側は、何があるわけでもない。だから普段はそこに人がいるはずはない。

それなのに人の話し声がしたので気になり、立ち止まった。

悪いとは思いつつもただならぬ雰囲気なので、そつと気配を窺うと、校舎の角の奥のほうに人影が見える。

イジメやケンカだったら先生を呼ばなくてはと、確認するために近付いた。

そこにいたのは2年生の女子が1人と、彼女を取り囲むように松本と数人の取り巻き。

「あなた。私達に無断で桜井君に手紙を渡そうとしたでしょ？」

そう言って松本が取り出したのは、その2年生が書いたと思われるラブレター。

「あっ、私の！」

さっと顔色を変えた2年生の子は手を伸ばしたけれど、松本は目

の前で手紙を容赦なく破り捨てた。

「困るのよ、こういうことされると」

ちぎった手紙をヒラヒラとばら撒きながら、松本は2年生を睨む。

「そうよ。桜井君に迷惑じゃないの」

「二度とこんなことしないで」

「私達を差し置いて、勝手に近付こうとしないでよね」

取り巻き立ちが一斉に口を開いた。

2年生は何も言えず、ただ俯いたまま。

「これからは勝手なマネはしないことね」

黙りこんだ2年生に向かって松本が厳しく言い、取り巻きを引き連れてその場から去っていった。

「松本はそれ以上のことはしなかったし、大騒ぎすることでもないと思うんだけど。でも、一応お前に話しておこうと思って」

「そうだったんだ。教えてくれてありがとうな」

俺が礼を言うと、滝沢は右手を軽く上げて教室を出ていった。

「ふう」

ため息をついて、俺は席を立った。

小山は担任に呼ばれているので、今日は一人で帰る。

「手紙が靴箱に入ってなくて、それはそれで気が楽だけど」

俺の靴箱を断わりもなしに勝手に開けるのがム力つく。そして、俺宛の手紙を勝手に処分するのもム力つく。

もらった手紙は読むつもりも、返事を書くつもりもないけれど、その手紙をどうするかは俺が決める事だ。

「やっぱり、女って生き物は嫌いだ」

日が落ち始めて薄暗くなった道を一人で歩きながら、吐き出すように呟いた。

(3) 妹のような存在

気持ちがいい秋晴れの昼休み。

校庭で小山とキャッチボールをしていた時、少し離れた所にある生徒用昇降口に向かって妙な物体が動いているのが目に入った。

——あれは……花束？

花束というには結構な量。まるで花で出来た小さな山のような。色々な種類がちりばめられた花たちがゆっくりと進んでいる。

俺の視線に気がついた小山も、その物体に目を向ける。

「あ、チカちゃんだ」

小山が走り出した。

一人でここにいても仕方がないので、俺も小山についていく。近付いてみると、たしかに大野さんだった。

花束が大きいのと、彼女が小さいのとで、姿が埋もれて俺からは見えなかったのだが。

——足しか見えていないのに、よくあの子だと分かったなあ。

感心していると、小山が彼女に向かって手を伸ばす。

「持ってあげるね」

そう声をかけて、彼女の腕から花束を受け取った。

花の影から現れたのは、額に少し汗をかいたあの子。

一息ついた後メモを取り出して、何やら書き付けている。

“お花ってこんなに重いとは思わなかった。腕が痛くて困ってたんだ。ありがとう、圭ちゃん”

「チカちゃん、小さいからなあ」

男の小山は軽々と花束を抱え、クスクスと笑う。

“もう！！小さいじゃなくて、か弱いつて言つてよね”

ぶうつと頬を大きく膨らませてすねる彼女。

その様子が微笑ましくて、俺もクスリと笑ってしまった。

頬をパンパンに膨らませた彼女が、少し離れて立っていた俺に氣付いてギョツとする。

慌てて顔を戻し、ペコリと頭を下げた。

そして、小山の腕をバンバン叩き始める。

「な、何！？」

自分がどうして叩かれているのか分からない小山は、目を白黒。

大野さんは勢いよくペンを走らせ、メモを突き出した。

“桜井先輩がいるなら早く言つてよ！変な顔見せちゃったでしょ！”

「へ？大丈夫だよお。桜井はそんなこと気にしないし」

“それ、あんまりフオローになつてない！”

真っ赤になつて、また小山の腕を叩く大野さん。

何度も叩かれている小山がほんの少しだけ気の毒になつて、俺は2人に割つて入る。

「大野さん、平気だよ。君が思ってるほど、変な顔じゃなかったし」とたんに小山が眉をしかめた。

「……桜井。そのフォローも微妙だぜ？」

「えっ！うそ、マジで？」

俺たちのやり取りを見て、これまで膨れていた彼女が笑顔になった。

こんなふうには、小山は俺といっても彼女の所へ行ってしまうから、俺もついていく事になる。

別に、小山と一緒にあって彼女の傍に行く事もないのだが、一人で立っていると遠慮なくジロジロと見られるからイヤだ。

そんな訳で、必然的に彼女と顔を合わせる機会が多くなってゆく。

俺が進んで彼女の傍に行っているのではない。小山との付き合いの上、仕方なく。

そう、仕方なくだ。

とは言え、少しでも不快に感じれば、例え仕方なくても傍には行かないだろう。

不快に感じないのは、大野さんが俺に余計な視線を向けたりしないから、ということが理由の一つ。

俺を見る目はいつも『イトコの友人』といった様子。

熱っぽい視線はこれまでにない。

それに、あの子は女子という感じがしないのだ。

失礼な言い方だけど、見た目の印象から『幼い女の子』だと認識している。

“女”というのをほとんど意識させられないから、接しやすかった。

言ってみれば“妹”という表現がぴったりかもしれない。

一人っ子だった俺は、ずっと弟か妹が欲しかった。
だから、妹みたいな大野さんに対しては、他の女子とは違って、優しくできるのかもしれない。

うん、きっとそうなのだ。

ある日、職員室から教室へ向かう途中、重そうな本を何冊も抱えた彼女に会った。

いつもなら小山がすぐに駆け寄るのだが、あいにく奴はここにいない。

俺はよろけそうになりながら歩いている彼女に近付いた。

「大野さん、手伝うよ」

突然現れた俺にびっくりして立ち止まる彼女。

その隙に荷物を奪う。

俺は彼女の返事も聞かず、スタスタと歩き出した。
ハッと我に返った彼女は慌てて俺の手から本を取り戻そうとするが、俺はそれを歩きながらかわす。

「図書室でいい？」

彼女は急いで俺の前に回って、行く手を遮った。そしてメモを差し出す。

“一人で運べます。私の仕事ですから”

「誰が運んだっていいと思うけど？それに、君が重そうに運んでいるのを見て手伝わなかったら、小山に蹴飛ばされそうだしさ」

クスツと笑って彼女の横をすり抜け、再び歩き出す。

そんな俺の後を追って、彼女は申し訳ない顔つきをして小走りについてきた。

何て事のない日常の一幕。

それを睨みつけるように鋭い目で見ていた人物がいた事に、俺は全然気が付かなかった。

(4) 恋愛小説

両手がふさがっている俺の代わりに、彼女が図書室の扉を開けてくれる。

中に入ってカウンターの上にドサリと本を下ろすと、誰もいなくて静かな図書室に本を置く音が響いた。

「ふう」

短く息を吐く。

男の俺にしてみても、そこそこ重く感じた本たち。彼女一人に運ばせなくて良かった。

大野さんは“ありがとうございます”と書いたメモを差し出して、ペコペコと頭を下げている。

「別に。大したことじゃないし」

“でも、すごく助かりました”

まだ頭を下げている。

「もういいって。……前もこんなシーンがあったよな？」

俺が初めてこの子と会った日のことだ。

俺が……、心無い言葉で彼女を傷つけてしまった日。

あの時も頭を下げ続けていた。怯えたような顔で。

——俺、そんなに怖い顔してたかなあ？

思い出して、苦笑う。

そんな俺を見て、彼女はようやくお辞儀をやめた。

運んだ本を棚に戻す作業を手伝いながら話しかけた。

「大野さんは本が好きだから、図書委員なんだよね。普段はどんな本を読んでする？」

彼女はちよつと首を傾げた後、メモにペンを走らせる。

“色々読んでますけど、ミステリーとか探偵モノが多いですね”

「ミステリー？ちよつと意外」

“意外ですか？”

どうして俺がそんな事を言ったのか分からなかったらしく、また首をかしげている。

そんな彼女に、俺は何気なく言った。

「女の子は恋愛小説ばかり読んでるかと思ったから」

本屋に行くと、文庫のコーナーにはピンク色を主体にした表紙で、なんだかメルヘンチックなタイトルの本がぎっしり並んでいるのを目にする。

クラスの女子の大半が、休み時間にその手の本を読んでキヤーキヤー言っているのを何度も耳にしていた。

本には先輩に恋をする話とか、気が付いたら幼馴染に恋をしてい

た話とか、そんなの恋愛話が詰まっているのだろう。

——大野さんだって年頃の女の子だし。本が好きなら、そういう類の作品を読んでもおかしくないよな。

何の気なしに言った俺の言葉に、彼女はキュッと口をつぐんでペンを走らせる。

“恋愛小説は読みません”

その文字が心なしか硬く、震えているように見えた。

「どうして？女の子ってそういう作品が好きだよね？」

俺がメモから視線を上げると、そこには泣きたいのを我慢しているような、そんな複雑な笑みを浮かべている彼女がいた。

“そういうお話を読むと、恋愛は自分の手が届かないところにある物だっと思って知らされるんです。それが嫌で、恋愛小説は読みません”

「……大野さん？」

彼女の表情に戸惑う俺に、スッと新たなメモを差し出してくる。

“話も出来ない私を好きになっってくれる人なんて、どこを探してもいませんから”

そう書かれたメモを静かに俺に押し付けて、彼女は隣りの司書室に消えた。

「余計なこと、言っちゃったな……」

教室に向かう廊下を歩きながら、ため息とともに呟いた。

彼女は声を失った事で、声以外の事も色々と諦めてきたのだ。それはきつと俺なんかでは想像も付かないくらい、つらく苦しかったことだろう。

そう思うと、胸が痛くて、目の奥がジンと熱くなった。

——少しでも苦しみを軽くしてあげたい。俺が彼女を支えてあげたい。

「……って、何考えてんだよ、俺」

こんな事をチラリとでも考えた自分に驚いた。

あの子を見ていると、いつも自分のペースやスタンスが狂う。

「ああ、もう！ 訳、わかんねえ」

頭をガシガシとかきながら、小さく呻く。

それよりもっと驚いたのは、そんな事を考える俺を少しも不快に感じていない自分に気が付いたことだった。

(1) 病気発覚

SIDE：チ力

小さな頃から本を読むことが好きで、幼稚園では友達と遊ぶよりも絵本に夢中だった。

お母さんには『本があれば、チ力はいつもご機嫌ね』とよく言われていた。

大好きな絵本はシンデレラ。いつか私のところにも素敵な王子様が来てくれるのだと、本気で信じていた。

小学校に入って、読める漢字も増え、私はますます本の世界にのめり込む。

魔法使いが出てきたり、動物達と冒険するお話も面白かったけれど、年を重ねてゆくと、小中学生向けの恋愛小説に夢中になった。

先生を好きになったり。

近所に住むカッコいいお兄さんを好きになったり。

どの小説も胸をドキドキさせて読んだ。

この先、もう少し大人になったら、本と同じように自分にも幸せな恋愛が約束されていると思っていた。

だけど……。

私に用意されていたのは残酷な現実だった。

無事に小学校を卒業した春休み。
しばらく前から気になっていた事をお母さんに言った。

「なんかね、ノドがおかしいんだ」

飲み込む時に違和感があったり、時々声がかすれることがあった。
前は『気のせいかな』と思う程度だったのに、最近は『やっぱり
変だ』と感じる。

「あら、風邪じゃなくて？」

「違うと思う。咳も出ないし。ただ、ノドの奥が腫れてる感じ」

「扁桃腺に熱を持ってるのかしら。じゃ、今から病院に行って診てもらいましょ。中学の入学式に病気でお休みなんて寂しいものね」

「そうだね」

私とお母さんはニコツと笑った。

この後、12歳の私を押し潰してしまう事が起きるなんて、夢にも思わずに。

お母さんの運転する車で、もう10年も通っている内科に向かった。

その院長先生はいつもニコニコしていて、優しくて、お医者さんって言うよりも、自分のおじいちゃんみたいな人だ。

「おや、チカちゃん。今日はどうしたのかな？」

一人で診察室に入ると、椅子に座っていた先生が優しく話しかけてくる。

「ノドの奥がね、なんか変な感じなの」

「どれどれ。口を大きく開けてごらん」

先生はいつものようにライトを当てながら、私の口の中を見る。すると、これまでニコニコしていた先生がノドの奥をすごく真剣に見詰め、表情を曇らせた。

——どうしたのかな？

先生は近くにいた看護師さんに何か伝えている。

しばらくして、看護師さんに連れられてお母さんが入ってきた。

先生は引き出しから紙を出し、いくつか書き込んだ後封筒に入れて、お母さんに差し出す。

「これは大学病院の紹介状です。念のために診察を受けてください」
こんなに固い顔をした先生は初めてだった。

「えっ？大学病院ですか？」

お母さんがびっくりして聞き返す。

「詳しい事は検査で分かるでしょう。場合によっては命に関わる事ですので、できればすぐにでも行ってください。先方には電話をしておきますので」

そう言って、先生は机の上の電話に手を伸ばした。

——大学病院？検査？命に関わるって、何？

パニックになって動けなくなった私の手を引いて、お母さんは車へと急いだ。

大学病院に着くと準備はもう出来ていて、私はすぐに検査室に連れて行かれる。

一通りの検査を終えてお母さんと待合室で待っていると、名前を呼ばれた。

「そちらに座ってください」

会議室のような部屋に入ると、私のお母さんよりも少し年上くらいの女の人がいた。

ノドの病気を専門にしていると言う。

その先生が怖いくらい真剣な顔をして、私のノドの奥の写真を見せてくれた。

「チカちゃんのノドには腫瘍があります。……残念ながら、悪性です」

お母さんがハッと息を飲んで、口を手で押さえて震えている。

私は“腫瘍”の意味が分からなくて、きょとんとするだけ。

小さく息を吐いた先生は堅く閉じていた口をゆっくり開いて、ゆっくり言った。

「このままにしておくと、チカちゃんの命は数年持たないでしょう」

お母さんは何も言わないで、ポロポロと泣き出した。

先生の言葉、今度は私にも分かった。

——死んじゃうの？……私、死んじゃうの！？

悲しみというより、例えようのない恐怖が襲ってくる。

私の目からも涙がこぼれた。

泣き出した私とお母さんに、先生は慌てて話を続ける。

「でも、落ち込まないでください！早い段階での発見ですし、幸い他の臓器にはまったく転移してなかったんです。手術すれば、完治しますから」

「……チ力は治るんですね？」

お母さんが恐る恐る尋ねる。

「はい、絶対に治ります。手術も簡単なものですから、10日ほどの入院で済みますよ」

先生が自信を持って答えてくれた。

——10日だったら、入学式にも間に合うんだ。

私とお母さんにホッとした笑顔が戻る。

だけど、それは一瞬の事。

「ただし、腫瘍を完全に取り除くためには、声帯をすべて取り除く事になります」

先生の顔がさっきよりも厳しい表情になった。

部屋の中の空気がすうっと、冷たくなったような気がする。

「それって……、声が出せなくなるってこと……ですか？」

震える唇をどうにか動かし、私は尋ねる。

先生は何回か瞬きをした後、あえて無表情で大きくうなずいた。

「急なことで驚かれていますでしょうが、時間ありません。一日でも早い処置が、チカちゃんの命を救います。今日はこのまま入院していただきますので」

お母さんにそう言うってから内線電話を使って、先生がベッドの空きを確認する。

「小児科のベッドが空いてました。お母さんはご主人とこの事に付いてお話をさってください。また明日、改めてお会いしましょう」
立ち上がった先生は私の頭をそっとなでる。

「大丈夫。手術をすれば、何年だって生きられるからね」

につこり微笑まれたけれど、私は呆然としてしまっただけで何か言うどころか、うなずく事も出来なかった。

そのまま小児科に行つて、借りたパジャマに着替えてベッドに横になる。

お母さんは入院の準備をするからと帰っていった。

隣のベッドとの仕切りのカーテンを閉めて、白い天井をぼんやりと眺めていたら涙がにじんできた。

——声が出なくなるなんて、絶対にイヤだよっ！

涙は次々と溢れる。

小学校の卒業文集に書いた“将来の夢”は、アナウンサーと、バスガイドと、幼稚園の先生。1つに決められなくて、3つも書いた。

テレビの中ではきはきとニュースを読んでいるアナウンサーを見て、カッコいいと思った。

景色を見ながらすらすら説明してくれるバスガイドさんを見て、素敵だと思った。

楽しく歌を教えてくれた幼稚園の先生を見て、あこがれた。

それが、声が出ない私には手が届かない夢になってしまった。

『諦めなければ夢はかなうよ』って、ずいぶん前に学校の先生に言われた。

でも、こんな私じゃ、どんなに頑張ったってダメ。

だって、声のない私が声を使う仕事に就けるはずもないのだから。

「う、うつっ……」

私は頭から布団をかぶった。

そして泣いた。

泣いて、泣いて。

体の水分が全部涙になってしまっくらい、泣いて。

会社を早退したお父さんが、お母さんと来てくれた。

ただど今の私は誰にも会いたくなくって、ずっと布団にもぐったままだった。

お母さんが『また明日来るからね』と声をかけてきたけれど、ずっと布団にもぐったまま。

—— 神様、どうして私から声を奪うの？夢を奪うの？

悲しくて、苦しくて、私の人生がここで終わってしまったかのように思えて、ひたすら泣き続けた。

(2) 月

ノドの渴きを感じて、ふと目が覚めた。

「私、いつの間にか寝ちゃったんだ……」

モソモソと布団から這い出ると、部屋の電気は消されていた。ベッド横に置いてある時計を見ると、もうすぐ日付けが変わるところ。

同室の人たちを起さないように、そつと病室を出た。

——少し先にある給湯室で、お水でも飲んでこよう。

非常灯だけの薄暗い廊下を注意深く進んでゆく。
中に入って置かれていたコップを一つ借り、水を飲む。

コクンと飲み込むと、ノドの奥の“何か”に水が触れた。

——これが“腫瘍”なんだ……。これがあるから、私は悲しい思いをしなくちゃいけないんだ……。

もう枯れたと思っていた涙がジワジワとにじんできく。

夢が打ち砕かれた未来に、なんの楽しみも感じない。
悲しみと絶望で塗り固められた真っ暗な未来。

そんな世界で生きていく意味などあるのだろうか。

私は空になったコップを見つめながら、小さくため息をつく。

手術をしなければ私の命が危ないって、あの先生は言っていた。
夢も希望も見いだせない未来に立ち向かう勇氣など、ちっぽけな
私にはない。

「このまま何の治療もしないで、死んじゃったほうがいいのかなあ
……」

ポツリと呟いた時、窓の外が急に明るくなる。

風に吹かれた雲が流されて、夜空に満月が現れた。

まん丸で、優しい光を放っている。暖かさは感じないのに、温も
りを感じる月の光。

「きれい……」

にじんだ涙を拭くのも忘れて、思わず見とれた。

時折月に雲がかかっては月光が翳り、そしてまた雲が流れて満月
が現れる。

その様子をただじっと、長い間見つめていた。

——これから先も、こんな綺麗な月が見られたらいいのに。

心の中で呟いて、それをすぐさま否定する。

——ううん、そうじゃない。“見られたら”じゃない。

「……絶対に見たい」

そう口に出して言ったら、なんだか気持ちがすごく楽になった。さっきまで胸の中にあった重く黒い塊が、なんとなく小さくなったような気がする。

窓から差し込む月の光を浴びていると、ほんの少しだけ勇気が湧いてきた。

声は出なくなるけれど、病気は治る。

話せなくなる事で出来なくなることもあるけれど、出来る事だつてあるはず。

ゼロじゃない。

「絵本作家とか小説家なら、声は必要ないよね。話せなくても、仕事は出来るよね」

ちよつと前まであんなに泣いていたのに、今の私は少しだけ笑顔を取り戻した。

ゆっくりと息を吐く。

でもそれは、さっきとは違って、諦めのため息じゃない。

「気持ちを切り替えるきっかけって、こんな近くにあったんだ……」

ぜんぜん悲しくないって言ったらウソになる。
でも、悲しいだけじゃなくなった。

ほんのちよつとだけど、未来に期待している自分がいる。

——きつと、なんとかなるよね。生きていれば……。

給湯室を出る前にもう一度月を見て、“頑張ろう”って呟いた。

次の日は日曜日で、朝からお父さん、お母さん、そして、イトコの圭ちゃんがお見舞いに来てくれた。

「おはよう」

私から3人に元気よくあいさつする。その様子を見て、お父さんとお母さんがびっくりした。

——そうだよ。昨日、あんなに泣いてたんだもん。今の私の元気の良さを見たら、驚くよね。

いつもは物静かなお父さんが目大きく見開いている様子を見て、ちよつと笑っちゃった。

「チ力。どこか痛い所はない？」

お母さんが心配そうに私の頭をなでる。

私は首を横に振り、そして大きく息を吸ってから、お母さんを見た。

「手術、受けるから」

「チ力？」

はつきりと力強く言った私に、お父さんとお母さんがまた驚く。

「昨日はいきなり“声が出なくなる”って言われて怖くなっちゃったんだけど。……決めたんだ。私、生きたい」

3人にニコツと笑いかけた。

「手術さえすれば生きられるんでしょ？声が出なくなつて生きていけるもん。話せなくなるのはつらいし、悲しいけど、世の中には耳が聞こえなくても目が見えなくても、元気に生きてる人がいるんだもん。私だって、同じように元気に生きていけるよ」

ゆっくりまばたきをして、改めてお母さんを見た。

「先生に“手術してください”って、お願いしてね」

お母さんはもちろん、普段は泣いたことのないお父さんまで涙を浮かべている。

圭ちゃんは……、お母さんよりもボロボロ泣いていた。

「チ力ちゃん。退院したら、前に行きたいって言ってたケーキ屋さんに連れて行ってあげるからね。元気になるの、待ってるから」

圭ちゃんが涙を拭きながら小指を出してくる。

「絶対だよ。約束だからね」

私も小指を出して、指切り。

その日、面会時間が終わるまで4人でたくさん話した。

帰るときに圭ちゃんが、

「声が出なくなつて、チカちゃんはチカちゃんのままだよ」
と言つて、頭をなでてくれた。

「うん」

その言葉が嬉しくて泣きそうだったけれど、私は精一杯の笑顔を返した。

(3) 恋の代わり

手術が始まった。

口から管を通して、管の先に付いた小さなハサミで腫瘍と声帯を取るらしい。

内視鏡手術と言うそうだ。こうすれば無駄に切る事もないから、回復が早いとか。

きちんとした食事が摂れるまでには一週間くらいはかかるみたいだけれど、手術した傷が落ち着けばすぐに退院できる。

入学式には何とか間に合いそうだ。

麻酔が切れて目を覚ますと、私の周りにたくさんのお父さん、お母さん。圭ちゃん。圭ちゃんのお父さんと、お母さん。

取り囲んでじっと私の顔を見ていたから、びつくりした。

起き上がろうとしたけれど、まだ体がうまく動かせない。お母さんに背中を支えられて、ゆっくりと起き上がった。

——みんな、来てくれたの？

つい今までのように口を動かすけど、声は出ない。

そんな私を見て、お母さんがペンとメモを渡してくれた。

「言いたい事があつたら、ここに書きなさいね」

綺麗なピンク色のペンにはたくさんのハートマーク。メモ帳にもハートがいっぱい。

さっそくペンを動かした。

“みんな、来てくれてありがとう”

「チカ、調子はどうだい？」

お父さんが聞いてくる。

“ノドが少し痛いかな。突っ張る感じもするし。でも、思ったより元気かも”

私が書いた『元気』という文字を見て、みんながホッと胸をなでおろす。

私はまたペンを動かした。

“可愛いね、これ”

ペンとメモ帳を軽く持ち上げる。

「俺が選んだんだ。気に入ってくれた？」

得意そうに言ったのは圭ちゃん。

“うん。すごく気に入ったよ”

私がニコツと笑うと、

「よかったあ。2時間もかけて選んだ甲斐があつたよ」

エへへ、と圭ちゃんが照れ笑いをした。

直接話ができないけど、こうやって文字にすれば会話になるんだ。こうやって、少しずつできることを見つけていこう。

私はメモとペンを胸に抱きしめた。

中学の3年間はあっという間に過ぎ、高校にも無事、入学できた。圭ちゃんと同じ公立高校はのんびりとした雰囲気で、声の出ない私を苛める人もいない。

それなりに楽しい高校生活を送っている。

だけど……。

周りの友達に“彼ができた”って話を聞くと、心臓がキュツと痛くなる。

彼氏の話をする友達の顔はすごく幸せそうだった。それは、私には出来ない表情。

そういえば、いつからだっただろうか。

あんなに大好きだった恋愛小説を読まなくなったのは。

あれは……、中学2年の秋のことだ。

放課後、職員室から戻ると、何人かの男子が教室に残っていた。中から楽しそうな話し声がある。

「うちのクラスの子で、彼女にするなら誰がいい？」

「そうだなあ。佐川っていいよな。モデルみたいで、スタイルいいし」

「分かるー。俺的には山名かな。優しいんだぜ、あいつ」

「僕、この前、指をケガした時に絆創膏もらった」

「山名は癒し系だよなあ」

「じゃあ、大野は？」

——えっ！？

突然自分の名前が挙がって、恥ずかしくて中に入れない。廊下で息を潜めて、男子達の会話の続きを待つ。

——なんて言われるんだろう。

ドキドキしながら、ちょっと期待している私。

ところが、聞こえてきたのはあまりに正直すぎる言葉。

「笑顔が可愛いんだけどさ、彼女にはしたくないな」

「話もできない相手とは付き合えねえよ。どうやってコミュニケーションとればいいか分かんないし」

「いちいちメモを見せられると、盛り下がるしな」

「“好き”っていうセリフは、口に出して言って欲しいよ」

「それ、重要だな！」

アハハッ、と大きな笑い声が廊下にまで響く。

彼らの容赦ない笑い声を背に、私は唇をかみ締めて走り去った。

突きつけられた現実。

変えられない事実。

それ以来、部屋の本棚からピンク色の背表紙や可愛いイラスト付の本が消え、暗い背表紙で、文字ばかりの小説が並んだ。

声を使う仕事が無理ならば、声を使わない仕事を探せばいい。仕事には代わりがある。

けれど、恋の代わりはないのだ。

それに気がついた私は、恋愛小説を手にとることすらなくなっていた。

最後には大好きな人と幸せを掴む主人公を見るのがつらい。

こんな私を好きになってくれる人なんて、絶対いないから。

——嫌なこと思い出しちゃったな。

高校生になって初めての夏休みが終わり、明日からは学校が始まるという夜。

私は、真っ暗になった部屋で、長い長いため息をついた。

(4) 初対面

「ちょっと、ちょっと。みんな、大変だよお」

始業式が始まる前、友達と夏休みの報告をしていると、おしゃべり好きなある女の子が飛び込んできた。

「3-1に超カッコいい先輩が転入してきたよっ!」

一瞬で女子たちがざわめき出す。

「ほんとっ!？」

「ねえ、どんな感じ？」

あっという間に何人もの女子が、その子に駆け寄る。

「えっとね、背がスラッと高くて、顔がすっごく綺麗だった。俳優かモデルって言っても、納得できちゃうくらい」

興奮しながらその先輩についての説明をすると、それにつられるように、話を聞いている子達も楽しそうに目を輝かせる。

でも、私は何の興味も湧かない。

——圭ちゃんと同じクラスだ。

そう思っただけ。

「ね、ね、チカ。どんな人だろうね。見たいよね」

私の前に座る佳代子ちゃんは、他の女の子と同じように興味津々。

「見る目が厳しいよっちゃんが騒ぐくらいだもん。相当カッコいい

「んだらうなあ」

よっちゃんとは転入してきた先輩のことを話し続けている子で、カッコいい男子をリサーチする事が趣味だと言う。

「そのカッコいい先輩が私の彼氏になったら、嬉しくって倒れちゃうかも」

顔も口クに分からない、話もした事がない転入したての先輩に、佳代子ちゃんは頬を赤くしている。

そんな友達や、盛り上がっている女子たちを見ても、私は冷静だった。

そういう男の人が苦手だから。

——カッコいい人はモテるのが当たり前だと思っているから、ツンとして、ワガママだったりするんだ。それか、女の子に囲まれてヘラヘラしてるんだ。

まだ会った事もない先輩には失礼だけど、そんなイメージを持っていた。

体育館で行われる始業式。

私達1年生は最初に体育館に入っていた。

2年生に続いて3年生が入ってくると、クラスの女の子達は噂の先輩を一目見ようとキョロキョロ。

私だけは大人しく前を向いていた。

式が始まるとさすがにみんなは前を向いていたけれど、終って解

散になったとたんに、またキョロキョロ。

それは私のクラスだけじゃなくて、学校中の女の子がそうだった。

——もう知れ渡っているんだ。噂って広まるのが早いなあ。

そんな事を思っていたら、視線の先に圭ちゃんの後ろ姿を見つけた。

その横には見たことのない人が並んでいる。

——あの人が転入してきた先輩かな？

よっちゃんの説明通り、かなり背が高い。

チラッと見えた横顔は、自分が想像していたよりも整っていた。

——あー、よっちゃんが大騒ぎするだけのことはあるなあ。

遠目から見ても、綺麗な顔立ちをしているのが分かる。

だけど、今はその綺麗な顔がものすごく不機嫌で怖い。

やっぱり私の苦手なタイプだなんて思った。

よっちゃんはあるという間にその先輩の事を調べてきて、次の日には先輩のフルネーム、住んでいるところ、誕生日などの情報を手に入れてきた。

休み時間、みんなの話題は先輩の事ばかり。中にはわざわざ3・1まで見に行った人もいるみたい。

顔を見てきたクラスメイト達は

「どこから見ても、ホントにカッコよかったあ」

「無愛想でちょっと怖かったけど、そこがまたクールな感じで良いよね」

と大はしゃぎ。

佳代子ちゃんに見に行こうって誘われたけれど、断わった。本気で興味がないのだ。

3年生が卒業するまで、あと半年。きっと、私と顔を合わせることもないだろう。

……そう思っていたのに。

放課後。

図書室に向かう途中、その先輩と顔を合わせた。

合わせたと言うか、余所見をしていた先輩が私に気が付かなくてぶつかってきただけ。

あっと思った時にはもう遅くて、目の前には見上げるほど背の高い桜井先輩がいた。

先輩はぶつかったのは自分が悪いと分かっていたらしく、

「ごめん。ケガはなかった？」

と訊いてきた。

謝ってくるその声が何だか硬くて、不機嫌そうで、怖くなった私は無言で首を振った。話せないから、無言になるしかないのだけだ。

慌てていた私も悪いのだから、本当は私も『ごめんなさい』って言いたかった。

だけと言えないから、ただ、首を振る。

そして、謝る代わりに先輩のカバンに付いたほこりを払う。

出来る限り綺麗にして差し出したのに、先輩はムツとして、こう言った。

「あんた、何でしゃべんないの？黙っていられると気分悪いんだけど」

——え！？

自分に向けられる痛いほどに冷たい言葉にびっくりして、思わず先輩の顔を見た。

先輩はイライラとしているのを隠そうともしていない。

——私が話せないってこと、まだ知らないんだ。それじゃ、こんなこと言われても仕方ないよね。

泣きそうになるのを、唇をかみ締めて我慢する。

——……こんなの、いつもの事だもん。

私は改めて頭を下げ、その場を立ち去った。

誰もいない図書室で、大きなため息。

みんながどんなにあの先輩がイイって言っても、私は苦手だ。

いくらカツコよくても、いくらスタイルが良くても、あの冷たい表情はイヤ。

——困ったなあ。圭ちゃんの教室に行きづらくなっちゃったよ。

もう一度ため息。

そこに、遠くからこちらに向かってくる足音。走ってはいけな
い廊下を、猛ダッシュで近付いてくる。

——誰だろう？

図書室の扉が開いて、現れたのは桜井先輩だった。

——なんで？文句が言い足りなくて、追いかけてきたとか？！それとも、ちょっと頭を下げただけじゃダメだった？！

私は慌てて頭を下げる。何度も、深々と。

そんな私の肩にそっと手が置かれた。

顔を上げると、さっきの怖そうな顔とは全然違う先輩が目に入る。すごく申し訳なさそうな表情だ。

そして、真剣に謝ってくれた。

これまでも、私が話せないことを後から知って謝ってきた人もいたけれど、こんなに一生懸命に謝られたのは初めてだ。

——思っていたより、悪い人じゃないのかも。

私は『気にしてない』という意味で、首を横に振る。

ひどい言葉で傷ついたことは過去に何度もあり、もう慣れてきた。

そう伝えたら、なぜか先輩が怒り出した。

「何度言われたって傷つくに決まってる！心の痛みに、慣れなんてない！！」

あまりの勢いに、私はポカンと口を開けた。

びっくりしてしまったのと同時に、私の心の傷に気が付いてくれた事が嬉しくって。

すごく、すごく、嬉しくって、かえって何も言えなくなってしまった。

それにしても、これまで友達から『いつも無表情で、口数が少ない』と聞いていたのに。

目の前にいる先輩は困ったり、怒ったり、落ち込んだり、ぜんぜんツンとしてなくて。

そして実は、私の心の傷を心配してくれる優しい人。

さっきまであんなに苦手だと思っていたのが、今では、そんな風に感じなくなっていた。

(5) 報われない想い

圭ちゃんと桜井先輩は仲良らしい。学校で圭ちゃんを見かけると、いつも隣には先輩がいる。

いとこの圭ちゃんは小さい時から一緒に、兄妹みたいに育ってきた。

いつも気にかけてくれていて、私の姿を見かけると近くにやってくる。

そうになると、そばにいる桜井先輩もやってくるわけで。

みんなは先輩のことを『不機嫌で怖そう』っていうけれど、私は初めて会ったあの日以外、そんな顔を見たことが無い。

たまに冗談を言ったりするし、荷物を運ぶのを手伝ってくれたり、面白くて優しいところがある。

圭ちゃんとふざけあう楽しげな先輩が見られて嬉しい。

だけど、最近は先輩の顔を見ると悲しくなる。

体育祭で一生懸命な先輩を見て、なんだか私の心が落ち着かないことに気がついて。

それが“恋”だということに気がついて、胸の奥が苦しくなった。

だって、私は先輩にとって恋愛対象には見てもらえないから。

背も小さいし、大して美人でもないし、学校の成績は真ん中くらいだし、取り立てて長所が無い。

おまけに声が出ない。

ただでさえ不利なのに、決定的なマイナスポイントを持つ私だから……。

そんな私に先輩は言う。

「どうして？ 女の子ってそういう作品が好きだよね？」

本を図書室に運んでくれた先輩は、棚に戻す作業を手伝ってくれながら何気なく言った。

もちろん悪気があつてのことではないと分かっている。

けれど、今の私にとってその話題はつらすぎる。

私は深く俯いてペンを動かした。

“そういうお話を読むと、恋愛は自分の手が届かないところにある物だっと思って思い知らされるんです。それが嫌で、恋愛小説は読みません”

中学生の時、クラスの男子に笑われた事が脳裏に浮かび、目頭が熱くなる。

“話も出来ない私を好きになってくれる人なんて、どこを探してもいませんから”

いつもより少し乱暴に書きつけたメモを押し付けるように渡して、私は司書室へと逃げ込んだ。

司書の先生はまだ来ていなくて、薄暗い部屋に私一人。

自分には恋愛が出来ないとあきらめていたのに、
とつくにあきらめていたのに。

——分かってはいたけど、つらいなあ。

奥の壁にコツンとおでこをつけて、苦笑い。
先輩は悪くないから、怒る事もできない。
ジワツと涙が浮かぶ。

——泣くのは今だけだから……。この次先輩と会った時は、これ
までどおり接することができるよう頑張るから……。

私はその場にうずくまって、静かに涙を流した。

(1) 狂わされるペース

「ねえ、桜井君」

ある日、教室に入って早々声をかけられた。
松本だった。

「桜井君がデートするなら、どこに行きたい？」
「は？」

思いつきり眉をしかめる俺。

「フアンクラブの子達を知りたいんだって」

「彼女もいないのに、デートなんかするわけないだろ」

イライラと歩き出すと、松本はしつこくついてきた。

「じゃあ、どんな女の子がタイプ？」

「うるせえな」

クルツと振り返って睨みつける。

それでも松本はひるまない。

「だって、フアンクラブの会長としていろいろ情報が欲しいんだもん」

「俺は“ご自由に”とは言ったけど、協力するなんて一言も口にしない」

感情無く言い捨てて、俺は自分の席に着いた。

いつだって気の合う友達と遊ぶほうが楽しくて、彼女を作るつもりなんか無い。

これまでに『デートをしてみたい』なんて、思ったことも無い。

どうして自分の時間を潰してまで、相手に合わせなければならな

いのか。

女なんて鬱陶しいだけなのに。

「朝から不機嫌な顔してんなあ」

ポンと頭を叩かれた。

顔を上げると目の前に小山が立っている。

「デートするならどこに行きたい？」とか、「どんな女がタイプ？」とか聞かれて、うるさかったんだよ」

「ふうん、デートねえ」

「そんなの、したことねえから分かんないし」

「えっ！お前、デートしたことないの？」

小山が目大きくして驚いた。

なんだか小バカにされたみたいでムツとする。

「そういうお前はどうかんだよ？」

「……俺はあるぜ」

ニヤリと得意げに笑う小山。

「うそだろっ！？」

俺は思わず立ち上がった。

「何だよ、その反応。失礼な奴だな」

口を尖らせて俺を睨んでくる。でも次の瞬間、ヘヘッと笑った。

「相手はチカちゃんだけどね。映画とか、水族館によく行った」

「何だ、イトコとか。それってデートって言えんのか？」

「女の子と出かければ、例えイトコでも、それで立派なデートなんだよ」

なんて自分勝手な理屈だろうか。

呆れながら、俺はふとあの子を思い浮かべる。

あの子は他の女子と違って、そばにいても鬱陶しくない。

——大野さんだったら、デートしてみてもいいかな。

「……桜井。顔がやけに楽しそうだけど、何を考えてんだ？」

「えっ？べ、別に」

俺はこれ以上小山に突っ込まれないように、視線をそらした。

それにしても、いくら大野さんが“女の子”とはいえ、一緒に出かけることをわざわざ“デート”と称する小山は、よほどあの子と仲がいいらしい。

小山は病気になってつらい目にあったあの子を、ずっと近くで見てきた。

だから、つい気にかけてしまうのだろう。そして、出来る限りそばにしようとする。

そんな感じで何かにつけて奴が「チカちゃん、チカちゃん」と言うものだから……。

掃除の時間。

小山と焼却炉に向かっている途中、前の方にあの子がいた。案の定、小山は駆け寄ってゆく。

「チカちゃんも焼却炉に行くの？」

振り返った大野さんは奴の言葉にニコツと笑い、俺には軽く頭を下げてくれる。

サラリと揺れた彼女の髪に白い物が付いていることに気がついた。俺は手を伸ばし、付いていた糸を取ってあげる。

「チカちゃん、糸がついてたよ」

とたんに彼女は顔を真っ赤にし、持っていたゴミ箱を落としてしまった。

「うわぁっ」

それを見た小山が慌てて、散らばったゴミをかき集める。

彼女は俺を見て口をパクパクさせながら、手を振り回している。

俺はそんな彼女にジツと見られて、軽く焦る。

——この子は何でこんなに驚いているんだ？

「急にどうしたんだよ、チカちゃん」

ゴミを拾い終えた小山が彼女を見る。

ようやく我に返った大野さんは、まだ少し顔を赤くしたままメモに何かを書いている。

“だって、桜井先輩が急に『チカちゃん』なんて言うから。いつもは『大野さん』なのに、それでびっくりして”

なるほど、そういう理由だったのか。

「驚かせるつもりはなかったんだ。小山がいつもそう言ってるから、俺もつられたというか」

「俺のせいだって言うのかよ」

ジロリと俺を睨む小山。

「お前が一日中、ずっとチカちゃんの話をするからだろ」

俺も睨み返す。

その横で今度は耳まで赤くする彼女。

「あつ、ご、ごめん」

俺の顔も赤くなった。

いつもは周りから無表情だと言われている俺なのに、この子といるとペースが狂う。

そんな俺を小山はなんだか嬉しそうに見ていた。

ゴミ捨てを終え、教室へ戻りながら小山が話しかけてくる。

「桜井って他の女子には素っ気ないのに、チカちゃんとは普通に話せるんだな」

「あー、そう言われればそうだな。あの子は俺の見た目で騒ぎ立てたりしないから、接しやすいかも」

「理由はそれだけか？」

「後は……、妹って感じだからかなあ。あまり気を使わないで済むっていうか」

「へえ」

さつきから小山はずっと楽しそうだ。

楽しそうと言うか、ニヤニヤしている。変な奴。

「何だよ？」

「別に。ま、自分で気付けよ」

そう言っ、小山は一人で先に行ってしまった。

「はあ？意味分かんねえ」

俺は頭をかきながら、遠ざかる背中に向かって呟いた。

(2) 校舎裏 SIDE: 晃

小山に意味不明な言葉を投げかけられて数日経ち、自分の中で“何か”が起きていることを自覚しつつある。

もともと、変だなとは感じてはいた。

大野チ力という少女に出逢ってから……。

あの子の前だと『冷たい』と言われてきた俺が崩れる。

あの子がそばに来て、他の女子と違ってイヤではない。

むしろあの子の姿を見かけると、自分から近づいていくこともある。俺の横に小山がいなくても。

あの子が困っていたら助けてあげたいと思う。

あの子にはいつも笑っていてほしいと思う。

これが妹を思う兄心なのだろうか？

告白されたことは数え切れないほどあったけれど、人を好きになつたことはなかったため、俺は自分の奥に芽生えている感情を理解できない。

それでも、無意識にあの子の姿を目で追いかけてしまう。

そして、事件は起きた。

11月ともなると、いくら温暖な静岡とはいえ吹き抜ける風は冷たい。

「なあ、桜井。帰りに肉まんでも食わないか？」

「そうだな」

3階の廊下を歩きながら、ふと窓の外に目を向けた。

普段なら人がいない校舎裏に続く細い脇道を歩く数人の女子の姿が目に入る。

——あれはっ!？

窓に駆け寄り、ガバツと身を乗り出してジッと見る。

明るい髪の子供たちに囲まれて、うつむきながら歩いている一人の小柄な黒髪の少女。

ショートカットで黒髪の女子は、この学校に一人しかいない。

俺は前に滝沢から聞いた話を思い出した。

ファンクラブ会長の松本を中心とした女子たちが、俺に近づく女子を排除しているということ。

腕をつかまれて無理やりに歩かされているあの子様子を見て、松本たちの容赦のないところが恐ろしくなる。

——もし、あの子に何かあったら……。

考えただけでゾツとした。

——助けに行かないと！あの子には傷ひとつ負わせたくない！
俺が……、俺が守ってやらないと！

ようやく分かった。

ここ最近、俺の胸の中でくすぶっていた感情の正体が。

——俺は、あの子が好きなんだ。だからそばにいたいと思うし、
笑顔が見たいんだ。

「桜井、どうした？」

小山も窓から身を乗り出す。そして俺と同じように表情が凍った。

「チカちゃんじゃないかつ」

「小山、先生を呼んできてくれ。俺はあの子のところに行くからっ
！」

「分かった。チカちゃんを頼む！」

俺たちは廊下を駆け出した。

(3) 校舎裏 SIDE：チ力

帰ろうとして校門に向かって歩いていたら、聞き覚えのない声で名前を呼ばれた。

戸惑いながら振り返ると、何人かの先輩たちが怖い顔をして立っていた。

——この人たちは誰？3年生ってことは分かるけど。

呼び止められた理由が分からずにボンヤリしていると、一人の先輩がイライラと口を開いた。

「話があるの。一緒に来て」

髪長い先輩がそう言うのと、いつの間にか私の横にいた人がグイッと右腕を引っ張る。

——いたっ。

私が痛みに顔をしかめても、掴む力は緩まない。

放してほしくても言葉にはならないし、腕をつかまれているから、メモに字を書くことも出来ない。

——いったい何？私、どうなるの？

無言で歩く先輩たちが怖くて、怖くて。

掴まれた腕が痛かったけれど、私はおとなしくついていった。

誰もいない校舎裏に着いたとたんに乱暴に腕を解かれて、私は転んでしまった。

「あらあ、ごめんなさいね」
クスクス、クスクス。

私の腕を掴んでいた先輩が笑いながら謝る。
ちっとも気持ちが悪くもっていない“ごめんなさい”だった。

よろよろと立ち上がってスカートのほこりを払っていると、髪が長くて背の高い先輩が私の前に立つ。

「あなた、自分が目障りな存在だっという自覚はないの？」
体の前で腕を組んでいる先輩。私を見下ろす視線はすごく冷たい。

——目障り？どういうこと？

どうしてこの人たちがこんなにも怒っているのかが、私にはまったく分からない。

3年の教室がある階には、圭ちゃんに用事がある時しか行かないし、用が済んだらすぐに自分の教室に戻るようにしている。

目障りと思われるほど、ウロウロしてないはず。

首をかしげて考えていると、苛立ちを募らせた先輩たちが一斉に口を開いた。

「本当に分からないの！？思った以上に鈍感なのね」

「見た目もぜんぜんオシャレじゃないし、すべての感覚が鈍いのか

しら？」

「そうなんじゃないの。さっきもちょっと力を入れただけで、あんなに派手に転んだわ」

「そっかあ、運動神経も鈍いんだ」

「かわいそう」

私のことを悪く言って、面白そうに笑っている先輩たち。

—— どうして？なんで、こんなことを言われなくちゃならないの？

遠慮なく向けられる悪意に混乱し、私は訳も分からずただ立ち尽くす。

「まだ分かっていないみたいだから、教えてあげるわ」

私のことを“目障りだ”と言った先輩が一步前に出る。

「私は桜井君のファンクラブ会長よ。桜井君に迷惑がかからないように、抜け駆けする子を取り締まってるの」

—— 抜け駆けを取り締まる……。私に何の関係が？

再び首を傾げると、すごく憎しみのこもった声でこう告げてきた。

「あなた、彼にずいぶんと馴れ馴れしいわよね」

—— えっ？

私はこの会長さんが言っている意味が飲み込めなかった。

圭ちゃんとは仲がいいのは認める。

だけど、桜井先輩とは挨拶をしたりする程度で、人から言われる

ほど仲良しではないと思う。

時々、私のことを手伝ってくれるけれど、それは私から頼んだことではなくて、先輩が進んで手を貸してくれているのに。

自分から馴れ馴れしくした記憶はないのに。

「ここにいる人たちが見てるのよ。桜井君に荷物を運ばせたり、あれこれ雑用させているのを」

—— 違います！私はそんなこと、先輩にさせていません！！

そう言いたいの、声のない私には反論できない。

「あなたみたいな人が桜井君の近くににいるのは許せない。話もできない欠陥人間のくせに、この身の程知らず！！」

完全に私を見下した口調。

私は目の奥がジンと熱くなるのを必死で耐える。

「エリカ」。それはちよつと言い過ぎなんじゃないの？」

会長さんの後ろにいる4人が、笑いながら言う。

「言い過ぎ？そんなことないでしょ。だってこの子、泣いてないもの」

「あ、本当だあ」

「っていうか、欠陥人間だから泣き方を知らないんじゃない？」

「あははっ。ありえる」

手を叩いて笑い転げる先輩たち。

仕草も口調も視線も、すべて私に対する悪意がこもっていた。

容赦のない悪意を浴びせられて、私は唇が切れるほど噛み締める。
ここで涙を見せたら、この人たちは面白がってもっと容赦のない
言葉を浴びせてくるかもしれない。

——大丈夫だもん。泣かないもん。

必死になって自分に言い聞かせる。
先輩たちはそんな私の顔を見て、更に声を上げて笑い続ける。

——泣かないもん……。

だけど、何度強く言い聞かせても、私の心はもう限界。

——泣きたくなんかない。でも、もう無理……。

瞳にジワリと涙が浮かぶ。

その時、この一角に誰かが飛び込んできた。

桜井先輩だった。

(4) 人を好きになる権利

俺は体育祭の時以上に一生懸命走った。

——早く行かないと！早く！早くっ！！

校舎の角を曲がって目に入っただのは、ケラケラと笑い続ける3年の女子の背中。

それと、スカートをぎゅっと握り締めて、必死に涙をこらえている大野さんだった。

「お前ら、何やってんだっ！！」

5人を大声で怒鳴りつけた。

ギクリ、と体をこわばらせ、5人がゆっくりと振り向く。

俺の姿を視界に捉えて、更に全身を硬くした。

「さ、桜井君っ！どうして、ここに！？」

松本の顔が真っ青になる。

問いかけを無視して、俺は肩を震わせている大野さんに近づいた。そして、小さな彼女を自分の後ろに隠す。

「先に俺の質問に答えろ！人目のつかない所で、お前等は何をしてたんだ！？」

低く冷たい声で問いかけ、5人をじつくりと睨みつける。

しかし彼女たちはオロオロと視線を泳がせるだけで、口を開こうとしない。

俺は一步前に出た。

「さっさと答えろっ!!」

怒鳴り声に驚いて、5人は肩を竦める。

やや間があつて、松本が怖々と話し始めた。

「あ、あの……。その子が桜井君に付きまといっているから……。それで、ちよつと忠告をしていただけ。べ、別に虐めていた訳じゃないのよっ」

松本が取つて付けたような言い訳をすると、残りの4人も一斉に自己弁護を始める。

「そ、そうよ。桜井君は周りに女子がいると不機嫌になるじゃない」
「だから、私たちは桜井君のために……」

自分たちの行動に反省の色が見えないこいつらに対して、本気で腹が立つた。

「俺がいつ、そんなことを頼んだっ!?!」

あまりの怒声に、5人がビクツと震える。

「この子は俺に付きまといたりしてない。俺から彼女に近づいていったんだ!」

松本は泣きたいような、怒りたいような、複雑な顔をする。

「それ……、本気で言ってるの?」

「そうだ!」

俺がはつきり言うと、松本は突然叫びだす。

「私のことは鬱陶しがるのに!! その子は話もできない欠陥人間なのよっ?! どうしてそんな子を選ぶの?!」

ヒステリックな松本よりも更に大きな声を上げる俺。

「ふざけたこと、言つてんじゃねえよ!!」

俺の勢いに、5人が後ずさった。

「人の心の痛みが分からないお前らのほうが、よっぽど欠陥だらけだっ! 下級生1人によつてたかつて言いがかりをつけるなんて、最

低な人間だな!!」

「そんな、ひどいっ。私は、ただ桜井君のためを思っで。あなたが好きだから……」

松本が俺にすぎるような視線を送る。

俺は一つ息をついて、静かに言った。

「もちろん松本にも、その女子たちにも、人を好きになる権利はあるさ」

好きになるだけなら、何の問題もない。

彼氏がいる女の子を好きになることも、彼女がいる男の子を好きになることも、好きでいるだけなら許されると、俺は思う。

報われないことを承知で、影ながらそつと想いを寄せることは悪いことではない。

だが、こいつらは許されないことをした。

もう一度、全員を睨みつける。

「でもな。その権利は“好きな相手を手に入れるために、人を傷つけていい”ってことじゃないんだっ!!」

愕然とする5人。

「二度と余計なことはするな。分かったなっ!!」

俺の怒りにおびえながら、彼女たちは足早に逃げ去っていった。

(5) 届いた想い

あいつらの姿が見えなくなったところで、背後にいた彼女がゆっくりと息を吐く。

俺は体の強張りを解き、大野さんの正面に立った。

「怪我はない？」

彼女の様子を頭からつま先まで見る。

スカートが少し汚れているが、怪我はなさそうだ。

俺の呼びかけに対して、大野さんが“平気です”という意味で静かに首を振った。

だが、いきなり見ず知らずの上級生に囲まれて、さぞ怖かったことだろう。

体に傷はなくても、心には傷が付いてしまったかもしれない。その事が本当に申し訳なかった。

「ごめん、俺のことで巻き込んだりして」

再び首を横に振る彼女は大きく深呼吸をして、スカートのポケットからメモとペンを取り出した。

“どうしてここが分かったんですか？”

「3階を歩いていたら、あいつらに連れられている君を見たんだ」

“そうでしたか”

短い返事を寄越し、彼女は少しの間、動きを止める。

ややあつて、彼女のペンがメモの上で動いた。

“わざわざありがとうございます。私ならもう大丈夫ですから、気にしないでください”

淡々とした文章を差し出した後にペコリとお辞儀をし、立ち去ろうとした彼女。

その肩をとつさに掴む。

「平気じゃないだろ！？こんなに震えてるのに……」

小刻みに揺れ続ける細く小さな肩。

松本達が姿を消してから時間が経っているのに、いまだ俺の手に震えが伝わってくる。

彼女が受けた衝撃の大きさを物語っていた。

「怖かったよね？ごめん。本当にごめん……」

俺は何度も謝り、彼女の震えが止まるまで、肩に手を置いていた。

しばらくすると、ようやく彼女の顔の緊張が解けてゆく。それを見て、俺はゆっくりと手を下ろした。

彼女の手が再び動く。

“先輩は優しい人ですね”

俯き加減でメモが差し出された。

「あ、いや。誰にでも優しいわけじゃないし。その……、君にだけだよ、俺が優しいのは」

俺の言葉に顔を上げ、不思議そうに首をかしげる彼女。

その瞳にスツと影が浮かぶ。

“私が、『話すことの出来ない可哀想な子』だからですか？だから、優しくするんですか？”

ゆっくりと瞬きを繰り返す彼女の瞳に、うつすらと涙が浮かんだ。悲しみと悔しさが同時に見て取れる表情だった。

それを見て、俺はたまらず叫ぶ。

「違う！同情じゃない！！」

俺は彼女の瞳をじっと見つめる。

「哀れみじゃない！！——好きだから」

言葉にも、視線にも、自分の想いを乗せる。

「好きなんだ」

彼女の大きく愛らしい瞳が、驚きにギョツと見開かれた。

そんな彼女に向かって、俺は生まれて初めての告白を続ける。

「いつもそばにいたい。いつまでもそばにいたい。ずっと、ずっと、チカちゃんと一緒にいたい」

もっとカッコいいセリフを言いたいのに。

もっと想いを伝えたいのに。

今の俺は心臓がバクバクと激しすぎて、こんな言葉しか出てこない。

言い直そうとしても、何を言ったらいいのか分からず、俺は悔しげに唇を噛みしめることしか出来なかった。

告白が終わっても彼女は瞬きもせず、じっと俺を見つめている。

完全に体が固まってしまった彼女に、おずおずと呼びかけた。

「あの……、チカちゃん？」

彼女の肩がピクン、と跳ねる。

それでも、彼女は何も伝えようとはしてこない。

もしかしたら、断るための言葉を考えているのではないだろうか。

「俺じゃ……ダメ？」

恐る恐る尋ねる。

すると、彼女はプルプルと首を横に振った。そして急いでメモにペンを走らせている。

書き終えたメモを、俯いたままそつと俺に差し出した。

「えっと……。 “ 違うんです。好きな人の真剣な顔がすごく素敵で、思わず見とれていました ”。 …… え？好きな人？！」

——それって、それって……。

震える指で俺はゆっくりと自分を示す。

少し間があつて、赤い顔をした彼女がコクンとうなずいた。

イチゴのように真っ赤な顔で。

「本当に？」

改めて訊くと、さらに耳まで赤くして小さく何度もうなずく。

「やったあ！」

俺は嬉しくて、勢い余つて彼女を抱き寄せた。 突然のことに目

を白黒させている彼女を、ギュッと抱きしめる。

「やった。やったあ」

俺は満面の笑みを浮かべた。

それは両親が亡くなって以来、初めて浮かべた心からの笑顔だった。

(6) 涙と笑顔と

人生初の告白が無事に終わり、彼女を抱きしめる腕を緩めた。どちらともなく視線を合わせて、微笑みあう。

—— やっぱ、チカちゃんには笑顔が似合うな。これから先、彼女がいつでも笑っていられるように頑張ろう。

女のためには指一本動かすことさえ面倒だったのに、彼女のためなら何だってしてあげたいと思える。

こんなことを考える自分が照れくさいけれど、でもそれが、正直な気持ち。

『恋は人を変える』

そんな言葉をどこかで聞いたことがある。

嘘だと思っていたが、自分の身で証明された。それが本当だったと。

どこで聞いたかとも思い出せないほど昔に耳にした言葉を、俺は噛み締めていた。

俺と彼女は近くにあったベンチに腰を下ろす。
俺の右側に座る彼女から伝わる体温が心地いい。

お互いの体温を感じながら、2人とも黙ったまま。さっきまで普通に話せていたのに、改まると妙に気恥ずかしいのだ。

——ああ、ダメだ。何か話さないと。

俺は頭をめぐらせて、話のきっかけを探した。

「あ、あのさ。いつから好きになってくれたの？」

俺と接する彼女は、これまでずっと『俺が好きだ』という素振りを見せてくれなかった。

いつでも単なる“顔見知りの先輩”という感じ。

彼女は何回か瞬きをした後、考え込む。

しばらく首をかしげて、サラサラとペンを動かした。

“体育祭で、先輩がりレーの選手で走った時からでしょうか。怖いくらいに真剣な顔に目が奪われて”

それを読んで、胸の奥がくすぐつたくなる。

「そっか。必死だったのは、俺を応援しているチカちゃんを見たからなんだ」

“え？あんなにたくさん人がいたのに、よく私が分かりましたね？”

「だって、あんなに大きなポンポンを振り回してたら、目に入るよ」

クスツと笑う。

「一生懸命応援してくれているチ力ちゃんに、中途半端な俺を見せたくなかった。だから、必死で走った」

“ そうだっ たんですか ”

「次の日、筋肉痛で大変だったけどね。……でも、頑張っ てよかった。おかげで好きになっ てもらえたから」

これまでの緊張が嘘みたいに、彼女の前だと素直に言葉が出てくる。

聞いている彼女は真っ赤になったり、モジモジしたり、落ち着かないみたいだが。

“ どうして先輩は、こっちが照れるようなことを平気で言うんですか！ドキドキすぎて、心臓が壊れそうですよ！！ ”

「しかたないよ、自然に口から出るんだし。……でも、チ力ちゃんの心臓が壊れるのは困るから、もう言わない」

それを聞いた彼女の顔が不安そうな色に染まり、遠慮がちに俺の腕に触れてくる。

そして、『イヤだ』と言うように首を小さく横に振った。

俺はニヤツと笑う。

「……ウソだよ」

ああっ、と大きな口をあけた彼女は“先輩の意地悪！”と書いたメモをサツと俺に押し付けて、プイツと横を向いてしまった。

だけど、すねて見せたのは一瞬。小さく笑いながら俺にメモを差し出してきた。

“先輩はイメージとぜんぜん違いますね。みんなは『クールだ』って言うけど、本当は笑ったり、怒ったりするし”

「周りの女子からいろいろ言われて、うんざりしているからなあ。クールってよりも、不機嫌だっただけかも。普段はそんなんじゃないんだけどね」

彼女はフツと笑って、ペンを進める。

“それに、優しいです。初めて図書室でお話した時、友達から聞いていた印象とずいぶん違うんだなって。”

それからちよつと気になっていたんですよ。はつきり自覚したのは、ずいぶん後でしたけど”

「俺も考えれば、最初からチカちゃんが気になっていたのかもしれない」

図書室でのやり取りを思い出す。

「俺の心無い言葉で傷ついたはずなのに、“慣れているから平気です”って寂しそうに笑う顔が忘れられなかったんだ」

それを聞いて、彼女は困ったような微笑みを浮かべる。

俺はそんな彼女の頭をそっとなでた。

「自分の外見のことを言われるのは大嫌いなのに、チカちゃんに力ツコいって言われて嬉しかった。女子は近くにいるだけでも鬱陶しいのに、チカちゃんがそばにいるのは心地よかった」
ふっ、と短く息を吐いて彼女を見つめる。

「他の女子は邪魔なだけなのに、チカちゃんは違った。初めて逢った時から、特別な存在だった。俺にとって、チカちゃんは運命の人なんだと思う」

真剣に語った俺の言葉を、彼女はどこかぼんやりと聞いていて、反応がない。

「チカちゃん？」

呼びかけると彼女はゆっくりと瞬きをして、ペンを動かす。

“先輩が私のことを好きってことが、やっぱりまだ信じられなくて”

はにかむ表情がどこか硬い。

スツと目線を落とし、ペンを走らせる。

“前に、私は恋愛小説を読まないって言いましたよね？”

「覚えてるよ」

すぐくつらそうな顔で涙をこらえていた姿を覚えている。

“自分に恋愛は出来ないって、本気で思っていたんです。私を好きになってくれる人はいないだろうって。だって、私には想いを伝える『声』がないから”

俯く彼女の肩が震えたように見えた。

泣いてしまおうかと思った俺は、そつとその肩を抱き寄せる。

しばらくじっとしていた彼女は再び手を動かす。

“先輩は誰もが注目するほど素敵な人です。私は何の取り柄がない上に、話すことが出来ない。つまり障害者です。先輩とはあまりにも不釣り合いで、好きでいることがつらかった……。

私にあれこれと手を貸してくれたことは嬉しかったです。でも、私が可哀想だから手伝ってくれているんだって思えて。嬉しいのに、悲しかったです”

ここまで一気に書くと、彼女は手を止めた。続きを書こうか、やめようか、迷っているみたいだ。

動かないペン先を2人で見つめる。

やがて大きく息を吸い込んだ彼女は、手を動かした。

“先輩のこと、あきらめようって思いました。何度も、思い出しました。それでも、自分の気持ちは変えられなくて。

悩んだけど、想いが通じないことを承知で好きでいることを続けました。恋愛は無理でも、片思いなら出来ますから”

「何、言っただよ。俺の言葉にウソはないから。だから信じて」
彼女の肩に置いていた手にそっと力を込める。

「チカちゃんはいいい子だよ。素直でかわいい、素敵な女の子だよ。だからもう、自分のことを悪く言わないで」

彼女の瞳が柔らかく細められる。

“先輩の気持ちはすごく嬉しいです。ウソじゃないって分かってます。でも……”

彼女は少し前に書いたメモに戻り、『障害者』という文字の周りをグルグルとペンで囲む。

そして、深いため息をついた。

俺は彼女に微笑みかける。

「あのさ。声が出ないことは動かしようのない事実だけど、俺はそれも含めてチカちゃんが好きなんだよ。俺と初めて逢った時から、君は話せなかった。それでも、俺はチカちゃんに惹かれた」

置いた手にグツと力を込めると、彼女がゆっくりと顔を上げる。

俺は彼女の瞳をまっすぐ見つめ、ありったけの想いを込めて囁いた。

「好きだよ。君が障害者でも、俺はチカちゃんが好きなんだ」

彼女の大きな瞳にブワツと涙が浮かんた。

溢れて止まらない涙を小さな手でぬぐいながら、メモの上でペンを動かす。

“ あきらめないでよかった。先輩が大好きです ”

涙をポロポロと流しながら、とびきりの笑顔を俺に向けてくれた。

(7) 明日も明後日も

辺りが少しずつ暗くなってきた。

このままここにいたら、寒さで彼女に風邪を引かせてしまう。

「そろそろ帰ろうか」

俺の言葉に彼女がうなずいた。
だが、動こうとはしない。

「チカちゃん、何で立たないの？」

“先輩こそ”

「ん？いや、まあ」

もっと一緒にいたいから……とは、何となく恥ずかしくて言えない。

彼女も俺と同じ気持ちらしい。

お互いがモジモジとしたまま、無言の時間が流れてゆく。

そんな時、彼女が小さなくしゃみをした。

「あつ、やっぱりすぐ帰ろっ」

俺は慌てて立ち上がる。

「明日も明後日も、これからはずっと一緒にいられるから。今日はもう、帰ろっ」

彼女の手を引いて立ち上がらせた。

そこへ……。

「こらあ、桜井！何やってんだっ！」

学校一怖いゴリラ……、いや、体育教師の後藤先生が走りこんできた。

その後からはゼーゼーいつてる小山。

先生はズカズカとこっちにやってきて、俺と彼女を強引に引き離した。

——え？なんだよ、これ？

突然のことにあっけにとられる。

先生は俺の肩をグイッと押しつけ、彼女の前に立った。

「大丈夫か、大野。桜井にひどいことされなかったか？」

ゴリラ顔からは想像も出来ない優しい声。

——こいつ、女子にはヒイキしてやがるな！

それよりも。

「先生！俺はそんなことしてないですっ」

「……そうなのか？」

ものすごく疑わしい目で、俺を見てくる。

「そうです！」

短く言い切り、少し離れたところでまだ肩で大きく息をしている小山を呼んだ。

「おいっ！お前、どんな説明をしたんだよ！？」

「え？それは“一年の大野さんが連れて行かれて、大変な目に合いそうだ”って……」

「まったく、それじゃ言葉が足りなすぎだろ！そんな言い方したら、今ここにいる俺が彼女にひどいことをしてるみたいじゃねえかよっ！」

「あ、そうか。ごめん」

小山は頭をかいた。

「しっかりしてくれよ」

やれやれと、俺はため息をつく。

「彼女を連れ出したのは、俺じゃなくて松本たちです」

「大野、本当か？」

先生の言葉に、彼女は大きくうなずいた。

「よし、分かった。あいつらには俺から注意をしておく。じゃ、気をつけて帰れよ」

俺たちにそう言い残し、先生は校舎に戻っていった。

「まったく、小山は焦りすぎだよ。危うく俺が悪者になるところだったじゃねえか」

「だから、ごめんって。……それより、何でお前とチ力ちゃんはそんなにくっついて立ってんだ？」

さっきは先生に無理やり離されたけど、いつの間にか寄り添っていた。

「ああ、うん……」

言おうかどうか迷う。

——でも、小山はチ力ちゃんのイトコだし。小山がいたから彼女と知り合えたわけだから、隠しておくのも悪いか。

俺は照れを隠すために、あえて素っ気なく言う。

「実は……、付き合うことになった」

「はあっ?!」

もともとそんなに大きくない小山の目が、バツと大きく開く。

「なんで松本たちがいた流れからそうなるんだよ?!」

「何でって……。説明するとややこしいことになるから、別の機会に。ま、とにかくそういうことなんだ」

隣に立つ彼女に目をやると、ほほを赤く染めながらうなずいている。

「あー、もう、なんなんだよお。必死で駆けつけたら2人でいい雰囲気だし、付き合うことになってるし。おまけに、桜井はだらしくニヤけてるし」

「べ、別に、ニヤけてなんかっ」

「その顔のどこがニヤけてないって言うんだよ?」

—— お前のほうがよっぽどニヤニヤしてると思うが?

小山はじつと俺の顔を見て、そしてニツと笑った。

「細かいことはいいか。桜井の嬉しそうな顔が見られて、俺は心底ホッとしたよ」

「ホッとした?」

小山の言葉に、思わず聞き返す。

「ああ。だってお前、嬉しいとか、楽しいとか、あんまり表情に出ないじゃん。いつも思いつめたように不機嫌でさ。過去に人には言えないようなつらいことがあったんだろうなって、心配してたんだぜ」

わいわい騒いでふざけてばかりの男だと思っていたけど、小山は

俺の心の傷に気がついていたのだ。

なのに俺を気遣い、あえて訊き出そうとはしてこなかった。

そんな心配りが出来る男だから、俺は友達として認めたのかもしれない。

ひょんなところで小山の長所を見つけた——でも、なんとなく悔しいから絶対黙ってしよう。

「俺、予備校に行くから先に帰るな。桜井たちも早く帰れよ」
「ああ」

手を振って、去っていく小山の背中を見送った。

ヒヤリとした風が吹く。

「帰ろうか」
何気ないふりを装って、俺は右手を差し出した。
本当はちよつと、いや、かなりドキドキしてる。

チカちゃんはさつと顔を赤くして、じつと俺の手を見ている。

そして、ゆっくり、ゆっくりと自分の左手を上げて、そつと俺の手に重ねてきた。

その指先をやりわりと包んで、俺は歩き出す。
すぐ横にいる彼女の存在が可愛くて、嬉しくて、自然に口元が緩んでいた。

(1) 強い心

フアンクラブは解散となった。

松本たちが腹いせに何か行動を起こすかもしれないと心配していたけれど、俺に怒鳴られたことがよっぽど怖かったのか、大野さんに危害を加えるようなことは一切ない。

付き合い始めて2週間。

俺は彼女のことを『チ力』と呼び、チ力は俺のことを『アキ君』と呼ぶようになった。

呼び方が変わったおかげで、もっと仲良くなった気がする。

照れくさくてくすぐりたい毎日だが、温かな幸せを感じていた。

チ力と過ごせる高校生活はあと少し。年が明ければ俺たち3年生は自宅学習となる。

今のように毎日とは会えなくなるから、俺は出来る限りチ力と一緒にいる時間を作った。

「桜井。これまでとはぜんぜん違うな」

いそいそと帰り支度をしている俺を見て、小山があきれたように言ってくる。

「そうか?……どうだろ、自分じゃ分かんねえけど」

「別人だよ、別人。いつも楽しそうだしさあ」

「まあ、それは当たってるよ。実際楽しいし」

「はいはい。ノロケてないで、早くチ力ちゃんのところに行ってあげれば？」

「なんだよ。お前から話しかけてきたくせに」

ペンケースをカバンに突っ込んで、俺は席を立つ。

「じゃあな。俺、待ち合わせしてるから」

「ああ。チ力ちゃんによろしくな」

小山と軽く手を振り合って、教室を出た。

チ力と一緒に帰る事が、付き合いだしてからの日課となっている。彼女に図書委員の仕事がある時は、終わるまで図書室で自習して時間を潰すことにしていた。

一年の授業はもう終わっているから、既に彼女は委員の仕事当中だろう。

俺はまっすぐ図書室に向かった。

中に入ると本を読んだり、勉強をしている生徒たちの姿はあったが、彼女の姿はない。

——あれ、どうしたんだろう。

とりあえず手近なイスにカバンを置いた。

見える所にいないということは、奥の棚で本の整理をしているのかもしれない。

俺は背の高い本棚の間を静かに移動してゆく。

すると、チ力が一番奥の専門書が置かれた一角にいた。腕を伸ばして、さらに爪先立ちで本を棚へ入れようとしている。

あまりに必死な姿が可愛らしくて、しばらく見守っていた。

ところが、腕をしびれさせた彼女の手から分厚い専門書が滑り落ちる。

「危ないっ！」

とっさに駆け寄って落ちてくる本をつかんだ。

突然現れた俺に驚いて、ぱちぱちと瞬きを繰り返しているチ力。俺は受け止めた本をそつと棚に押し込み、彼女の頭をポンポンとたたいて苦笑する。

「小さいのに無理したらダメだろ」

チ力はものすごい小柄ということではないけれど、俺の背が高いので身長差が20センチ以上はあるのだ。

“小さいって言わないでよ！”

プリプリと怒りながら、書いたメモを俺に見せる。

——なんで怒るのかなあ。この小ささがいいのに。

ムキになって顔を赤くする彼女が可愛くて、ついからかってしま
う。

「小さいよ。うん、小さい、小さい」

“そんなことないもん！！”

プウツと頬を膨らませるチ力。

「そんなことあるって」

彼女の手首をつかんでグイッと引き寄せた。

よけたチ力が俺の胸に倒れこんできて、それを抱きしめる。

「小さいから、俺の腕にすっぽり収まるよ。ちょうどいいサイズだね」

クスクスと笑いながら彼女の耳元で囁く。

するとチ力の耳が、怒りとは別の意味で赤く染まった。

その後、俺はおとなしく自習をして、チ力の仕事が終わるのを待っている。

時々チ力が俺を見て、さっきの事に対する照れ隠しにべえつと舌を出してくるけれど、俺がずっとニコニコしているから諦めたらしく、黙々と作業をしている。

——チ力は見えていて飽きないよ。

彼女といると、つまらないと思うことがなくなった。

まさに、人生が変わったと言えるかもしれない。

——小山の言うとおり、ぜんぜん違うな。

そう思えるようになったのはチ力がいるから。

——彼女の何が俺を変えたんだろう？

俺は教科書に視線を落しながら、ボンヤリと考えていた。

チカの仕事が終わリ、俺たちは近くのファーストフード店に入る。

「チカ、さっきは何を買ったの？」

ここに来る前、彼女は“買いたい本があるから”と、本屋に寄った。

チカはテーブルの上に一冊の本を載せる。それは優しい線で描かれた猫が表紙の絵本。

パラパラと中をめくると、そこには短いけれど穏やかな言葉がたくさんある。

この年になって絵本に興味はないけれど、この本はいいなっと思った。

「これがどうかした？」

“好きな作家さんの。私、将来は絵本作家になろうと思うんだ”

少しはにかみながらメモを差し出してきたチカの瞳は、まっすぐと力強い。

——チカは自分にハンデがあっても、しっかりと先を見てるんだ。

「チカはえらいな。話せないのに、前に進もうとしてる。強いよ」

しみじみそう告げると、チカは首を横に振った。

“私はぜんぜん強くないよ。『声が出なくなる』って聞かされた時、すっごく泣いたもん。私には未来がないんだって思えて、本気で死んじゃおうかって考えたりもしたし”

彼女はペンを止めて、ふうつとため息をつく。そしてチラッと俺を見てから、またペンを動かした。

“でもね、声が出ないからってそこで私の人生が終わるわけじゃないって気がついたの。もちろん不便だし、つらいこともあるけど、泣いたって私の声は戻ってこないから。

だったら、今の自分に出ることを精一杯やろうって決めたんだ。どうせ生きるなら、楽しいほうがいいもんね”

チカは笑顔とともに、小さなガッツポーズを見せる。

チカの気持ちの切り替えは、俺が言葉に対して期待しなくなったことと同じことなのだろうか。

人生をあきらめたってことなのだろうか……。

「それってさ、色んなことを諦めたって意味？」

“んー、あきらめるといふのとは違うかも。なんて言うのかなあ”

チカがメモの上でペン先をウロウロさせながら首をひねる。

“うまく言えないけど、『覚悟を決めた』って感じかな。メソメソ

しているよりも、逃げないで受け入れてしまったほうが、きっと笑って生きていけるって思ったの”

チカはペンを置いてジューズを飲み始めた。

その表情に、自分の人生を悲観している様子はない。

—— やっぱり、チカは強いよ。

俺なんて簡単に諦めて、逃げ出して、自分から壁を作って、人を信用しなくなった。

これまで、本当につまらない人生だった。

そんな俺だけど、チカといれば変わるだろう。

これから先は楽しい未来が待っている。

チカがいてくれれば。

(1) 強い心(後書き)

- ご無沙汰しまくりで、ごめんなさい。

諸事情によりへこみまくっていましたが、どうにか連載を再開できるようになりました。

今後とも宜しくお願い致します。

（２）幸せであるように

12月9日がチカの誕生日だと、小山に教えられた。

「1週間後かぁ。何かプレゼントしたいよな」

部屋で雑誌を読みながら、ふと呟く。

「やっぱりペンとメモかなあ」

俺と付き合うようになってから、チカのメモの消費量が格段に増えた。

自分ではおしゃべりだと思っていなかったが、チカといるとずっと話している気がする。

そうになると、必然的にチカのメモはどんどん使われてしまうのだ。

「でも、それだけじゃつまんないか。チカが喜びそうなものってな
んだろっ」

しばらく頭を巡らせるけれど、いい案は浮かばない。

「……仕方ないな」

俺は立ち上がって部屋を出た。

残業している伯父さんの帰りをリビングのソファで待っている
伯母さんのところへ向かった。

ゆつたりとテレビを見ていた伯母さんが俺に気がつく。

「あら、晃君。どうかした？」

「うっ、うん……」

相談するつもりで来たのだが、いざとなると恥ずかしくて言い出

せない。

なかなか口を開かない俺に、伯母さんが尋ねる。

「何か悩み事でもあるの？」

「まあ、そんな感じ」

突っ立ったまま視線をさまよわせていたら、伯母さんが吹き出した。

「はつきり言ったら？ “好きな人” のことで、何か相談があるんでしょ？」

「え！？」

思わず目を瞠る。

チカのことはまだ伯父さんにも伯母さんにも話していないのに、どうして分かったのだろう。

そんな俺の心情を読み取った伯母さんが説明してくれる。

「このところの晃君、すごく明るくなったもの。きっと彼女が出来たのよって、順二さんと話してたのよ」

「あ、ああ。そうなんだ……」

知られていると分かって恥ずかしさが増したけれど、かえって肩の力が抜けた。

「あの……、もうすぐ彼女の誕生日なんだ。一応プレゼントは決めたんだけど、それだけじゃなんか物足りない気がして。女の人は何をもらったら喜ぶ？」

俺にとって、チカが初めての彼女。

今まで女性と付き合ったことはないし、母親以外の女性にプレゼントなんかしたことが無かった。

付き合うどころか、極端に接触を避けていたので女子のことがまったく分らない。

“オンナは厄介な生き物”という認識しか抱いてこなかった俺だから、女性の好みなんて、これまで一切知ろうとしなかったのだ。

「そうねえ」

伯母さんはゆっくりと視線を巡らせて、少し考える。

「アクセサリーなら、たいていの人は喜ぶわ。特に指輪」
「指輪？」

「そう。ネックレスやピアスと違って、異性から贈られる指輪には意味があるのよ。結婚式で交換するのは、昔から指輪でしょ」

「あ、確かに」

「好きな人からもらう指輪は更に特別な意味を持つわ。ずっと一緒にいたいっていう意思表示だから」

そう言って伯母さんは薬指にはめられている指輪に視線を落とし、幸せそうに微笑んだ。

——指輪かあ。チカにプレゼントしたら、すっごく驚くんだろうな。真っ赤になって、オロオロしてさ。

慌てふためく彼女の姿が簡単に想像できて、つい口元が緩む。

そんな俺の様子に、伯母さんが苦笑した。

「ふふっ。晃君、よほどその子が好きなのねえ」

「な……、何言ってるの。やだな、伯母さん」

「照れなくなっただけいいのに。今の晃君、幸せそうな顔をしてたわ」
伯母さんが目元を穏やかに細めて言う。

「あっ、そ、そう？」

ズバリと指摘され狼狽える俺を見て、伯母さんは更に優しく微笑む。

「ええ、とっても幸せそうよ。晃君にそんな顔をさせる彼女を、私達にぜひ紹介してね」

俺を変えてくれたチ力を、伯父さんと伯母さんに会わせよう。きっと、チ力のことを気に入ってくれるはずだから。

「うん、近いうちに」

そう言って、リビングを後にした。

部屋に戻って、携帯電話を取り出す。

伯母さんに『指輪を買う時にはサイズを確認しなさいね』と、注意されたのだ。

チ力には内緒で用意するから、本人には聞けない。……と、いうことで小山に電話することにした。

彼女には絶対に秘密だからと念を押すと、小山はニヤニヤするのを隠しもしない。

『へえ、桜井がチ力ちゃんのために指輪を買うのかあ。うわあ、マジで惚れてんだあ』

「うるさい、冷やかすな!!」

受話器に向かって、思い切り怒鳴ってやった。

『はいはい、そんなに怒鳴るなって』

それ以上冷やかしてくることは無かったが、相変わらず受話器越しにニヤけた雰囲気バシバシと伝わってくる。

相談する相手を間違えただろうか。

とはいえ、こんな話、小山以外にはできない。

苦々しく思いながら、話を進める。

「それで、指輪のサイズは分かりそうか？」

『俺の母さんが趣味でいろんなアクセサリー作っててさ。チ力ちゃんにもいくつかプレゼントしたことあるみたいだから、たぶん分かると思うよ』

折り返しかけるからと言って、小山は電話を切った。

そして待つこと10分。

小山はきちんと調べてくれた。

おまけにお母さんには、『くれぐれもこのことはチ力ちゃんに内緒で』と、しっかり口止めをしてくれたようだ。

こういう気の回るところは頼もしい。

サイズを覚えてくれた後も散々俺をからかってきたが、電話を切る間際『チ力ちゃんをよろしく頼むよ』と、至極真面目な声で言われた。

今まで聞いた事のない、真面目な声。

「小山？」

『ホントに頼むな。チ力ちゃんはこれまでつらい思いを沢山してきたから、絶対に幸せになってほしいんだ』

真剣な声から伝わってくる、痛いほど真摯な想い。

小山にとって、チ力は大切な妹なのだろう。

「うん、分かってるよ」

小山の気持ちは伝わり、俺は素直にうなずいた。

『泣かせたら、ただじゃおかないからな』

「大丈夫だつて」

『絶対だぞ!』

「任せとけ」

『万が一チカちゃんが泣いたら、容赦なくぶん殴るからな!それこそ、顔の形が変わるくらい』

「分かったって言ってるだろ!あーっ、しつこい!」

そんなやり取りを数回繰り返す。

「もういいだろっ。切るぞ!」

乱暴に言い捨て、終話ボタンに指をかける。

すると小山は電話の向こうで慌てた声を出した。

『ま、待ってくれ。最後に一言っ』

「ったく、なんだよ」

はあ、とため息をつきながら、小山の言葉を待つ。

受話器から聞こえてきたのは、

『桜井。お前も幸せになれよ』

という言葉だった。

照れたように言ってくるから、俺も釣られて照れる。

「な、なんだよ。急に……」

『俺はイトコのチカちゃんも大切だけど、友達のお前も大切なんだ。』

だから、さ
『

—— 本当にいい奴だよ、小山は。

ちよつと胸がジンとする。

「ありがとな。でも、俺はもう十分幸せだから心配すんな」

『うつひゃー！桜井の口からそんなセリフが聞けるとは。こりゃあ、明日は槍が降りそうだ』

「なんだとっ！」

『あははっ、冗談だつて。じゃあな』

「ああ」

俺たちは電話を切った。

畳んだ携帯を持ったまま、ゴロリと床に寝転ぶ。

—— “幸せ” かあ。

軽く目を閉じて、屈託のない彼女の笑顔を思い浮かべた。
それだけで、心がホワツと温かくなる。

—— 俺がそばにいて、チカが幸せになるといいな。

(3) EVERLASTING

チカの誕生日をあさつてに控えた日曜日、俺は1人で買い物に来ていた。

小山が勧めてくれたアクセサリショップは店長が趣味の延長で始めた店で、よくあるジュエリーショップのように威圧感はない。

そして“高校生の小遣いでも楽に手が出せる商品が多い”というありがたいことだ。

指輪のコーナーでしばらく眺めていると、30歳くらいの男の人が店の奥から出てきた。

感じからして、おそらく店長かもしれない。

「いらつしゃい。プレゼントを探しているのかな？」

プロレスラーみたいに大柄な人だったが、声がすごく優しくかったので思い切って話しかけてみた。

「あ、あの……、彼女の誕生日プレゼントなんですけど、どんなデザインがいいのか迷ってしまつて。女の子にあげたことなんて無いから、その……、よく分からないんです。お勧めはありますか？」

緊張して上手く話せなかったが、その人は俺のことを笑うことも無く、すぐ傍まで来てくれた。

指輪が並ぶケースに目を落としながら、俺にいくつか質問をしてくる。

「彼女は何歳？」

「今度16になります」

「いつから付き合つてるの？」

「一ヶ月くらい前から」

「初めての誕生日プレゼントかあ。そりゃ、気合も入るよなあ。そ

れで、可愛い？それとも綺麗なタイプ？」

「可愛いです、すごくっ」

俺が即答すると、その人がクスツと笑う。

「君はよほどその彼女が好きなんだな」

「あ、いや。まあ……」

照れくさくなつて頭をかいた。

「そんな初々しい君達にはこれがいいかも」

陳列ケースから出されたのは、リングの中央に四葉のクローバーが刻印されたシルバーリング。

クローバーの両脇には、小さくて丸いピンクのガラスが1つずつはめられている。

シンプルだけど可愛らしくて、チカに似合いそうだ。

「このリングの裏には“EVERLASTING”って彫ってあつてね。2人の関係がいつまでも続きますようにという願いを込めて作つたんだ」

「へえ」

渡されたリングを見ると、小さな文字で彫つてある。

「まだ高校生の君にとっては少し重い意味合いかもしれないけど、人を好きになるのはいつだってそのぐらいの想いが必要だと思うんだよ。」

生きていると色々あるから、別れを選ぶことになる時があるかもしれない。でも、付き合っている間は“ずっと一緒にいよう”って思つてほしいんだ」

その話がすごく胸に響いて、俺はこの指輪を買うことに決めた。

チカの誕生日当日は、12月というのに珍しく穏やかで暖かい。

学校帰り、途中にある公園に寄った。

少しかだけ陽が傾いて、薄いオレンジ色の光が辺りを照らしている。チカと並んでベンチに腰を下ろした。

遠くで子供たちの楽しそうな声がしているが、俺たちの近くには人がいない。

俺は早速、通学バッグの中から包みを取り出す。

「誕生日、おめでとう」

チカが驚いてパチパチと瞬きした後、慌てた様子でメモに書き出した。

“ どうして知ってるの？私、今日だって教えてないのに ”

「 小山が教えてくれたよ。 “ 付き合い始めて最初の彼女の誕生日は特に重要なんだぞ ” って、すっげえエラそうに言いながらさ 」

“ もつ。圭ちゃんたら ”

クスクスと笑いながら、チカはペンを動かす。

“ アキ君、ありがとう。ね、開けてもいい？ ”

「どうぞ」

チカは嬉しそうにラッピングを解く。
中から出てきたのはチカが好きそうな色のペンと、やたら分厚いメモ帳。その厚みに目を丸くしている。

「だって、チカはおしゃべりだから。このぐらいじゃないと、すぐになくなっちゃうだろ」

するとチカがぷうつと膨れる。

“私はそんなにおしゃべりじゃないもん。アキ君に合わせて話してるだけだもん”

「なんだよ。俺のせいにするのか？」

苦笑いを浮かべて軽く睨むと、チカはペロツと舌を出し、

“お互い様かな”

と書いた。

チカはメモとペンを大事そうに撫でながら、ポツリと呟く。

“2人ともおしゃべりだから、こんなに厚いメモでもすぐになくなったりして”

「その時はまた買っよ。この先ずっと、俺がメモを買ってあげる。」

……ずっと」

俺の真剣な声に、チ力は少し眉をひそめる。

“ずっと？それ、本気？”

幼い自分たちが口にする『ずっと』は危うくて、もろくて、いつ崩れ落ちるか分からない。

それでも、俺はずっと、ずっと、チ力と一緒にいたい。
この想いは遊びなどではない。

「本気だよ」

チ力は少し首をかしげて、小さく笑う。

「その顔は信用してないな？じゃ、もう1つプレゼント」
キョトンとしたチ力の右手に、淡いピンクの布が張られた小箱を載せる。

「中、見て」

うなずいたチ力が恐る恐る蓋を開けて、息を飲んだ。
その驚いた顔は俺の予想以上だ。

太陽の光がちょうどリングに当たって、キラキラと輝いている。
固まってしまったチ力の左手を取って、その薬指にリングをはめてあげた。

「このリングには“いつまでも一緒にいられますように”って言葉が彫ってあるんだ」

そのまま彼女の手を握りこむ。

「俺はまだまだ子供だけど、ずっとチ力と一緒にいたいって気持ち
は本当だよ」

チ力はただじっと俺を見つめる。

その瞳にはうつすらと涙が浮かんでいて、泣きたいのと笑いたいのがごちゃごちゃになった顔で、何度も何度もうなずいていた。

(4) 解けてゆくわだかまり

チカははめられたリングを大事そうに眺めて、指先でそつと撫でている。

「そんなに嬉しい？」

尋ねると、縦に大きくうなずく。

「それならよかった。やっぱり伯母さんに相談して正解だったな」

“伯母様に話したの？”

「何をプレゼントしたらいいのかわからなくてさ。伯母さんなら、女性がどんな物を喜ぶのか分かるだろうし。」

その後、伯母さんから話を聞いた伯父さんに冷やかされて参ったよ」

チカが嬉しそうな顔で俺にメモを渡す。

“アキ君、顔つきがすごく変わったね。前に伯父様と伯母様の話をした時よりも、表情が柔らかいもん”

「変わったのはチカのおかげだよ」

俺はチカの頭を撫でる。

「チカといると“俺に向けられる言葉や気持ちを信じてもいいんじゃないか”って、最近、そう思えるようになった。」

だから、少しずつだけど伯父さんたちに甘えられるようになったんだ」

チカが俺の話を聞いて、少し不思議そうに眉をひそめる。

“最近つて、どういうこと？”

「あ、それは……」

俺の過去の出来事や、俺がこれまで抱いてきた思いをチ力に話して、彼女はと思うだろうか。

重く暗い感情を話して、チ力は俺のことを嫌いになったりしないだろうか。

初めて好きになった人に嫌悪されてしまうことは、怖くてたまらない。

だけど、この先もずっと一緒にいたいと願うチ力に対して、隠しておくことはしたくない。

やや躊躇ったものの、俺はこれまで誰にも打ち明けたことのない話を始めた。

「両親は、俺を残して死んだんだ。何の前触れもなく、何も言い残さず、自殺した」

感情もなく淡々と言うと、チ力の息を飲む音が聞こえた。

俺は話を続ける。

「晃は俺の宝物だ。何があっても、守ってやるからな」って言うたくせに。「晃に彼女が出来るまで、いつも一緒よ」って、言ったくせに。突然この世からいなくなつてさ」

俺はスツと視線を落とした。

一呼吸おき、そして苦々しい独白を続ける。

「それ以来、俺は簡単には人を信用することが出来なくなった。好きだよ”、“ずっと一緒だよ”って言ってくれる人はいたけど、どうせ俺を置いて行ってしまうくせにって思えて……」

ベッドに横たわった両親の姿を思い出し、ひざの上に置いていた俺の手が小刻みに震えだす。

しばらく俺を見守っていたチカが、静かにメモを差し出した

“お父さんとお母さんのこと、今でも恨んでる？”

それを見て、俺はゆつくりと大きくうなずいた。

「正直、恨んでるよ。伯父さんや伯母さんにはだいぶん心が許せるけど、父さんと母さんのことは……」

両親の姿が目前に浮かび上がり、彼らに手を伸ばしたその瞬間に霧散した。

今なお自分の中にある、『置き去りにされた』という思い。

握ったこぶしに力が入る。

「突然独りぼっちになっただんだ！悲しかった。寂しかった……」

この世のすべてが終わったかのように思えたあの日。

大好きな両親においていかれたあの日。

たった一人、残されたあの日。

『絶望』なんて言葉は生ぬるいとさえ感じた。
それほどの虚脱感に襲われたのだ。

俺はがっくりと肩を落とし、重いため息をついた。

これまでおとなしく話を聞いていたチ力が、ペンを動かす。

“ そうだったの。”

そんな事があつたら、自分の親でも許せなくなるかもね”

チ力は強張った俺のこぶしに自分の手をそつと重ねた。

俺の手を包むように握ったり、ポンポンと軽くたたいたりした後、
またペンを動かす。

“ でも、私はアキ君のお父さんとお母さんを嫌いにはなれない”

「 え? 」

思いがけない言葉に、俺は弾かれたようにチ力を見た。

チ力はやわらかく目を細めて静かにうなずき、書いたメモを見せ
てきた。

“だって、お二人がいたからアキ君は生まれてきたんだもん。アキ君のご両親に感謝してる。だから、嫌いになんてなれないよ”

チカがフワリと微笑む。

それだけで、これまで俺の心の奥底で固まっていた黒い感情がほんの少し軽くなる。

“すごくつらい思いをしたから、すぐにご両親を許す事が出来ないのは分かるよ。アキ君の寂しさを考えたら、「許してあげて」なんて、私からは言えない”

チカは少し間を置いてから、新たなメモを差し出してくる。

“だからその分、私がアキ君のご両親を好きになるよ”

清々しい瞳で、チカは真っ直ぐに俺を見つめていた。

その瞳はとても穏やかで、見ているうちに少しずつ心が凪いでゆく。

黒い感情がさっきよりも軽くなる。

彼等が俺を残してこの世を去った事は、動かしようのない事実。

だが……。

「そうだよな。父さんと母さんがいたから、俺はチカに逢えたんだよな」

それもまた、事実。

俺はこれまで詰めていた息を深く吐く。

暗闇立ち込める心に、光明が差し込んだかのように感じた。

チカの言葉を聞いて、今はまだ無理だけど、この先いつかは父さんと母さんが許せそうな気がしてくる。

いつになるか分からないけれど、その可能性はまったく無いとはいえない。

——チカは、本当にすごいよ。

人を信じる気持ちを俺に思い出させてくれた。

5年間抱え込んだ両親への恨みを解かすきっかけを与えてくれた。

「チカ、ありがとう」

どうして礼を言われたのか分かっていない彼女は、大きく首をかしげている。

その顔にだいぶ傾いた陽の光が当たって、優しいマリア様のように見えた。

(1) 言葉はなくても

学校はもうすぐ冬休みに入るため、今週から授業は半日で終わることになっている。

受験生達にとっては最後の追い込み時期で、俺も午後からは予備校に通ったり、家で勉強したりと忙しい。

それでもどうにか時間を作って、チカと会うようにしていた。

彼女は“私と会うよりも勉強に時間を使ったら？”と言うが、俺からすれば、チカと会って元気をもらって、そして勉強に集中したほうが効率いい。

実際、チカと付き合うようになってから俺の成績は落ちるところか上昇中。

今日も学校帰りに2人でファミレスに寄った。

昼ご飯を食べながら楽しくおしゃべりしていると、あつという間にテーブルの上にはチカが書いたたくさんのメモが。

なおもおしゃべりと続けていると、話の途中でチカはペンを置き、手を握ったり開いたりし始めた。

「もしかして、疲れた？」

俺が訊くと、チカはえへっと笑ってうなずいた。

手の具合を見ながら、ゆっくりとペンを動かす。

“アキ君といるのが楽しくていっぱい書いたから、少し手首が痛いかな”

俺は口で話せばすむけど、チ力は俺に対する返事や質問をいちいちメモに書いているのだ。

2人の話が盛り上がるほど、その分チ力に負担がかかってしまう。

「ごめん。俺が調子に乗ってしゃべりすぎたから」

うつん、と首を横に振るチ力。でも、まだ手首のマッサージを続けている。

そんな彼女を見て、何かいい方法はないかと首をひねる。

「……そうだ、チ力。手話って出来る？」

突然そんなことを言い出した俺を、彼女がきょとした目で見える。

そしてゆっくりとうなずいた。

「だったら、手話で話せばいいよ。そうすれば会話を書き出さなくてもいいんだしさ」

それなら特別な道具が必要なわけでもないし、彼女の手も痛くならない。

真面目な顔でそう告げると、チ力は数回瞬きしたあと、プツと吹き出した。

——なんで笑うんだ？

今度は俺がきよんとする。

チカはクスツと笑いながら、メモにペンを走らせた。

“私が手話で話しても、聞き手の人が手話を理解できなかったら会話にならないんだよ。

アキ君、手話を読み取れるの？”

「……あ」

チカが笑った理由が分かった。

——そうだなあ。いくらチカが手話を使っても、俺が彼女の手話を理解できなかったら意味ないじゃん。

「残念。いいアイディアだと思ったんだけどなあ」

がつくりとうなだれて、ソファーにもたれかかる。

“アキ君はすごく勉強できるのに、こういうところはちょっとヌケてるよね”

くすくすと笑い続けるチカ。

「そうだな。俺って、けっこう間抜けなんだな」
俺も苦笑い。

“でも、私のことを心配してくれる優しいアキ君が好きだよ”

そう書いたメモをスツと俺の前に滑らせてくる。

視線を上げて彼女を見ると、チ力はゆっくりと唇を動かして何かを言った。

もちろん声なんて出てなかったけれど、口の形で伝わってくる。

“ダ・イ・ス・キ”

チ力は確かにそう言った。

「今、 “大好き” って言った？ 言ったよな!？」

思わず大きな声を出して立ち上がった。

そんな俺にチ力はギョツとして、慌てて立てた人差し指を唇に当てる。

“ シーッ！ シーッ！ ”

周りを見れば、他の席のお客さんが『何事か?』という目をしていた。

「い、ごめん。嬉しくって、つい……」

肩をすぼめてシュンとなると、チ力がしょうがないなあって顔で笑う。

俺は頭をかいて、また『ごめん』と言った。

「あのさ、今みたいにすればチカの手は痛くならないし。俺が手話を知らなくても、問題ないよな？」

長時間のおしゃべりでも、チカに負担をかけないですむ。

だけど、チカは申し訳なさそうに視線を落としてペンを動かした。

“そうだけど。読唇術って読み取る人が大変なんだよ？今みたいに短い言葉なら分かってても、会話並の長さになると本当に難しいから私の家族でも、スラスラと会話するまでにはなってないし”

一緒に暮らしている彼女の家族ですら難しいという読唇術。わずか2ヶ月付き合ったくらいの俺には不可能に近いかもしれない。

それでも、やらないうちから諦めるなんてイヤだ。

「俺、頑張るから」

真剣にチカを見つめると、彼女は困ったように眉を寄せた。

ペンをメモに付けたり離したり、なかなか返事を書き出そうとしない。

そんな彼女に、少し強く言う。

「チカとたくさん話がしたいんだ。もっと、いろんなことを、遠慮なく話がしたい」

チカが軽く息を吐いてから、ペンを動かした。

“私も、もっと、もっと、アキ君とお話しがしたい。
大変だろうけど、頑張ってくれる？”

チカは期待と不安の入り混じった瞳で俺を見つめる。

俺は大きく頷いた。

「当たり前だろ。俺はチカの彼氏なんだから、彼女のために頑張るのは当然だよ」

腕を伸ばして、チカの頭をクシャツとなでた。

それからチカの口の動きを覚えるために、時間があれば今まで以上にチカのそばにいる毎日。

おかげで、チカの言いたいことがメモを通さなくてもだいぶ分かるようになった。

時々、読み取れない時はメモに書き出してもらうこともあるが、それでもチカの負担はだいぶ減ったはずだ。

俺がこんな短期間で読唇術を会得しつつあるのは、チカが根気よく俺に付き合ってくれたのも理由の1つだけだ。

俺を見上げる瞳。

優しく笑う口元。

俺に触れる小さな手。

くるくる変わる表情や些細なしぐさが、言葉以上にチカの気持ちを伝えてくる。

自分の想いを相手に届けるために言葉は重要だ。
だけど、言葉はなくても気持ちは伝えられることに気付かされた。

——チカと付き合うようになって、本当に発見の連続だな。

彼女と一緒にいると、いろいろなことが見えてくる。
それはきつと、他の人からすれば当たり前のように見えていたことなのだろう。

しかし、他人に対して心を閉ざしていた俺には見えていなかった。
当然のことが、理解できていなかった。

——でも、今は違う。チカと一緒にいれば俺は、“本来の自分”
として、生きていけるんだ。

(2) 公衆電話：SIDE 晃

今以上に、チカのことを分かってあげたい。
もっと、もっと、誰よりも、チカのことを知っていたい。

それが、俺に出来るチカへの恩返し。

終業式を終え、待ち合わせていたチカと一緒に帰る。

「明日から冬休みかぁ。ついこの前、体育祭が終わったような感じがしていたのに。時間が経つのは早いな」
白い息を漂わせながら、何とはなしに呟く。

“ そうだね。 いよいよ受験も間近だね ”

チカの口元でも、白い息が揺れる。

「 そうなんだよな。 少し気が重いよ 」

年が明ければ、大学受験は目前。

自分の為にも、そして期待してくれている伯父さんや伯母さんの為にも、第一志望には絶対に受かりたいのだ。

もちろん、受かる為に勉強してきたし、先生からも合格圏内のお墨付きをもらっているの、よほどの事が無い限り合格できる自信はある。

とはいえ、実際に試験を受けてみないとなんとも言えない。
俺が苦笑いを浮かべると、チ力は楽しそうに笑う。

“少し？余裕だねえ”

「ん？」

“圭ちゃんは『プレッシャー』に押しつぶされて、生きた心地がしない』って言ってるよ”

「ははっ。小山は結構小心者だからなあ」

“ふふっ、そうかも。でも油断はダメだよ、アキ君”

「分かってるって」

お互い目を見合わせて、小さく笑う。

こんな風に、一文がそれほど長くなければメモを使わなくても会話できるようになっていた。

これまでよりもお互いたくさん話すようになって、チ力は俺との付き合いにだいぶん慣れてきたらしい。

口調も仕草も、付き合い始めた頃よりずっと親しげだ。

それでも、少し遠慮がちになることがある。

「毎日しっかり勉強するよ。だけど、何かあったらすぐに連絡してあつ、何もなくてもメールしていいから。分かった？」

俺は真面目な顔で念を押す。

こうでも言わないと、チ力は俺に気を遣ってしまうのだ。

“分かった。アキ君が手の空いたところに必ずメールを送るね。夜10時くらい?”

「そうだな、いつもそのくらいには勉強が一段楽するから。チ力のメール、楽しみに待ってる」

じゃあね、と手を振り合って、チ力と別れた。

「ただいま」

家に入ると、そこかしこがクリスマスのディスプレイに彩られている。

伯母さんがお手伝いの人たちと一緒に飾り付けたのだろう。

「あら、晃君。お帰りなさい」

リースや星型のオーナメントを持った伯母さんがリビングから顔をのぞかせた。

手にしている飾りの量の多さにちよつと驚く。

「もしかして、家中を飾るつもり?」

「当然よ。どうせなら徹底的にやらないと、盛り上がらないじゃない。晃君も手伝って」

年甲斐もなく、俺よりもはしゃいでいる伯母さんに思わず笑ってしまう。

「じゃ、何をすればいい?」

後についてリビングに入ると、窓際に俺の背よりもはるかに高い

大きなもみの木があった。

「このツリーが重要なのよねえ」

2人であれこれ相談しながら、次々とオーナメントを付けてゆく。

並んで作業をしながら、伯母さんが何気ない調子で話しかけてきた。

「ねえ、晃君。クリスマスに彼女を連れてきなさいよ」

「えっ？」

思わず俺の手が止まる。

——チ力を家に？そりゃあ、いつかは紹介するつもりだけど、まだ付き合って2ヶ月くらいだし、家に連れてくるのは早くないか？

返事に困っていると、伯母さんはニコニコと話を進めていく。

「その頃においしいチキンが届くから。その子、鶏肉は嫌い？」

「好きだと思うよ。よくカラアゲとか食べてるし」

「ならよかった。絶対に連れてきてね。私も順二さんも楽しみにしてるんだから」

につこりと微笑まれてしまった。

「あー……」

——どうしよう。家に連れてきて紹介ってなると、照れくさいんだけど。

だが、伯父さんもすごく楽しみにしているみたいだし、指輪のことで伯母さんに助けてもらったから、むげに断ることが出来ない。

「分かった。後で彼女の都合を聞いてみるよ」

「よろしくね。うふふっ、今年のクリスマスは張り切っちゃおっと」

伯母さんはウキウキと飾り付けを再開した。

部屋で制服から着替えて、机に向かった。

夕飯までに少し時間があるから、英単語でも復習しておくことにする。

テキストを開いたところで、机の端に置いていた携帯電話が鳴った。

このメロディは登録されていない番号での着信。

「誰だ？」

携帯を開いてみると、画面には“公衆電話”の文字。

友達も知り合いも携帯電話を持っているので、公衆電話からかけてくるような人物に心当たりは無い。

「いたずらか？」

閉じてしまおうと思ったが、なんとなく胸騒ぎがして電話に出ることにした。

「もしもし？」

相手の様子を伺うものの、返事がない。

そのまましばらく待ってみても、一向に話し声は聞こえてこなかった。

——やっぱりいたずらか……。

電話を切ろうとしたその時、物音がした。

カッン、カッン。

相手が持つ受話器の口話部分に、硬い何かが当たっている。

「あの、どちら様ですか？」

話しかけても聞こえてくるのは物音だけ。

——なんだ、この音？

「もしもし、用件は何ですか？」

尋ねても相手は一切何も言わず、“カッン、カッン”と物音だけが続いている。

——まったく、なんなんだ！？少しはしゃべれよ！

文句の一つも怒鳴りつけようとして、ハッとなった。

——もしかして、相手は声が出せない？それなら、この電話をかけてきたのは……？

「……チ力？」

恐る恐る呼びかける。

カッンッ！カッンッ！

すると、これまで聞こえていた音がいつそう大きくなった。

—— やっぱりそうか！でも、何で公衆電話から？いつもはメールなのに？

理由はどうあれ、こうやって公衆電話を使っても連絡してきたということは緊急事態なのだろう。

「チカ、チカ！何があった？今、どこだ？」

そう言った自分の言葉に愕然とする。

電話の主がチカだと分かってても、何も言えない彼女では居場所を伝えることが出来ないのだ。

—— ああつ、くそつ！

イライラと部屋の中を歩き回る。

—— 何か手がかりはないのか！？

俺は必死で耳を澄ませた。

風に吹かれて揺れる木の葉の音がかすかに聞こえてくる。

彼女がいるところは木が多いらしい。

だが、それだけでは居場所を確定できない。

—— 公衆電話があつて、木がたくさん生えているところは……。

俺が知る限り、そういう場所は5ヶ所。

—— 仕方ない、1ヶ所ずつ当たるか。

かなり大変だろうけれど、方法はそれしかない。

「チカ、必ず行くから。そこから動かずに待ってるんだぞ！」

電話の向こうにいる彼女に呼びかけると、また物音が聞こえた。さつきとは違う、少し重い音。

ゴツッ、ゴツッ。

——この音は？

さつきよりもかなり硬いものが口話部分にぶつかっている。まるで金属のような、硬い音。

——金属？！

「手に持ってるのは指輪か？そうだったら1回、違ったら2回叩け」

ゴツッ。

返ってきたのは1回。

それなら、チカが今いるのは……。

「公園にいるのか？指輪を渡したあの公園なんだな？」

再びゴツッと鈍い音が1回。

「分かった。そこに行くからっ！」

俺は携帯電話と上着を手に、部屋を飛び出す。

階段を滑るように駆け降りると、足音に驚いた伯母さんが慌ててやってきた。

「どこに行くの？もうすぐご飯ができるわよ」

「俺の彼女がなんだかすごく困っているみたいなんだ。だから俺、行かなくちゃ！」

「ちょ、ちよつと晃君？！」

伯母さんの制止を振り切り、俺はあの公園を目指して駆け出した。

(3) 公衆電話：SIDE チ力<1>

「おしょう油が足りなくなっちゃったの。買ってきてくれる?」

リビングでテレビを見ていると、台所からお母さんが来てそう言った。

私はうなずいて、テレビを消す。

「お願いね」

お母さんからお金を受け取って、コートとマフラー、携帯電話を持って家を出た。

歩いて5分くらいの距離にある近所のスーパーでおしょう油を買って、家へと急ぐ。

——今夜のおかずは何かなあ。

小走りで角を曲がると、その先に大きな野良犬がいることに気がついた。

私は幼稚園の頃に近所の犬に噛み付かれて以来、犬がすごく苦手なのだ。

本当に小さな仔犬であれば、ちよつとだけ触ることが出来る。

だけど、大きな犬はたとえ良く慣らされた飼い犬でも、怖くて怖くて近づけない。

それが、大きな野良犬となれば、私にはどうすることも出来なかった。

道をふさぐ形で、野良犬は私を睨んでいる。

あいにく私の前にも後ろにも誰一人いなくて、助けてもらえない。

——どうしよう。

犬はお腹が空いているのか、おしょう油の入った袋をじっと見ている。

そして低いうなり声を出して、少しずつ私の方に近づいてきた。

——どうしよう、どうしようっ。

泣きたくなつて、おしょう油をぎゅっと抱きしめる。

すると、野良犬がこちらに向かって走り出した。

——い、いやあ!!

私はくるりと向きを変え、来た道を駆け出す。

——やだっ、来ないで!

必死で逃げるほど、野良犬も追いかけてくる。

私は転ばないようにするのが精一杯で、どこをどう走ったのかわからない。

気がつけば公園に来ていた。

学校帰り、アキ君とよく立ち寄る公園だ。

——確か、電話ボックスがあつたよね。あそこに逃げ込めば大丈

夫かもつ。

薄暗い公園を走って、目指す電話ボックスにたどり着く。
中に入って、急いで扉を閉めた。

下に隙間はあるけれど、さすがにそこからは入れない。
野良犬は悔しそうに低いうなり声を上げ、ボックスの周りをぐるぐる歩いていた。

—— はあ、怖かったあ。

ホッと息をつく。

—— しばらくすれば、あきらめてここからいなくなるかな？それ
までおとなしく待ってよっと。

ところが、私の予想に反して野良犬はちつとも向こうに行ってく
れない。

—— 困ったなあ。お母さん、心配してるよね。

迎えに来てもらおうと思って、私はコートのポケットから携帯電
話を取り出す。

2つ折の携帯を開くが、画面は暗いまま。

—— あ、そうだ。さっき充電しようとして、忘れちゃったんだ。
これじゃ、お母さんにメールできないよ。

すぐ目の前に公衆電話があるが、私には意味がない。

——どうしよう……。

野良犬はまだそこにいる。

時間はどんどん過ぎていって、辺りはだいぶ暗くなってきた。

迷った拳句、私はお財布から小銭を取り出す。

——お母さんなら分かってくれるかもしれない。

かすかな期待を胸に、私は家に電話をかけた。
数回のコール音の後、つながる電話。

『はい、大野です』

——お母さん！

私は受話器を握り締め、出せない声で大きく叫ぶ。

『もしもし？どちら様でしょうか？』

なかなか私だとは分かってもらえない。

——お母さん、お母さん！

心の中で何度も叫ぶ。

ところがプツツと音がして、切れてしまった。

——分かってもらえなかった……。

私はがっくりと肩を落とす。

——ずっとこのままなのかなあ。

ジワツと涙が浮かぶ。

怖いし、寒いし、お腹空いたし、どうしたらいいのかわからない。

——誰か助けて。誰か、誰か……。

ここでアキ君の顔が浮かんた。

——彼なら分かってくれるかも！

覚えていた彼の携帯電話の番号を押す。

でも、途中で手を止めた。

時間は7時少し前で、もしかしたら勉強している最中かもしれない。
い。

——受験勉強の邪魔は出来ないよ。

静かに受話器をフックに戻し、思い直して、もう一度家に電話をかける。

結果は、さっきと同じだった。

ボックスの外では私に向かって野良犬がけたたましく吠えていて、心細さが増してゆく。

——困ったよお。

鼻の奥がツンと痛くなって、涙がジワツと浮かんだ。

(4) 公衆電話：SIDE チ力<2>

MIXI8 - 4 公衆電話：SIDE チ力(2)

電話ボックスに駆け込んでから随分と時間が経っているにもかかわらず、いまだに野良犬は近くでウロウロしていた。

外灯があるので真っ暗ではないが、寒さだけはどうにもならない。

私は冷たくなった指先に息を吐きかける。

そして、迷いに迷って受話器に手を伸ばした。

アキ君の邪魔になるようなことはしたくない。ただでさえ、いつも彼に迷惑をかけている私だから。

だけど、私を助けてくれそうな人は彼しか思い当たらない。

今の私は、アキ君の『何かあったら、遠慮なく連絡して』という言葉にすぎるしかなかった。

——後でいっぱい謝るから。アキ君、助けて……。

私は彼の携帯電話の番号を押す。

——公衆電話からなんて、絶対変に思うよね？出てくれなかったらどうしよう。

耳に当てている部分から、呼び出しのコール音が聞こえてきた。3回、4回と鳴り響くが、まだ彼には繋がらない。

——アキ君、出てっ！

全速力で走った時と同じくらい、心臓がドキドキと早くなる。
心の中で何度も彼の名前を祈るように繰り返し、かなりの時間呼び出し音を耳にした後、聞き慣れた彼の声が届いた。

『もしもし？』

——よかった、出てくれた！

しかし、私は何も話せない。

このままでは、お母さんのように電話を切られてしまう。

——そうだ、何か音を出せばいいんだ！

とは思ったものの、すぐに家に帰るつもりだったために、今持っているのはお財布と繋がらない携帯電話。
音が出せそうな道具などはない。

——どうしよう。

震える手で受話器を握り締める。そして、目に入っただのは震えている自分の手。

——あつ。

私は急いで口話部分を指先でたたく。

爪が当たって、カッン、カッン、と無機質な音が電話ボックスに響いた。

冬の空気に冷え切った指先は当たるたびに痛いけれど、それしか

方法がない。

我慢して、何度も繰り返していると、再び彼の声が聞こえた。

『あの、どちら様ですか？』

切られなかったがこちらをうかがう声には不審さがありありと表れていて、何も伝わっていない状況は変わらない。

『もしもし？用件は何ですか？』

どんどん不機嫌になっていくアキ君。

——アキ君、分かって！

電話の向こうの彼に向かって、声なき声で叫んだ。

少しの間、沈黙が流れる。

そして、

『……チカ？』

半信半疑で彼が尋ねてきた。

——分かってくれた！

カツン、カツンッ！！

私はさっきよりも強く爪で叩く。

『チカ、チカ！何があった？今、どこだ？』

焦ったような彼の声。

——あ……。

電話をかけてきたのが私だと伝わったまではよかったが、場所を知らせるのは不可能だ。

——どうすればこの場所を伝えられるの？

ボックスの外では風が吹いていて、木が揺れている。その音はきつとアキ君に届いているだろう。
——ただ、それだけでは公園だということに気付いてもらえそうにない。

——アキ君……。

溢れる涙を左手でぬぐう。

その時、私の顔に硬いものが当たった。
この公園で彼からプレゼントされた指輪だ。

——そうだ、これを使えば……！

急いで指輪を外し、指先で持って口話部分に打ち付けた。
ゴツッ、ゴツッと鈍い音がする。

——私はここだよ。アキ君が誕生日に指輪をくれた公園にいるよ！

必死に祈る。

——お願い、分かって！

黙りこんでしまった彼に向けて、何度も指輪をぶつけた。

アキ君は私が伝えようとしていることは何なのか、この音から必死に掴み取るうとしてくれている。

『どこだ？どこだ……？』

アキ君の独り言が漏れ聞こえてきた。

文字も言葉もないこの状況から、私のために必死で頭を巡らせてくれている。

彼の一生懸命さが嬉しくて、涙がにじんできた。

でも、ここで泣いたらアキ君にもっと心配をかけてしまうから、私はぐっと我慢して、ただ、指輪を打ち付け続けた。

『……指輪の音？公園にいるのか？指輪を渡したあの公園なんだな！』

アキ君が音の正体に気付いてくれた。

——そうだよ！

指輪を一度だけ打ち付けた。

『分かった。そこに行くからっ！』

彼の想いと私の願いが通じて、ようやく居場所を分かってもらえた。

私は受話器を元のフックにゆっくりとかける。

——よかった。アキ君、分かってくれた。

嬉しくて、ホッとして、ヘナヘナとその場に座り込んでしまった。

しばらくして、公園内の歩道の向こうから走ってくる足音が聞こえてくる。うずくまっていた姿勢から顔を上げると、アキ君が呼んだ。

「チカツ！」

私は立ち上がって、電話ボックスの扉をドンドンと叩く。

アキ君はそこにいた野良犬を追い払って、扉をガバツと引いた。

——アキ君！

私が抱きつくと、それ以上の力で抱きしめられる。

「よかった、無事で……」

アキ君が大きなため息と一緒に言った。

“心配かけてごめんね。来てくれてありがとうね”

何度も『ごめんね』と『ありがとう』を繰り返す。

“ホントに、ホントに、ありがとうね”

アキ君の顔を見たら気が緩んで、涙がドンドン出てくる。

「そんなに泣いたら、目が真つ赤になって家の人^が驚くよ」
私のほっぺを指でぬぐいながら、彼^が笑った。

(5) 足し算：SIDE チ力

アキ君がおしょう油を持ってきて、空いた手を私とつなぐ。
二人並んで歩き出した。

「さっきは本当に驚いたよ。公衆電話からなんて、初めてかかってきたし。何でメールにしなかったんだ？」

“あ、あの、充電が切れてたのを忘れてて……”

私はしょんぼりうつむく。

「俺もよくやるよ、ソレ」

だから気にするな、と笑いかけてくれる。

「で、なんでわざわざ離れたところにある公園の電話ボックスに？
公衆電話なら他にもあるだろ」

“野良犬に追いかけてられて、逃げてるうちにいつの間にか公園に来てて。逃げる場所がなくなつて、それであの中に入ってたの”

「へえ。犬、苦手？」

私は大きくうなずく。

追いかけられた時のことを思い出して、ブルツと震えた。
するとアキ君が、つないでいた手にキュツと力を入れる。

「俺がいるんだから、もう怖くないだろ？」

彼の手のぬくもりと、優しい笑顔に、大きく、大きくうなずいた。

“それにしても、よく私からの電話だって分かったね？おまけにいる場所まで”

「チ力のことで俺が分からないはずないよ」
ちよつと得意気にアキ君は言う。

“なんで？お母さんでも分かってくれなかったんだよ？”

「なんでって言われても……。そうだなあ、チ力のことを誰よりも分かつとして、一生懸命だからかなあ」

“そうなの？でも、それってアキ君の負担になってない？”

私は彼に負い目がある——障害者だから。
たかが野良犬1匹追い払うことが出来ない。まともに電話をかけることも出来ない。

誰もが当たり前に出ることを、私には出来ない。

私といて、彼は疲れたりしないのだろうか。『イヤだ』と思うことは無いのだろうか。

私の口からため息がこぼれる。

そんな私に、アキ君はニコツと笑った。
「負担だなんて、感じたことないよ」

“本当に……？”

「うん。自分の意思でやってることだし。むしろチ力のことが分かってくたびに、達成感があって楽しい」

優しい笑顔を向けてくれるけど、私は申し訳ない気持ちでいっぱ

いになる。

“私がこんなだから、これから先もアキ君にたくさん迷惑をかけることになっちゃうよ……”

せつかく彼が拭いてくれたのに、涙でほっぺがまた濡れる。
思わず立ち止まってしまった。

「チ力？」

急に動かなくなった私にびっくりして、アキ君が名前を呼ぶ。

“ごめんね。ごめんね。アキ君の彼女が私じゃなくて、何の障害もない人だったら苦労や心配をかけないですむのに”

ポロポロと涙がこぼれる。

するとアキ君が私の正面に立った。

「あのさ、世の中には完璧な人っていないと思う。誰だって足りない何かを持ってるんだよ」

私はしゃくりあげながら、黙って彼の話に耳を傾ける。

「恋人とか夫婦って、足して2になればいいんじゃないかな。1足す1は2だけど、0.5足す1.5も2だよ。」

お互いが相手の足りない部分を補えばいいと思う。俺が言ってること、分かる？」

私は泣きながらうなずく。

「俺はチ力にない声を持っているけど、チ力は俺にない優しさや強さを持つてる。」

俺が1・5の時もあるけど、0・5の時もあるよ。それはチカにも言えることだから」

つないでいた手をグツと引かれ、私はアキ君の胸にコッソンとおでこをつけた。

「2人で頑張る」

彼の声が頭の上から降ってくる。

顔を上げると、そこには真剣な瞳のアキ君がいた。

「チカだけが頑張ってもダメだし、俺だけが頑張ってもダメなんだ。2人で一緒に頑張らないとさ」

彼は私の前を歩くのでもなく。

私の後ろからついてくるのでもなく。

横に並んで進んでいこうと言ってくれている。

——こんなに頼もしい彼氏、他にいないよ。

私は空いている手で涙をグイッとふく。

“うん、頑張るね”

泣いて真っ赤になった目で、精一杯笑った。

(6) 俺の本気<1>

チカの家の前では彼女の母親が立っていた。

「チカツ！」

姿を見かけてこちらに駆け寄ってくる。

「遅いから心配したのよ！……あら？」

娘の隣にいる見慣れない男にお母さんが驚く。

俺はペコリと頭を下げた。

「こんばんは。その、えと……、チカさんと同じ高校の桜井と申します」

「はぁ……」

どうして俺と一緒にいるのか分からず、不思議そうな顔をして見ているお母さん。

「公園で彼女が困った事態になっていたので、駆けつけたんです。すっかり暗くなりましたから、家まで送ろうと」

お母さんはチカを見る。

チカは俺の話通りだという意味で大きくうなずいた。

「それは、わざわざありがとうございました。上がっていきませんか？」

娘を送り届けてくれた俺にお礼のつもりか、お母さんがそう申し出る。

「いえ。送るだけのつもりでしたので」

断ろうとすると、チカが俺の手首をキュッと掴む。

そしてほんのりと顔を赤くして、見上げてきた。

そのしぐさとその視線には、『もう少し一緒にいたい』と言う気持ちが見え隠れしている。

「じゃあ、せつかなのでお邪魔します」
俺が少し笑うと、チカもニコツと笑った。

リビングに通され、チカと横並びでソファーに座る。

お母さんがジュースとクッキーを出してくれた。

俺がジュースを飲んでいる横で、チカはこれまでに起きたことをお母さんに説明している。

「えっ？さっきの電話、チカだったの？」

“そудだよ！お母さんたらぜんぜん分かってくれないんだもん。
だから、悪いと思ったけどアキ君に連絡したの”

「アキ君？」

お母さんが首を傾げる。

「あ、俺のことです。“あきら”なので、そう呼ばれてます」
親しげな呼び方にお母さんは気がついたらしい。

「もしかして、2人は？」

「あっ……、付き合ってます。すいません、報告もしませんで」

——はじめに『彼氏です』って言えばよかったか？

彼氏としての挨拶のタイミングを外し、何だか落ち着かなくなっ
てしまった。

——でもなあ。彼女の親の前になると、妙に緊張しちゃってさあ。
“彼氏”って言い出せなかっただけで、隠しておきたかったわけじ
やないんだ。

居心地の悪さを感じながら頭を下げると、お母さんは小さく笑っている。

「いいのよ、それは。もう、チカったらいつの間にこんな素敵な彼氏をつくったの？」

“ いつの間について言われても…… ”

グラスに刺さったストローを指でいじるチカ。

「桜井さん、ぜんぜん知らなくてごめんなさいね。この子ったら何にも話してくれないんですよ」

少し困ったような笑顔でお母さんが言う。

“ だ、だって……。恥ずかしくって、なんて報告したらいいのか分かんなかったんだもん…… ”

チカは顔を真っ赤にしてジュースを飲む。

一気に飲み干して、少し乱暴にグラスを置くチカ。

“ それより、どうして私からの電話を気付いてくれなかったのっ！
？”

「そんなこと言っても、分からないわよ」

“ アキ君は分かってくれたのに ”

恨めしそうにチカが母親を見る。

「え？あの無言電話を？」

お母さんが驚いたように俺を見た。

チカが生まれてから一緒にいる家族よりも、まだわずかな時間しか一緒にいない俺が気付いたことがなんとなく申し訳なく感じて、慌てて口を挟む。

「い、いえ、そのつ。俺に電話をかけてくる人は限られてますので、それでたまたま。そういう勘はいいほうなので……」

チカからの電話だと気づいたことが出しゃばったみたいで気が引けて、ちよつと言いつめいたことを口にする。

お母さんは嫌な顔はしてないが、不思議そうな表情だ。

「それにしても、よくチカのいる場所まで分かりましたよね？メルじゃなかったんでしょ？」

「あ、はい。俺の携帯に“公衆電話”の表示が出ていたんです。それで、この辺りで電話があるところを探して」

俺があげた指輪のおかげで居場所に気付いた、という話は今は内緒にしておこう。

いろいろ尋ねられると恥ずかしいから。

「そうでしたか。本当にありがとうございました」

お母さんが頭を下げる。

視線を下げたお母さんが、チカの足元に目を向けた。

「あらやだ。チカ、スカートが汚れてるわ」

“あ、本当だ”

見ればスソに少し土がついている。

「すぐに着替えてきなさい」

“はい”

言われて、チカが席を立って出て行った。

彼女がリビングを出てしばらくすると、俺の正面に座っているお母さんの表情が少し険しくなる。

——どうしたんだろう？

じつとテーブルを見つめていたお母さんが顔を上げた。

「娘とはどういうつもりで付き合っているんですか？」

「えっ？」

突然切り出されたセリフに、俺は言葉を失う。

「ごめんなさいね、いきなり。でも、親として知っておきたいの」

俺を見る目が何かを探り出そうとしている。

「いえ、気を悪くしたわけではないので。遠慮なく訊いてください」

「じゃあ、失礼を承知で……」

と言ったものの、お母さんはどう切り出そうか言葉を搜している。

黙ったまま瞬きを繰り返し、ようやく口を開いた。

「チカとは遊びで付き合っているの？」

俺はギョツとした。

まさかそんなことを聞かれるとは思ってなかったから。

「ち、違います！そんなんじゃないありません！」

予想外の言葉に驚いたが、はつきりと否定した。

「でも……」

お母さんは俺の言葉が信じられないようだ。

「自分の娘を悪く言うつもりはないけど、ほら、あの子はしゃべれないでしょ？なのにあなたのような素敵な人が彼氏だって言われても、信じられないのよ」

娘が彼氏を連れてきたことに浮かれるのではなく、現実を考えている。

『チ力が話せない』という現実を見て、物事を冷静に見ている。

チ力が傷つくことのないように、俺の本音を探ろうとしている。

だから俺は正直に話す。

「遊びじゃありません。それと、俺はちっとも素敵じゃないです」

たまたま、ちょっとだけ人より良い外見に生まれただけ。

「そんなことないわ、本当に素敵よ。背も高く、顔立ちも整っていて、マナーもいいし。こんなかつこいい人、女の子が放って置くはずないわよ」

「あ、まあ。騒がれるとはよくあります。……でも、俺はそういう人たちのことを信用していませんでした」

俺はこれまで浮かべていた笑顔をスッと消し、淡々と言った。

(7) 俺の本気<2>

「それは、どういうことかしら？」

俺の表情の変化に、お母さんが少し戸惑った声を出す。

そんなお母さんの目を見て、俺は話を始めた。

「小学生の時につらい事があって……。それ以来、人の言葉を、特に自分に向けられる好意を信じる事が出来なくなってしまったんです」

この世の不幸をすべて背負ったあの日。

今思い出しても、まだ心の奥が冷たくなる。

言葉なんて信じない。

それを心に強く思い、誰にも心を許さなかった。

無気力に、そして人としての温かい心無くして生きていたそんな俺の前に、チカが現れた。

顔を上げて、まっすぐとお母さんを見る。

「だけど、そんな俺をチカさんが変えてくれました」

彼女のしぐさには言葉以上の力があります。それとチカさんの素直で優しい心が、俺に人を信じる気持ちを取り戻させてくれたんです」

俺は再び穏やかに微笑んだ。

「俺はチカさんに救われたんです。こんなに素直で優しく、かわ

いい女の子は他にいません」

前もって考えていた事でもないのに、スラスラと口から出てくる。

それは、俺の正直な気持ちだから。

「そうだったの」

お母さんは半信半疑ながらも、俺の話に納得してくれたみたいだ。

なんでも話を聞いてくれそうなお母さんの雰囲気、俺はつい本音を漏らしてしまった。

「実は、かえって俺のほうが心配してるんです。チ力さんに捨てられやしないかって。いい所といえば顔しかないのです……」

ここでリビングの扉が大きな音を立て、勢いよく開いた。
着替えを済ませたチ力が仁王立ちしていたのだ。

「チ力?!」

驚いたお母さんが声をかけるが、彼女はなぜか俺を睨みつけている。

「どうかしたのか?」

今度は俺が声をかける。

するとツカツカと歩み寄って、座っている俺の肩にしがみついてきた。

“なんでそんなこと言うの!”

彼女は怒りに唇を震わせている。

“アキ君の顔は確にかっこいいけど、でも、顔だけじゃないことを知ってるもん！”

面白くて、優しくて。ホントにホントに、自慢の彼氏なんだよ！私がアキ君から離れるはずないもん！アキ君を捨てるはずないもん！”

一気にまくし立てると、チカはボロボロと泣き始めた。

「チ、チカ！？落ち着いてっ」

俺は彼女をなだめようと、とにかく優しく頭をなでた。

「ごめん、変なこと言っつて。そうだよな、チカは俺の顔だけを見ていたわけじゃないんだよな」

チカはひっく、ひっくと泣きながら言う。

“そうだよっ！アキ君が一生懸命なところも知ってるし、私を大事にしてくれてるところも知ってるんだからっ。

ずっと、ずっと、そばで見えてきたんだからっ！”

——そうだね。ずっと、そばにいたよね。

付き合ってから今日まで、お互いが少しでも分かり合えるようにそばにいた。

俺がチカを見てきたように、チカも俺を見てくれていたんだ。

『桜井 晃』という人間を見てくれていたんだ。

“バカ、バカ。アキ君のバカア。”

今度アキ君が自分のことを悪く言ったら、絶対許してあげないからね！

絶対、絶対、許してあげないんだから！いい？分かった？”

泣きながら怒る彼女の顔はすごく真剣で、俺のことが大好きだと伝わってくる。

チカの気持ち嬉しくって、思わず笑顔になった。

「うん、分かったって。もうこんなこと言わないから、泣き止んで」
彼女は泣いて真っ赤になった瞳でジッと俺を見上げてくる。

“ 本当？ ”

「本当だよ。俺の自慢の彼女は素直なところが取り得だよ。だから、素直に信じて」

チカの頭を軽くポンポンと叩くと、ようやく笑ってくれた。

——ふう、驚いたあ。

前を向けば、俺以上に驚いた顔のお母さん。

「桜井君……」

「なんでしょっ？」

——あ、人前で大騒ぎした俺たちにあきれてるのかな？

と思ったら、どうやら違うようだ。

「チカが何を言ったのか、分かったの？」

——は？そんなことが聞きたかったのか？

てつきり怒られると思った。

普段は俺を気遣ってゆつくり短く唇を動かすのに、さっきのチカは感情が爆発して、まるで俺と同じようなスピードで話していた。しかも、いつもの何倍も長いセリフを。

それでも、俺には分かっていた。

だから大きくうなずく。

「……全部？」

確かめるように訊いてくるお母さん。

「はい、全部分かりました」

それを聞いて、お母さんがまた驚く。目を開いて俺を見た。

俺もチカも、どうしてお母さんがこんなことを訊いてくるのか、どうして会話をすべて読み取った俺に驚いているのか理解できない。

2人で首をかしげる。

いつまで経っても何も言わないお母さん。

俺は心配になって口を開いた。

「あの……。何か悪い事したんでしょうか？」

はっと我に返ったお母さんが、慌てて返事をする。

「あっ、ううん、違うのよ。あなたには全部伝わっていたことに驚

いたの。親の私でも、チカが何を言ったのか分からないところがあったのに……」

フツとお母さんが笑う。チカとよく似た笑顔だ。

「それだけこの子に対して本気なのね？」

じつと俺の目を見てくる。

「はい」

俺はしっかりと見つめ返し、はっきりと返事をする。

「そう」

ようやく落ち着いた表情に戻ったお母さんは、穏やかに目を細めてチカを見る。

「あなたの彼氏は、見た目も中身も最高の人ね」

“もちろん！”

チカの言葉は照れくさかったけど、すごく嬉しかった。

(8) クリスマスの約束<1>

どさくさ紛れな報告だったものの、チカのお母さんは俺たちの付き合いを認めてくれた。

本当はもつときちんとした形で挨拶に来るべきだったかもしれないが、まあ、自然な俺たちを見てもらえて、かえってよかったのかも。

しばらく3人で話し、俺は席を立った。

そろそろ帰らないと、伯母さんが心配してるだろう。

チカが玄関の外まで送ってくれた。

「あ、そうだ。チカ、25日って予定空いてる？」

“空いてるよ。なんで？”

「伯母さんがさ、クリスマス用においしいチキンが届くから、彼女も招待しなさいって」

“……行ってもいいの？”

チカは恥ずかしそうに、おずおずと訊いてくる。

「もちろん。伯父さんも伯母さんも大歓迎してくれるよ。なんたつてチカは俺を変えてくれたんだからな」

“私、何にもしてないよ？”

大きな瞳できょとんと見上げてくるチ力。

「チ力が分かってなくても、俺が変わったのは事実だよ」
首をかしげて、チ力はしきりに瞬きを繰り返す。
そんな彼女の頭を軽くなでる俺。

「25日の夕方に迎えに来るよ。じゃあね」

“うん。じゃあね”

チ力に見送られて、俺は家へと向かった。

25日は良い天気になったけれど、すごく冷え込んだ。

俺は厚地のコートを着て、マフラーもしっかり巻いてチ力を迎えに行く。

家の外で俺を待っていた彼女は俺以上に厚着だった。

真っ白な毛糸の帽子、真っ白なマフラー、コートも、手袋も真っ白。

「なんだかウサギみたいだな」

“そう？”

「小さくて白くて、フワフワしててさ。それにかわいい」

とたんにチ力の顔が赤くなる。

“べ、別にかわいくなんかないよっ”

ワタワタと手を振り回して慌てる様子が、またかわいい。

「俺が“かわいい”って言うてんだから、素直にうなずいておけばいいんだよ」

今度は耳まで赤くした彼女に、俺はクスツと笑った。

こんな楽しい気分でクリスマスを迎えたのは、両親を亡くして以来初めてだ。

チ力をつれてくることになって、伯父さんも伯母さんも相当はしやいでいたが、一番はしゃいでいるのは俺だろう。

いろんな話をしているうちに家に到着。

犬嫌いのチ力のために、庭の犬たちは今だけ小屋にいる。

門の中へ入ったとたん、チ力がそこから動かなくなった。

「どうした？」

振り返ると、ポカンと口を開けているチ力。

——あゝ、家の大きさに驚いているのか。

初めてここを訪れる人は、たいていチ力と同じ反応を示す。

——これじゃ家の中を見たら、もっと驚くかもなあ。

ただでさえ豪華な調度品が置かれているのに、クリスマス仕様ということで、きらびやかにグレードアップしているのだ。

「ここにも寒いだけだよ。ほら、行こう」

強引に手を引いて歩き出した。

玄関の扉を開けたとたん、チカがまたポカンとする。

予想通りの反応に思わず笑みが漏れた。

どんな表情でもチカはかわいい。

無防備に立ち尽くす彼女がかわいくて、抱きしめたくなくなってしまった。

が、そこに伯父さんと伯母さんがやってきたので我慢、我慢。

「いらつしゃい」

やわらかく笑う伯母さん。

「寒い中、よく来てくれたね」

伯父さんも笑顔だ。

ホテルの仕事なんてクリスマスは忙しいはずなのに、『どうにか都合を付けて無理やり抜けてきた』と、伯父さんは言った。それだけ俺の彼女に会うことを楽しみにしていたようだ。

2人の声を聞いて、チカが我に返る。

急いで帽子を取って、ペコリと頭を下げた。

「この子が俺の彼女。大野　チカちゃんだよ」

チカが再び頭を下げる。

姿勢を戻したチカが俺に向かって口を動かす。

「彼女が“今日は招待してくださいって、ありがとございます”って言うてる」

俺とチカのやり取りに、2人の表情がほんの少し曇った。

「晃、チ力さんは風邪でも引いているのか？」

「うっん、元気だけど」

俺は2人が妙な顔つきになった理由に思い当たった。

やたらなことを詮索されないうちに、先に俺から説明をする。

「彼女、話が出来ないんだ。病気が原因で、声帯を取ってしまったから」

伯父さんと伯母さんがハッと息を飲んだのが分かった。

それを見たチ力の体が硬直する。

申し訳なさそうに、彼女は少しうつむいてしまった。

伯父さんと伯母さんは何も言えず、ただチ力を見ている。

沈黙が流れる中、俺は彼女の手をそつと握った。

俯いたままのチ力の肩がビクツと震えて、ゆっくりと俺を見上げる。

——大丈夫だよ。

俺は優しくチ力に微笑みかける。

「チ力に声がなくても、俺達にとっては何の問題もないんだ。2人とも、絶対にチ力のことを気に入るよ。だって、彼女は本当にいい子だから」

俺は自信を持って言った。

「チ力は自慢の彼女なんだから」

俺が堂々と言うと、チ力の顔から寂しそうな表情が消えた。

伯父さんと伯母さんが緊張を解いて、チ力に向き直る。

「その……。チ力ちゃん、ごめんなさいね。少し驚いてしまって」

チカが伯母さんに対して首を横に振る。

そしてにつこりと笑った。

俺がチカの口の動きを読んで、彼女の気持ちを代弁する。

「私はすっごいおしゃべりなんです。もし声が出せたら、うるさくてお2人はびつくりしたと思います。」

だから、かえって話せないほうがいいかもしれませんよ” ってさ」

俺が言い終えると、チカがペロツと舌を出した。

すると伯父さんと伯母さんが笑い出す。

2人に気を遣わせないように、わざとおどけて見せた彼女。本当にチカは強くて、優しい。

——こんなに素敵な女の子、他にはいないよ。

俺も笑った。

チカの存在感がこの場の空気を和やかにしてゆく。

伯父さんも伯母さんも本気で笑っている。

その場を取りつくるう愛想笑いではなかった。

「こんなところにいないで食事にしよう。チカさん、遠慮しないでたくさん食べるんだよ」

「おいしいケーキも用意したのよ。チカちゃん、甘いもの好きよね？」

2人ともすっかりチカを気に入ったようだ。

俺とチカは目を見合わせて、ちよつと笑った。

(9) クリスマスの約束<2>

食事はとても楽しい雰囲気だった。

伯父さんも伯母さんもサービス業に関わる人だから、どんなお客にも対応できるようにと、手話を習得している。
だからチカとの会話も問題なし。

最初は緊張していたチカだったが、時間が経つにつれていつもの元気な彼女になってゆく。

——伯父さん、伯母さん、よく見て。俺を変えてくれたチカは、こんなに素敵な女の子なんだよ。

3人の会話の様子を、俺はそっと見守っていた。

ケーキを食べ終え、俺は自分の部屋にチカを連れて行く。

「適当に座って」

そう言つと、チカは床においてあった大きなクッションに腰を下ろす。

そして小さなため息。

「疲れた？」

“少しね”

チカが苦笑を返してくる。

“だって、アキ君のお家、すごく立派なんだもん。落ち着かないよ”

近くにあった小さめのクッションに手を伸ばし、それをぎゅっと抱きしめるチ力。

“アキ君が別世界の人に見えちゃったよ。お家が大きくて、お金持ちでさ。将来、伯父様の跡を継ぐんでしょ？”

俺はうなずいた。

ずっと前から『うちの養子にならないか』と言われていた。初めてその話を聞かされた時は誰のことも信用していなかったから、いい返事は出来なかった。

だけど、チ力が人を信じる心を俺に取り戻させてくれたから、養子の話を正式に承諾した。

高校を卒業したら、俺は伯父さんと伯母さんの子供になる。

“そつかあ。アキ君は将来、ホテルの社長さんになるんだね。すごいなあ”

チ力が目を伏せる。

“ますます別世界の人になっちゃうんだね……”

ポツリと呟く。

すごく寂しそうに。

すごく悲しそうに。

俺はチカの目の前にヒザをついて、彼女が抱きしめていたクッションを取り上げた。

驚いたチカが顔を上げる。そして、俺の顔を見てもっと驚く。俺が泣きそうになっていたから。

“アキ君？”

心配そうに俺を呼ぶ彼女。

「そんなこと言うなよ……」

俺の視界が少し揺れる。

「そんな寂しいこと、言うなよ……」

チカが俺の前から消えてしまいそうな気がして、どうしようもない不安に襲われる。

「どんなに家が広くても、どんなに金持ちでも、チカがいないと俺は幸せになれないよ」

そっとチカの頬に触れる。

「俺のことが好きなら、そばにいて。俺を不幸にしたくなかったら、離れていかないで」

——ずっと、ずっと、俺と一緒にいて。

じっとチカの瞳を見つめた。

チカが泣きそうに笑う。

“もう……。それって脅迫だよ？”

「分かってる」

俺も笑う。

「でも、脅迫だけじゃチカがかわいそうだから……」
誕生日にあげた指輪の上に、俺は手を重ねた。

「“約束”もあげる。この指をダイヤのついた指輪で飾るから。俺がチカを支えられるくらい立派な大人になったら、絶対に贈るから」

深く息を吸い込んで、言葉を続ける。

「いつか、俺と結婚して」

まだ未熟な俺がチカに囁く、精一杯の約束。

チカは目大きく開いて、信じられないという顔をしている。
そんな彼女の顔を両手で静かに挟んだ。

「絶対だからね。そしてこれは約束のしるし……」

俺はゆっくりと顔を近づけて、チカの唇に自分の唇を重ねた。

(1) 変わらない日々

大学には無事に合格。

そして、この春から伯父さんと伯母さんの子供となった。

まあ、苗字は『桜井』のままだし目立った変化はないが、“家族ができた”という安心感が湧いてくる。

養子になったことで、伯父さん達は本格的に俺を跡継ぎにするつもりだと言った。

それに対し、2人への恩返しの意味も込めて、はつきりと『継ぐ意思はある』と答える俺。

それを聞いて、普段泣いたことのない伯父さんが涙ぐんでいた。よほど俺の返事が嬉しかったのだろう。

少しでもホテル経営のことを覚えたくて、通える範囲にある系列ホテルでバイトを始めた。雑用がほとんどだが、働く社員さんたちの姿を見て、接客業の難しさやりがいを肌で感じる。

毎日休まず大学に通い、そしてバイト。さすがにへとへとだ。

でも、そんな俺を支えてくれているのがチ力の存在。まめにメールをくれて、俺を励ましてくれていた。

そして休みの日は、疲れている俺を気遣ってのんびり過ごす。

俺の部屋で本を読んだり、宿題をしたり。どこかに出掛けなくても、文句の1つも言わない。

「ごめんな、チ力。どこも連れて行ってやれなくて」

慣れないバイトでぐったりしている俺は、自室のソファに身を

投げ出していた。

チカは床で本を読んでいたが、俺の言葉に手を止めてこっちにやってくる。

そして、俺の隣にストン、と腰を下ろした。

“気にしないで。私はアキ君のそばにいただけで楽しいんだから”

につこりと笑うチカ。

その笑顔に癒される俺。

「そのかわり、夏休みにはたくさん遊ぼう」

“楽しみにしてるね”

「おう、期待しとけ」

俺はチカの頭をそつとなでる。

「髪、ずいぶん伸びたな」

ショートカットだったチカの髪が、半年経った今では肩に触れていた。

「どうして伸ばしてるんだ？短いのも似合ってたのに」

“長い髪のほうが大人っぽく見えると思って。

アキ君はますます素敵な男の人になってるから、少しでも釣り合うように”

チカが照れたように笑いながら言う。

「そんなことしなくたって、チカは十分俺に相応しいよ」

つややかな黒髪をなでてやると、彼女は少し首をかしげて俺を見る。

“本当にそう思ってる？”

「思ってる」

“本当に、本当？”

しつこく確かめるチ力。

「本当だよ。俺の言葉を信用しないのか？」

“え、だって……”

チ力は自信なさ気に少し目を伏せた。

年齢よりも少し幼く見える自分の外見を、彼女自身は好きではないという。

実年齢よりも大人びている俺と付き合うようになってからは、ますますその思いが強くなったらしい。

だが、俺はそういうチ力の外見も含めて好きになったのだ。

無駄に化粧したり、髪をいじったりして、ムリに背伸びする女性
は俺的に好みではない。

自然のまま、ありのままのチ力が好きなのだから。

暗い表情で俯く彼女に腕を伸ばす。

「そういう疑り深い奴は……」

頭から肩へと手を滑らせ、グッと抱き寄せた。

あっという間に俺の腕の中に閉じ込められた彼女。

「ギューツてしてやる!!」

チ力が痛くない程度の力で抱きしめてやった。

恥ずかしくて、手をバタバタと振り回して暴れる彼女。

「信用する?」

ちよつと意地悪い表情で覗き込むと、赤い顔のチ力がなんども頷く。

「よし。分かればいいんだよ」

クスツと笑って、力を抜いた。

でも、チ力はまだ俺の腕の中。

2人寄り添って、お互いの体温を感じる。

俺の隣にチ力がいて、チ力の隣に俺がいる。

そんな日々がずっと続いてゆく。

本気でそう信じていた。

大学卒業後、俺は本社ホテルに就職した。

といっても、まだまだ社長業なんて到底無理な話で、今はフロント係としての仕事をこなしている。

まずはホテルマンとして一人前にならなければ、ホテルのオーナーなんてなれない。

時々伯父さんや、稀に伯父さんの代行として出向く伯母さんの秘書として同行したり、家に帰ってから2人から経営のノウハウを教わったり、心身ともに忙しい日々だ。

学生の頃よりも格段に自由になる時間は減ったが、チ力とは相変わらず仲良く付き合っている。

そのチ力は高校卒業した後、知り合いのツテで、ある絵本作家のアシスタントを始めた。

夢に向かって進んでいる彼女を見て、俺も負けてれられない。

伯父さんと伯母さんに認めてもらえるように、もっともっと頑張らないと。

(2) 心の温度

俺が社会人になってから、チ力は前よりもメールを送ってくるようになった。

そして、会った時にはこれまでに以上に気持ちを伝えてくる。

大学生の時より色々な人と接する機会が多くなった俺を見て、心配になったのだという。

“好きって言いたいの、大好きって伝えたいのに、私には声がないから。”

アキ君、他の人のところに行っちゃうかもしれない……”

そんな時は優しくチ力を抱きしめる。

「言葉なんて必要ない。チ力の気持ちはしっかり伝わってるよ」

そう言いながらも、最近胸の奥のほうがちクちクと痛い。

病気ではなく精神的なものだとは思うが、痛みの原因は分からない。

俺とチ力はいつでも仲がいいし、いつだってお互いが深い信頼関係で結ばれている。

——気のせいかな。

俺は大して気にも留めず、毎日を過ごしていた。

昼休みに入って真つ先にする。それはメールのチェック。
チ力からいつも何かしらのメッセージが送られてきているのだ。

「今日はなんて書いてあるかなあ」
ウキウキと携帯を開く。

『新しい靴を買ったよ。今度、この靴でデートしたいな』

写真付きのメールが届いていた。

早速返信。

【チ力に似合いそうだね。休みの日は水族館でも行こうか？】

「送信つと」

そこに携帯で話をしながら、先輩が休憩室に入ってきた。

「仕事が終わったら電話する。ん、じゃあな」
嬉しそうな声。

「お疲れ様です。ずいぶん楽しそうでしたが、電話のお相手は彼女さんですか？」

「ああ、まあな。そういうお前だって毎日ニコニコしてメール送ってるじゃないか」
「え、あ、はい」

自分はそんなに顔に出ているだろうか。ちよつと照れくさくなる。

この日はこんな軽いやり取りで、先輩との話を終えた。

今週はこの先輩と昼食の時間が重なるらしく、休憩室でよく顔を合わせる。

先輩は12時30分になると携帯を見つめて、落ち着きがない。どうやら彼女さんから掛かってくる時間が決まっているようだ。

今日も嬉しそうに話を終えた先輩。『お疲れ様です』、と改めて声をかけると、こちらにやってきた。

「電話が掛かってくるのをソワソワ待つなんて、先輩は見かけによらず可愛いところありますね」

大学ではラグビー部の主将だったという猛々しい経歴を持つ3つ年上の先輩に、俺はクスクスと笑いながら話しかける。

すると先輩はうつすらと顔を赤らめながらも、堂々と胸を張った。「うるさい、何とでも言え。恋人の声が耳元で聞けるんだ。こんな幸せな事は他にそうそうないぞ」

満面の笑みを浮かべる先輩。

「……え？」

反対にこわばる俺。

これまで他の恋人たちをうらやましいと感じたことはなかった。俺とチ力には、俺たちなりの付き合い方があると思っていたから。

今も、昔もチ力に不満なんてない。

俺の彼女がチ力でよかったと思ってる。

ただ。

その先輩がものすごく嬉しそうに、幸せそうに笑うから。

彼女さんのやり取りがうらやましいと思ってしまった。

胸の奥のチクツという痛みが、大きくズクンとうずく。

それ以来、どことなくぎこちない空気が俺を包んだ。

2人の休みの日、約束どおり水族館へ出かけた。

新しい靴ではしゃぐチ力。

いつもなら彼女と同じくらいはしゃぐ俺なのに、なんだか気分が乗らない。

“アキ君。どうかした？”

心配そうな瞳で、チ力が下から俺をのぞき込んでいる。

「ん？なんでもないけど」

俺は彼女に微笑みかける。

“それならいいんだけどね”

俺はチ力の唇を見つめる。

これまでも、これから、声をつむがない彼女。

そんなことは分かっている。

分かっている。

だけど……。

自分でも気が付かないうちに、心の温度が少し下がった。

(3) 心の痛み

水族館でデートして以来、お互いの時間の都合が合わずなかなか一緒にいられることがなかったが、ようやくチカと休みが合った。今日は俺の誕生日で、チカとデートの最中。

胸の痛みの原因はまだ分からないが、チカのことはやっぱり好きで、気持ちは変わらない。

——仕事で疲れているから、余計なことを考えてしまうのかもしれない。

その時の俺はそう思っていた。

食事の後に夜景を見て、少しのんびりしてから彼女を家へと送る。

“今日はアキ君の誕生日なのに、私のほうが楽しんでいたかも”

「いいんだよ。チカの笑顔が最高のプレゼントだから」

“もう。ホテルで働くようになってから、口がうまくなったよねえ”

「そんなことないって」

チカの家玄関先に車を停め、降りたところでいつものように少し立ち話。

そこに隣の家から人が出てきた。

「あれ、チカちゃん？」

俺より5歳は年上だろうか。落ち着いた雰囲気のある男の人が彼女を呼んだ。

チカはその人をじっと見つめて、首をかしげている。

——やけに親しげに名前を呼ぶんだな。

俺は少しだけ警戒して、そっとチカの横に立った。

その人は少し困ったように笑って、頭をかく。

「もしかして忘れられちゃった？俺、徹だよ。山下 徹。留学先から帰ってきたんだ」

その人が名前を告げると、チカの顔がパツと明るくなった。

“ほんとにトオルお兄ちゃんなの！？うわぁ、久しぶりすぎて、誰だか分からなかったよ”

チカが唇の動きと手話で話しかける。

「ははっ、8年ぶりだしな。それにしてもチカちゃん、ずいぶん大人っぽくなったなあ」

徹と名乗った男性は、嬉しそうにしげしげとチカを眺めている。

“私、そんなに変わった？”

「うん、綺麗になった。えと……」

徹さんが俺に視線を向けた。

「桜井 晃と申します」

俺は名前を告げ、軽く頭を下げた。

「彼氏かな？」

徹さんがチ力に問いかけると、彼女は真っ赤になりながらも頷く。

「そつかあ。チ力ちゃんもこんな素敵な人とお付き合いするようになったのか。昔は俺の後を離れないチビツ子だったのになあ」

しみじみ話す徹さんにチ力は苦笑い。

“そうだったっけ？”

「何だ、忘れたのか？チ力ちゃん、そういえばこんなことも言ってたぞ。“トオルお兄ちゃん大好き。大きくなったら、お兄ちゃんと結婚する”ってね」

ニヤニヤとからかうように笑う徹さん。

でも、瞳はぜんぜん意地悪ではない。優しく温かい瞳。

純粹に昔を懐かしんでいるだけなのだろう。

だが、彼の言葉に俺の心がザワリと波立つ。

“エー！ぜんぜん覚えてないよお”

チ力は一生懸命思い出そうとしているけど、無理なようだ。

“それ、嘘じゃないの？”

「確かに言っただよ。ま、チカちゃんが小学校低学年の時だけだね」

“なんだ。そんな昔のことかあ。よく覚えてるねえ”

チカと徹さんが盛り上がっている中、俺はその様子を少し離れたところで見ていた。

——小学校つてことは、まだチカが話せていた頃だよな。

チカはどんな声で『大好き』と言っただろう。

俺はチカの彼女なのに、彼女の声で『大好き』と言われたことがない。

そんなことを今さら言っただころでどうしようもないって、頭では理解していた。

だけど……。

チカが俺以外の男に、声を出して『好き』と言っただことがショックだった。

俺が聞いたことのない、チカの声。

なのに、目の前で昔話に花を咲かせているこの男は、聞いているのだ。

しかも、『大好き』と言うセリフまで。

忘れていた胸の痛みが、ズクンと強く疼きはじめた。

(4) 嫉妬

“ごめんね。アキ君抜きで盛り上がっちゃって”

チ力が駆け寄ってきた。

俺がぼんやりしている間に、徹さんは行ってしまった様だ。

「……あの人と、ずいぶん仲がいいんだな」

うらやましいというものとはなんだか違う感情が渦巻いて、表情が硬い俺。

“トオルお兄ちゃんとはよく遊んでくれた人なんだ。留学して以来ずっと会ってなかったから、つい話し込んで……”

不安の色を浮かべて、チ力が俺を見上げる。

“放っておいたから、怒っちゃった?”

「いや、怒ってないよ」

怒りとも違う。

モヤモヤとしたつかみ所のない感情が、胸に広がってゆく。

“でも、アキ君怖い顔してる”

「そう?」

俺はチ力に微笑んだ。

だけど、自分でも分かるほどその笑顔はぎこちない。

“お出かけして疲れた？早く家で休んだほうがいいよね。明日も仕事でしょ？”

「ああ」

“もっと一緒にいたいけど、ここでバイバイだね。おやすみ、アキ君”

「おやすみ」

手を振る俺にチカは笑顔で“大好きだよ”と言った。
唇だけで。

それを見た瞬間、俺はチカの肩をグツとつかんだ。
驚いて目を開く彼女。

“アキ君！？”

「……どうして？」

“え？”

「どうして言ってくれないんだ？」

“何のこと？”

戸惑うチカが、オロオロと俺を見上げている。

「どうして、俺には声に出して“好き”って言ってくれないんだっ
！」

肩をつかむ俺の手に力が入る。
痛みで顔をしかめるチカ。

“ア、アキ君痛いよっ”

俺から逃げようとするチカを力で押さえつけた。

「どうして……？ どうして……！？」

無茶なことを言っている自覚はある。
だけど、すごく悔しくて、悔しくて。

俺はさっきの男に嫉妬していた。

俺の知らないチカの声を知っているあの男に。

いや、さっきだけではない。

彼女からの定期コールを待つ職場の先輩にも嫉妬した。

今思えば、幸せいっぱい顔で恋人の声を聞いていたあの先輩が
妬ましかったのだ。

だから胸の奥が痛かったのだ。

徹さんからチカの昔話を聞いて、これまでに募った胸の痛みが爆
発した。

——ずるい！俺だってチカに『好き』って言ってもらいたい！言
葉で『大好き』って伝えてもらいたい！

掴んだチカの肩が、ギリツと鈍い音を立てる。

チカは眉を寄せて、痛みに耐えながら唇を動かした。

“ごめんね、アキ君……”

『痛い』でも、『怖い』でもなく。

『ごめん』と謝るチカ。

俺はハッとして、手を離した。

「あつ……、俺のほうこそごめんっ」
慌てて一步下がる。

“平気”

チカは首を横に振って、弱々しく微笑む。

「痛かったよな？本当にごめん！」

今度はそつと彼女の肩に触れる。

チカはホウツと息を吐いた。

“それより、どうしたの？”

「……あの人に嫉妬したんだ」

“トオルお兄ちゃんに？”

「ああ。だって、俺が聞いたことのないチカの声を知ってるから、それで……」

とたんにチカが寂しそうな目をする。

それを見て、俺は慌てて首を大きく横に振った。

「でも、もういいんだ。チ力はいつも言葉以上に気持ちを伝えてくれるもんな」

俺がそう言っていると、チ力は複雑な顔をして小さく“ごめんね”と、また言った。

「謝るのはこっちだよ。みっともなく取り乱したりしてさ。こんな俺、嫌いになった？」

チ力の表情を伺うように彼女の顔を覗き込めば、チ力はクスツと笑う。

“そんなはずないでしょ。アキ君のバカ”

目元を薄く染めて、小さなげんこつで俺の胸をトンと叩いた。

「ならよかった。おっと、もうこんな時間か」

腕時計を見ると、既に10時を過ぎている。

「おやすみ、チ力」

“おやすみなさい”

俺たちは笑って手を振り合った。

しかし。

一度気付いてしまった嫉妬心を完全に消せるほど、俺は大人じゃなかった。

(5) 浮気

それからの俺は、チ力を避けるようになった。

はじめは本当に仕事が忙しくて、会う時間が取れなくて。メールだけは交換していたが、そのうち俺からの返信は減っていった。

それでもチ力からのメールは止むことはない。

『お疲れ様。きちんとご飯食べてる?』

『頑張りすぎないで。アキ君はすぐ無理しちゃうんだから』

『今日から天气が崩れるみたい。体調には気をつけてね』

どのメールも俺を気遣う内容で、チ力の優しさが伝わってくる。だけど、チ力からのメールが届けば届くほど、俺の心はどんどん冷たくなっていった。

これまで2日に1度は返していたメールも3日に1度、5日に1度となり。

とうとう1週間を過ぎても、返信することはなくなった。

言葉なんて必要ないと言った俺のほうが、いつの間にか言葉を求めていたのだ。

——なんで『愛してる』って言うてくれないんだ！

無意味な八つ当たりを自分の枕にぶつける。

眠れなくて、流し込むように酒を飲む。

行き場のない怒りとむなしさに襲われて、どうにもならない気持ち
は酒で紛らわせるしかなかった。

こんな毎日でも、仕事だけはきっちりこなしている。

いや、こなしていると言うよりも、仕事をして気を紛わせている
といったほうが正しいかもしれない。

余計なことを考えたくなくて、予約帳に目を通して今後のスケジュール
を確認したり、備品を点検したりと、手を休める暇を与えない。
い。

そんな感じでフロントカウンターに立っていると、マネージャー
が1人の女性を連れてきた。

「桜井君、新人の香取さんだ。彼女の指導係を頼むよ」
その女性が俺の正面に立つ。

「香取 洋子と申します。どうぞよろしくお願いいたします」

俺の2つ下だという香取さんは、ハキハキと挨拶してくれた。

「桜井 晃です。こちらこそよろしく」

手を差し出して、軽く握手を交わす。

愛想笑い程度に微笑みかけると、彼女の顔が少し赤くなった。

「かっこいいですねえ。思わず見とれちゃいましたよ」

香取さんが恥ずかしそうに、でも、俺の耳に届く程度にははつき
りと言う。

「え？あ、どうも……」

俺が戸惑っていると、マネージャーが苦笑交じりに教えてくれた。

「彼女は思ったことを口にしないと気が済まない性格らしいぞ」

「だって、言いたいことはちきんと言葉にしないと、相手に伝わりませんから」

ちよつとすねたように言う彼女の仕草は、幼い少女のようで微笑ましい。

「ははっ、確かにそうだが、あんまりうるさいと嫌われるぞ。じゃ、あとは任せる」

マネージャーは俺の肩をポンと叩いて、事務所へと戻っていった。

香取さんはマネージャーが言ったとおり、素直にあれこれと言葉にする。

さすがに悪口を言うことはないが、それ以外のことは止まるところを知らない。

「桜井さんって、本当に素敵ですねえ」

特に俺に対しては、顔を合わせることに言ってくる。

「正面きつて言われると困るなあ」

人差し指で鼻の頭を軽くひっかく。

「ご迷惑ですか？」

「なんて言うか、照れてしまって、どうしたらいいか分からなくなる」

正直に答えると、彼女は楽しそうに笑った。

「ふふっ。照れる姿もかつこよくて好きですよ」

こんな調子で香取さんは『素敵』や、『かつこいい』、『好き』

を連発する。

“少しうるさいかな？”とも思うが、素直に言葉にしてもらうのは嬉しい。

俺の彼女は言葉にしてくれないから……。

ある日、仕事を終えた俺と香取さんは休憩室でコーヒーを飲んでいた。

そこに携帯電話が鳴って、メールの着信を知らせる。

差出人はチ力だった。

俺はざっと目を通し、返事を打つことなくそのまま閉じる。

メールを返さなくなって、もう10日。それでもチ力は俺を責めることはない。

『忙しいのは分かってるから、無理に返事はしなくていいよ。私が勝手にメールしてるだけだもん』

俺に気を遣わせない内容を時折送ってくる。

良心が痛むものの、やはりメールは返さないでいた。

日にちが開きすぎて、今更返事をするのが妙に気まずくて……。

携帯電話を握り締めて、ため息をつく。

「桜井さん。顔が暗いですよ?」

心配そうな瞳で香取さんが言う。

「そう？なんでもないから気にしないで」

立ち上がった俺の腕を、香取さんがパツとつかんだ。

「こういう時はお酒でも飲みませんか？私、素敵なバーを見つけたんです」

「あ……」

彼女の誘いに、一瞬ためらった。

チカがいるのに他の女性と出かけるなんてマズイかな、と思ったからだ。

——でも、飲みに行くだけなら。気晴らしも必要なことさ。

「……いいよ。行こうか」

香取さんに小さく笑いかけた。

——やましい気持ちなんて、ぜんぜん持ってない。職場の後輩と、軽く飲むだけだ。

俺は何度も心の中で呟いていた。

連れてこられたのはひっそりとした店構えのバー。

知らなければ通り過ぎてしまいそうだ。

中に入ると壁や床が明るい木目で出来ていて、一目見ただけですごくいい店だと分かった。

「へえ。こんなにいいお店があっただ」

カウンターに香取さんと横並びに座る。

「でしょ？偶然見つけたんですけど、すっかり気になってしまっ

50歳くらいの男の人が静かに微笑んで、頼んだ酒を出してくれた。

ここのマスターだろう。後ろに流しているロマンスグレーの髪が
渋くて、かっこいい。

「俺も気に入ったよ。店はおしゃれで、酒もうまくて。マスターも
素敵な人だし」

「……桜井さんのほうが、何倍も素敵です」
俺にだけ聞こえるように、香取さんが囁いた。いつもの明るい口
調とは違う、やけに艶っぽい声で。

「え？」

聞きなれない声音に驚いて彼女を見ると、真剣な瞳で俺を見てい
る。

「本気でそう思っています」

「あの……、香取さん？」

卓上に置かれたキャンドルの炎が映った揺れる瞳で、俺をじつと
見つめている香取さん。

「さっきのメール、彼女からですか？」

「あ、まあね」

「……私だったら、桜井さんにあんなつらそうな顔はさせません」
柔らかく静かな声。

だが、はつきりとした意思が伝わってきた。

「私じゃダメですか……？」

ユラユラと明かりが揺れる彼女の瞳。
それにシンクロして、揺れる俺の心。

言葉もなく香取さんを見つめ返していると、カウンターに載せていた俺の手を彼女がつかんできた。

「あなたが好きなんです」

俺の瞳を射抜くような視線と共に、彼女の想いがぶつかってくる。
「香取さん……」

それ以上何も言えず、何も言わず、2人とも黙って互いを見つめ続ける。

手にしたグラスの中で解けかけた氷が崩れ、カラン、と小さく音を立てた。

どれだけの間見つめ合っていたのだろう。

俺はフツと短く息を吐き、グラスに残っていた酒を飲み干す。間髪いれずにウイスキーのストレートを注文し、それを一気にあおった。

そして彼女の手を取って店を出る。

俺たちはホテル街へと姿を消した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2271q/>

声に出来ない“アイシテル”

2011年12月3日15時57分発行